

川柳塔

川柳塔誌寿還曆記念句集

序

一九五七年新春、恩師路郎監修のもとに「私達」という句集が刊行された。

その序に——いのちある句を創れ——は私が、大正十三年に川柳の社会化と初心者指導と古句研究を目標に「川柳雑誌」を刊行して以来、今日迄叫び続けて来た言葉であった。そして「川柳雑誌」によって育まれてきた多くの作家は、この言葉を金科玉条としてひたむきに作句し続けて来た。

従って多くの作家が輩出したことは言うまでもない、云々……そして最後に、各作家は、本句集の刊行を契機として一步前進がのぞましく、後進はこれ等の句を範として、切磋琢磨の具とされたならば、柳道の発展も期して俟つことが出来よう、とのべられて、不朽洞門下生百四十五人の絢爛多彩な句を載せられた句集となつたのであった。

そして、昭和二十八年刊行された麻生路郎句集「旅人」と昭和三十年の麻生霞乃句集「福寿草」とこの「私達」とで三部作の形をとり、川柳雑誌社の句風の全般を認識してもらふことにしたと、あとがきに書かれている。

それから八年後、先生が歿くなられて「川柳雑誌」が「川柳塔」と改名し、十周年を記念し即ち昭和四十九年に今度は川柳塔の同人句集として「川柳塔」という題のもとに、同人三百四十有余人の参加を得て発行された。

さてこのたび本年二月を以って「川柳雑誌」創刊以来六十一年という還暦を自祝して、「私達」の発刊当時の趣旨に戻り、同人ばかりでなく、ひろく水煙抄ご投句の誌友の方達も共に参加してもらって

「川柳塔」第二句集を刊行することになった。参加者四百六十有余人になったことは「私達」以来鰻上りの人数であるが、紙数の関係上、一人十句という限定句数になったことは残念である。

然し各人の自選により、個性發揮という独特のものになったことを喜ぶものである。

路郎先生は、常に「川柳は人間陶冶の詩」であることを教えられ、「懐古」は老人のすることであって、若人のすることではない、また「足踏みするな」とも仰言って、乞われれば門下生の店頭の額にも書かれた。

我々はこの句集の刊行を契機として、足踏みすることなく、前進することを誓うものである。

この句集の刊行記念日が路郎忌の七月七日となり、先生の霊前にデイクート出来るご縁を欣ぶものである。些か蕪言をのべて序とする。

甲子五月吉日

水 鶏 庵 に て

西 尾 栞

青戸田鶴

炊飯器で今朝もごはんがたけている

流されて水も謀反を考える

船頭も川も老いゆく渡し舟

一樹一樹たどると海が近くなる

そのうえになにがあるのか絹の道

針もって女心にひたりきる

一本の亡母の菊からぬけられぬ

夢にふと影絵の街に迷いこむ

さからえぬ流れと知っている暦

これだけが私の奢り本を積む

赤川菊野

紫のふくさで絆切りました

逝く父の背冬天の星が降る

淋しくて朱いぬり箸買うてくる

孤に生きる女で帯はきつい目に

才女にはない温もりをたんと持ち

フィクション入れねば書けぬ自叙伝で

文盲の亡母が残したしつけ糸

愛憎の谷で女枯れてゆく

仲秋の月と絵になる竜馬像

幸せにとっぷりつかかり飢えている

赤木和子

女から貰う情けはてのひらに

男から貰う情けはみぞおちに

上天気神様何をもくろんで

捻子ひとつゆるめ心を解き放つ

指先で鳴る風鈴の片想い

白ワイン魚は平目でないけれど

独り言掬えば洩れる水のごと

腕枕白き径行くなかほどで

身のうちに雪が降る降る火のような

真実をかるい眩暈のなかで聞く

赤
沢
周
子

それでいいそれでいいよと雨の音

私には私の掟庭を掃く

千鈞の重み父さん無口です

天井の節穴涙ためたまま

方言が出ました課長酔いました

包丁の吐息話が煮つまらぬ

笛吹かぬ母の割烹着が白い

溺れかけました人生知りました

上り坂締め直します男帯

明日がある有ると男の手打ちそば

秋元てる

寝化粧という言の葉も朽ちました

平等のちかし男性化粧品

箸置きがヤンチャ坊主を正座させ

何処を押せばしあわせが出るコンピューター

肩の荷を降ろすつもりで金を出す

サングラス心の窓を半ば閉じ

魚庵とあえと声出して読む古看板

達筆の妻籠のひとと旅の連れ

老い三人四人と寄れば世よ去され節

いみじくも二度童子わらしとは父老いる

浅野房子

音もなく桜をちらす古都の雨

追憶が渚をかける早春譜

海鳴りを遠い心できいている

金襴緞子締めた日もある独り言

帯解いて夫婦は茶漬けの箸をとる

散歩道コスモス咲いて平和です

通り雨遠い波紋が近くなる

まどろめば旅籠のいろりにすきま風

買物に序でが多い暮の街

南天の赤い実ちらほら綿帽子

麻野幽玄

視野無限考える葦に空がある
渡る世の五常へ丸い言葉選る
音のない恐さ一人になってから
昔々の童話の中に居る笑顔
一本の芒をすすき原で選る
敵に取られた駒に王手と攻められる
温室で育った冷蔵庫のメロン
引金に指掛けたまま説く平和
ラン咲いてやっとメインの座に出され
寝不足も癒して風邪の床を上げ

朝山千世子

吹雪く夜を序の舞一氣に読みふける
さくら前線余生に虹をかけにくる
土筆野の逢いの夢は永遠に生き
藤花踏んで青春の夢消してゆく
よいコンピ気の向く旅の温泉が溢れ
ラムネで一刻明治生れが蘇る
萩ききょう余生を飾る彩はなに
逝く秋や時効の傷を温める
趣味多彩傘寿の芸に燃えるもの
終止符を打つ人生かバラを剪る

芦田静江

流れ星湖上で見てる遠い夢

木曾の山月が浮き出た茶事の宵

銀盃の光の奥は妻が知り

すずめの字教えてくれる孫得意

石の段蝶が舞ってる白い足袋

甲斐性のレットル遠いすねかじり

女三人月が覗いた露天風呂

引出しを開ければ多弁になる机

線路わき悲しい花が入れ替り

土の奥こだま聞える兵舎跡

安達清路

苦悩する日も蓑虫のぶらぶらと
どこまでも静か心電図が狂う
コンベヤーで流れ人形死んで行く
青年の積木へ父も来てすわり
お陽さまも遊んで高い砂の山
庭木にも竿がかかった青い空
野の菊へしゃがんで遠い日を語り
山桜亡父を重ねて咲きました
信じれば人うるわしき花の彩
蒼蒼と一色一生父の庭

尼

緑之助

草のびて減反田の愁霖賦

白鳥来律義な旅に冬連れて

今一步詰めが足りない敗走賦

ああ大地何故人間の血欲しがるか

変幻が多くて翔んだ流れ星

コンバインガタガタ叫ぶコシヒカリ

同居して長寿の愚痴は火吹竹

満月の欺瞞蛙の二日酔い

定退の無趣味はのびたゴムバンド

動物科脱し切れない尾骶骨

天
崎
只
士

昨年と同じ反省書く日記

戻りたい若さに妻が嫌と言う

カブト虫妻に黙れと言ってくる

珍客に見直す妻の語学力

愛用の辞書残し去る定年日

肩書きを消しきってない名刺出す

会いに来て無口な顔を見せただけ

自信持つ男は隅の席にいる

希望欄書くだけ書かし無視される

阿弥陀彫る十指が更生誓うてる

阿萬萬的

京都スケッチ

清水の舞台そこから京の春

花ミズキ真昼の水の音といる

伏見人形噓を知らない朱が塗られ

のぼり窯京を絵にして立つ煙

ここからは歩かす風の匂う道

ちと地味な図柄桔梗のきれい庭

落葉拾うて京のはずれのひとり旅

枯蓮は尼僧の正座に似た色か

鯉向きを変えてそこだけ動く泥

荒谷シゲヨ

音知らぬ耳のメロディー耳鳴りよ

ものはもうなんにもいらぬただこころ

楢山の齢いたわれ生かされて

少女にかえり夢二のロマン読む

老い多情人恋い世を恋い未来恋う

外孫はまぶしさを増し遠くなり

句集積み重ねわが城豊かなり

百歳を夢見て初春の薄化粧

川柳の新芽が燃えてくる卒寿

浄土への日は花嫁の思い抱く

淡路ゆり子

いいことがあって念入りに化粧する

いとしさの記憶を拾う旅独り

生涯を母は雑用強いられる

乳房開けさすらいの子を呼んでみる

指切りを嘘だと知った日の嘆き

見送って哀しい機を織りつづけ

空白の頁を増やす雲が舞う

義理ひとつ欠いて小さく寒い部屋

彼岸には山を下って亡母が来る

確実に行きつく墓の花を盛る

安藤 寿美子

末法の世の新聞をたたみけり
史書百巻時の流れがあるばかり
黒潮にのる椰子の実と丸木舟
思い出すのは逆ろうた事ばかり
くちなしの白さへ祈り深くする
炎から生れ白磁の壺となる
内へ内へ自分を捲いてゆくも秋
半透明な思索のごとし葛湯練る
才女でも悪女でもなく川の水
二人とも無口になって雪しきり

安平次 弘道

峰打ちの慈悲へ男は墮落する

花の種まいてきれいな夢を見る

髪を切る女悲しい過去を切る

保護色を信じています平和主義

知恵の輪がとけない父で雑兵で

自作自演ブレーキだけは確かめる

翔びたがる妻から届く果し状

罪の重さに吃水線が深くなる

秒針が進む地球よ廻らねば

そろばんを弾くと勇氣消えてゆく

飯田悦郎

掘り下げた話はしないコップ酒

民謡に平和がつづく槍の舞い

電工はもったいない程テープ巻く

夢の日を叶えてくれる種袋

突き放す勇気がなくて子を背負う

攪もうとすればトンボに羽根がある

老いてなお前輪駆動へ油差す

愛情の流れに乗った騙し舟

宇宙ブーム光ファイバーが狭くする

笑うても泣いても絵になる若い人

飯 森 泰 世

還暦はまだまだ若い白寿まで

手のうちに昔の想の残り布

孫四人入学卒業身がほそる

へそくりを出して老眼鏡をそっと買い

気を沈めやっと思した赤の糸

音読を忘れて明日の老いを知る

女面に心のうちをのぞかれて

おぼろ月あなたと歩く晩い道

聞いてよね愚痴ではないのよただ話

人間は角があるから面白い

池
森
子

漬物の味に女の意地をみせ

夫婦という切符でしばっている自由

輝きをなくした二人の青い鳥

見栄でない私の素顔に春の風

寒い日のもつれた糸を解く親子

鍋料理囲む顔ぶれ又同じ

四捨五入された端数に愛があり

母と娘は合せ鏡の中にいる

トラブルをさけて日陰のかたつむり

初恋の花びらが舞う日記帳

石川 侃流洞

水すまし流れにまかせ小休止

年寄へお布施の相場聞きに行く

初席へ出る一本の顔つなぎ

花に埋れ花屋季節を知らずいる

弱いから用心してます無欠勤

献血の一足先を蚊にいかれ

ギリギリの線で女は夏を着る

五十歩百歩とんでもないこと倍違い

遅刻して来れば上座があけてある

クレオンの汽車が襖を突っ走る

石垣花子

ブランコの力を抜いてからの揺れ
荒れながら少年優しい鞭を待ち
言い勝った胸にふくらむ鉛色
日の丸を揚げる仲間がまだ残り
遺るのは妻と決めてる遺言書
拝観料値上げ伏目のご本尊
心臓を動かすだけの匙加減
首の座を一番知ってる労働歌
千切り絵の指先紙と妥協する
城跡と月の話は長くなる

石 倉 芙 佐 子

人恋えば炎ともなる雪女

雪さんさ男と女の紙芝居

人形の涙は嘘としか見えぬ

針山の針一本に騙される

勇み足叱る時計は六角で

世を拗ねたとんがり帽子は唄が好き

このままに散って悔いない彼岸花

窮すれば一枚の皿割れる音

石仏寝たふりをする月の夜

旅つづくラストダンスはあの人と

石 手 向上庵

脊を向けてヒソヒソ次の弾丸込める

流れ星あれも飛び下り自殺かも

お人よしだから毎夜を高枕

温顔の石仏あばたのお肌見せ

ローカル線車窓へ不意に墓も出る

馬にでも乗ったつもり肩ぐるま

吊皮にすぎり見劣る吾が脊丈

舞台への僅かな距離を三味に乗せ

病人を覗けば不意に眼を開き

風邪の順来たかくしゃみが続けさま

石手武

生欠伸堅い話を囁んでいる

苦勞性つまらぬ事に寝そびれる

せんせいに下駄を預けた陳情書

劇団の倉も土塀も絵ですませ

頼りない手の平すぐに豆が出来

バス観光ガイド追うのに息が切れ

ご破算が恐い笑って我慢する

能面の一分の隙も見せず舞う

無造作に切る氷屋の目分量

マイペース呑気な奴と人は言う

石原淑子

母と子の夢もふくらむチューリップ

シクラメン女の情を抱いて咲き

一つずつ灯りを消して夫を待つ

いつになく素直で可愛い夫の風邪

お恥ずかしい角出す槍出す私です

一騎打ちしている父と子の将棋

数学を子に試されて眠られぬ

さらさらと流れる川の浮世節

ささくれた指へ光を増す小石

こだわりを捨ててダルマは起き上がる

板尾岳人

歩いても歩いても山山の中

湖に捨てる　と沈む知恵袋

狸には騙されやすい父の靴

他人の死カウスボタンをつけながら

駅長の机の中にある雪崩

草の芽を踏まねばならぬ御所車

人形の家から見える母の櫛

峠から他人行儀な風が吹く

二三日留守をしていた佐渡おけさ

峰歩く男はピアノ弾き乍ら

市場 没食子

初姿富士は千古の綿帽子

発すれば寸鉄人を射す無口

四十の詩寂しいものに触れはじめ

来る人が来て去に元日黄昏れる

助平な話せんよになってボケ

老夫婦浴衣の藍のように剥げ

苦笑して夕の夢を反芻し

日蓮も西郷も好き酒も女も

フラスコの底で溶けよか溶けまいか

供出の鐘が還った昔の音

市樂種子

家買うて夫婦で引っ張る火の車

聞き上手本音吐かせる酒の席

相席の気になる貧乏ゆすりかな

毛皮よりエプロン似合う妻が好き

パチンコも入ってる時はハナ歌で

限度越え薬が毒になるお酒

初めての河豚食べ命の事思う

許すとは言わずに孫の産着買い

書き忘れ咲かねばわからぬ花の種

頼まれて座る番台目のやり場

伊藤春子

正月の空凜として脊なのはす

母のやさしさ父のきびしさ海が好き

果てるまで虹を追いたい花ざくろ

倅せな指で涙はまだしらぬ

墓参り昔がかえる人に会い

古写真もしも戦争なかったら

冗談冗談軽くいなして本音かも

円卓の椅子は本音を言いたがる

秋の蝶亡びの舞のあとやさき

稲妻の明りに二人裁かれる

糸谷春草

退院の日の薄化粧女なり

母子家庭母に散髪してもらい

二十一時悪友電話かけてくる

遅しい海の男の爪を見る

小豆島もろみの匂いする通り

補聴器でつまらんことも聞いており

どう工面したのか会費持って来る

花火見る姿浴衣に団扇持ち

不景気の話屑屋に聞かされる

大阪の川を彩る夏まつり

稲田豊作

首枷をしたままオヤジ酔うている

かいつまんで申せば金の要る話

逃げ球に三振あっけらかんの恋

玉の肌という日もあったサロンパス

顔立ててあげます妻の憎いこと

たまの酔い妻よ家計を言う勿れ

背な一つドヤしてからの褒め言葉

別居さす別居させると嫁探す

どん底で握りあうのが仏の手

年金が長生きしなよと囁いた

稻葉星斗

初釣りを祝う小舟に注連飾り

日本中釣り行したい夢を持ち

釣り談義夫唱婦隨に当てられる

寒鮒を一匹釣って風邪を引き

連休は男冥利の釣りの旅

山ざくら浮子にもかぶる花吹雪

アユ釣りの名所も何時かダムの底

冗談で牽制しあう釣りの会

鮎釣り師忍者の如く瀬を歩く

雑魚たちよ大きくなってまたおいで

稲葉冬葉

人を恋う環状線のように恋う
かくれんぼひとり置いて帰れない
息子の未来に私の影はない
雨だれのひとつ私を捉えてる
真白い紙にごめんなさいと書く
香水と男を妥協点におく
又少し女がきえる誕生日
この街の隅に金魚の墓がある
地下街へぬける男の無表情
残されて終着駅が遠くなる

稲本凡子

夢を盛る皿の浅さがふと佗し

倅せを攪むこの掌が薄すぎる

保護色になって過去には触れずいる

半生の歴史を秘める櫛の艶

炎ゆるもの命の限り持ち続け

一瞬の宴落葉は乱舞する

座布団の温みへ余情追っている

眼鏡外せば現実へ舞い戻り

散る花のかなしきさだめ愛凍る

挑む時女周囲を敵にする

井上照子

散歩道ドラマのすじに吾をおく

老いた母昔を語り柿をむく

釣書に税込みで書くお給料

冬山の命あずけた穴で生き

せがまれて甘酒たいいた老母の風邪

レッスンの涙の果てのトーシューズ

奥の手のその奥の手がいるピンチ

花言葉たずねて花を哀れがり

捨て石をいくつも親であるかぎり

箸の先推理を追って弧を描く

井 上 柳五郎

狆を抱く女の鼻をぬすみ見る

俺の名をお隣犬につけて呼ぶ

知らぬままわからぬままでこうきめた

知らないでよかった知ってから悩み

間をとった余白と知らず埋めたがり

右腕の自負率直に苦言する

振舞酒こびぬ苦言がまだつづき

傷つけて疵つく言葉のブーメラン

一目惚れされてガラスの靴をはき

時刻表矢印ばかり故郷の駅

今 西 静 子

算盤を離れて今日のとおりぬけ
溺れてはならない愛で旅に出る
空っぽの心に時は過ぎて行く
盃を受けて聞き耳立てている
花束を抱えて挨拶涙ぐみ
多数決ためらいの手もまじる
出世して無学の母を誇りとす
鶴の恩悲しいまでに美しい
薪能現世にするネオンの灯
人生航路柳になる日ならぬ日も

岩田美代

秋の水人それぞれに昔あり

秋なれば人間くさい人が良い

秋風に騒ぐは木の葉だけでなし

残り火よ新発売を考えよ

三分粥五分粥それから人恋し

年の数かぞえた豆は食べないぞ

春そこに私の音痴治りそう

珈琲がうまくない日の人嫌い

すばらしいプライバシーだから覗かせる

生きて行く美を説いているえらい人

岩田三和

酒のます手早い母のドジョウ汁

春近しゆるりと動く沼の鯉

高僧にうつる浮世は丸い虹

山にほれ山に死んだを連れもどす

冷凍魚アツと叫んだままの顔

皮つまみ松葉をプツリうみを出す

母キトク新幹線のおそい事

若葉食う青虫春を食いきれず

まぶたから八月六日消えぬ雲

草の中でコオロギ達の世界観

岩 本 笑 子

風呂上り四人を手で着せ口で着せ

雪こんこんこたつのミカンばかり減る

どん尻のドンでもよろし瞳がきれい

腕組んで歩く坂なら楽しかり

小さくとも小さくとも吾子の手が温し

富士仰ぐこの子と歩む道ぞけわし

坂登る蝶々と登る子と登る

墓碑一基守るが如し松の枝

片腕でカニが歩いて見せるなり

風の彩おんな坂なる乱れ髪

岩 本 雀 踊 子

ガスタンク石器時代の絵を描こう

峰打ちの痛みは父の慈悲だろう

漁火に帰らぬ父の墓がある

定年の拍手を妻と子にもらう

メダカの死さかなの匂い持っている

凧の糸亡母に逢いに行く長さ

お多福の妻だが私の勲章だ

女を泣かす駅の時計は正確で

時刻表廻り舞台が駅にある

花札へ旅芸人は風になる

上江洌
勝子

失うた若さいとしく喜寿祝う

派手な柄齡は忘れることにする

故里に夫婦の若さおいてある

連れ立つに妻の好みのタイの彩

面ざしの似て亡き母の齡になり

肩すこし濡れても嬉し友の傘

これからはどう翔ぼうとも巢立ちさせ

ご時世の孫にも学ぶこと多く

湯呑手に老いの話がまだ続く

忘れたい忘れたくない一つの死

上田 登志実

故郷に往復をした紙袋

石垣に封建性を垣間見る

菖蒲咲く地唄舞とも見る姿

宿浴衣裏着て飯をたべる人

誰が為に燃えるか楓真紅なり

甲羅乾す亀に見られて日向ぼこ

いつの間か渦中に入り旗を振る

ヘイヘイと腰低うして財を成し

浮浪者で福耳してる人を見た

考える像はどのような夢見てる

上田佳秋

木を伐ると山がかなしい顔をする

午前さま昔は起きていたものを

大阪の句を大阪駅で考える

直球のサインを妻はもう出さぬ

夕焼けを高層ビルが邪魔をする

盲導犬人に情けを教える

窓際へもう後輩が廻って来

丁寧な言葉で首を切る社長

忘れ得ぬ戦火の恋を秘めて老い

釣竿を磨く釣場に行けぬ老父

上原逸

年明けて五十鈴の橋の初渡り

節分に豆をまかぬか親子病み

日溜りに副祉論じる老い二人

痛いと言えぬろう者を手話で知る

雲流れ昔を語る古時計

迎え火にまたたく妻の一ツ星

青春を戦地に置いて来た平和

萩こぼれ戦友仲間一人逝く

柿熟れて女もうれて秋祭り

篤農が田畑を守る過疎の里

植松慶子

痩せこけた難民の児の瞳渴いてる

おかめ般若が背中合せのわたし

たそがれの空へ独りになりによく

女が褒める瞳の中のアイロニー

和解するまでのあれこれ雪溶ける

鍋囲む温さ多くの箸がある

片隅の一人のドラマ知る日記

初雛を娘には買えずに孫に選る

輝いたページもあつた吹きだまり

菅公を想えどここは雪の国

植村客遊子

大安の使者つつがなく酔ってくれ

新券で包む水引派手にする

正直で押すから係長どまり

ひら同士うまが合ってるコップ酒

友情が鬨魂となる仕切線

学割の片道切符にぎりしめ

税金に追いまくられている稼ぎ

姉さんと呼ばせ成る程若く見え

箸袋何やら書いてにぎらせる

ウイソクを意識して来た厚化粧

植山武助

続編がない人生というドラマ

アベックで行く老妻のペンダント

賑やかな人に魅かれて行く無口

何時の間に鬼の居ぬ間の鬼にされ

子供等の思考の外へ住む夫婦

文箱の底に昔を置いてある

ふるさとに戻り都会の仮面脱ぐ

老夫婦今日はピフテキ食べてみる

二度とない青春だからラッパ吹く

一〇〇円で子供の世界動き出す

牛尾緑良

一人酒飲めば銚子を持て余す

灯をかばう夫婦の小さな手

毒舌の温みが読める妻の位置

悪妻も愚妻も僕の反射鏡

振り向いて妻の歩幅をたしかめる

子育てを終えた小さき乳房かな

四面楚歌ひとつは妻の顔である

エプロンの妻に心許しとく

神様を味方に妻の逞しさ

口笛で妻の愛唱歌をうたう

内 芝 登志代

月冴えて地球の危惧など信じない

ニューヨーク昨日の私を脱ぎ捨てる

水澄んでとても倅せだとおもう

計算がはいつて愛が枯れてゆく

職人の腕へ溶けてゆく道具

戻れない恋ならいつそ燃えつきよう

自画像を少しきれいに描いておく

砂糖壺の蟻が逃げ場を捜してる

やわらかい声に失意を励まされ

次の世もきつと美人に憧れる

内海幸生

生きてゐることの 一つに酒の味

金借りる声は男を捨ててゐる

ペンペン草棲みにくうても生きてゐる

咲き誇る花は明日を疑わぬ

父に血をノ轢いたあんたも拝みます

母の訃にそんな莫迦なと言えるだけ

そうれ見ろ蟻のなかにも遊ぶやつ

一錠が命ささえるヤジロベエ

旅支度終えた紅葉が肴とは

そつとしておけば毒草などでない

有働芳仙

行先を告げずに出たい用があり

足音があるから安心して眠り

どうにでもなれと鳳仙花が弾け

新聞をたたんで今日へ向き直り

雑然と記者の机は生きており

酒臭い息で宿題解いて呉れ

ブランコへしばらく過去と揺れてみる

2・3分違う夫婦の腕時計

原子炉の中で伝説燃えつきる

誰が押す世界を灰にするボタン

宇野昭代

心にもないから齒の浮く世辞を言い
マネキンの着ていた時は似合ったに
握手した温みが胸の灯をともし
いい話はじけるような笑い声
看護婦の不機嫌ホウタイきつすぎる
返信の来ないポストが夕焼ける
待っていたように辞表を受理される
古日記忘れた痛みしゃべり出す
リハビリの夫に合わす妻の足
姑になる花束を抱かされる

浦野和子

うつそ身か化身か菩薩の名残り紅
繕うて繕うて来た母である

一匹の蠅が白壁白くする

美しく訣れて電話はもう鳴らぬ

葱坊主言いたいことがたんとある

種を播くやさしい土のあるかぎり

足跡を残す一枚の絵を描こう

非売品だから欲しくもなってくる

どうにもならぬ恋が男の背に溜まる

血の流れ子だけを攻めることはない

江口度

水仙の笑顔北風から貰う

トンネルの出口で種子を売っている

コスモス見てる雑用を思いだす

合格をずきんと聞いた膝頭

ポケットの小銭が唄うのん気節

猫目石見てる決心変らない

レントゲンみんな素直に息を止め

ジューク・じゅく・塾だんだん個性消えてゆく

日進月歩そうかお前も人力車

子育ての済んでダイヤの話など

榎 本 吐 来

他所者へ波は素直に語りかけ

妥協する五十の知恵の阿呆らしさ

選挙戦一人で橋を架けたよう

南北に同じトラジの咲くものを

俺が一番オールドらしい終電車

妻子持つぎりぎりのゴマすっておく

通信簿大物の期待まだ捨てず

十歳若い亡父の写真に睨まれる

雪頻り今日退職の靴を履く

父と子に妥協が出来た嫁が来る

円 増 貞 子

長靴をはいて女を捨てる朝

咳やまぬ吾が背に嫁の手の温み

のど元を過ぎてしんみりわかる味

ほどほどに呆けて家族と丸う生き

今朝採れたばかりととどく茄子の彩

良く行けば行くで思わぬ妬みうけ

糊きいたゆかたはがして旅の宿

どか雪に足はばまれて閑古鳥

見栄を張り隣に負けぬ無駄を買う

とぼけたりとぼけられたりして夫婦

大江竹子

黄緑の風さわやかな詩となる

土に生く今日も畑で暮れてゆく

思い出の多い女の一人旅

わだかまりとけた風鈴だとおもう

あの人と歩く必ず雨になる

思い出が父なる海にみちてくる

企みのある盃に正座する

ひとり言一気に坂を登り切る

母が居て祖母もいまして道しるべ

原点にかえり静かに歩を進む

大江雅子

肌にふれましたまことの愛として
子にバトン渡し余白を失わず
もう一度私に聞こう道しるべ
思い出の幸せだけのペン走る
すばらしい約束緑の山仰ぐ
喜寿の宴酒にも花が咲きました
海静か老いの二人のまろき夢
老い二人杖のリズムに合わせます
生き抜いて静かに暦めくる日も
人生の坂踏み切れた神の杖

大川幸子

感傷にひたれと枯葉散りかかり

理屈では割り切れるのが恐しい

聞き飽いた文句にころりだまされる

心にもないこと舌がしゃべり出す

肩書がふっと重荷になる或る日

どうしても甘い言葉が好きな耳

旅の空ちよっぴり悪女ぶって見る

ほどほどの捻子巻く妻に逆わぬ

嫁った娘の部屋の灯りをとす父

急ぐからなおファスナーにすねられる

大坂形水

朝の靴揃え昨日を赦してる
帰るには早い時間に会終り
責任者時計を少し進めてる
単細胞の男自信に満ちている
特選売り場を茶飲み友達らしいのと
コーヒーに誘いコーヒーだけで出る
解き捨てた帯がトグロを巻いている
虫跡のない偽物で見破られる
拳銃を提げているから狙われる
蛇が蛇狙う生きとし生きるもの

大塚節子

お茶を喫むことから始まるお付き合い

ビル工事又抜け道が一つ消え

お互いに知れては困る額の裏

義理堅くきつい冷え込みお水取り

無人駅花だよりあり灯一つ

電話口わたしわたしでわかる仲

そら豆を腰に泳いだ海は無く

鼓笛隊祭の街にして通り

にらまれて一声かける大向う

旅人よ素朴に踊れ郡上節

大野武太

自画像の頭髮黒くくろく塗る

甘酒やおんなばかりの中にいる

この努力いつか本物越していく

忙中の閑全集を読破する

忙しい貌へ承知の無理をいう

座右に置く一冊人ときあう法

大阪弁冴えずこのごろさっぱりだ

何となく愚兄愚弟にある温み

結局は少しとぼけて無事である

悪人になれず小さな店をもつ

大原葉香

商人の意地張り合うてのれん街
目で耳で学んで学歴などいらぬ
建売りは手抜き塗り込み化粧壁
石地蔵雨に目ざめた顔で佇ち
三面鏡泣けば三つの顔も泣き
風下にいるから苦勞許りする
コーヒーをのむのに四面楚歌の位置
原因を問うまい傷が深すぎる
要領よく泳いで敵のない男
良心があるから政治家にはなれぬ

大矢十郎

日中友好許されし事のみ多く
もし保有するなら不発の核でよし
湯舟から見る手の甲は父のもの
父に似て来たありがたさ情なさ
九十センチ下がって弟子の影におじ
先生との対話ハイより記憶なし
なに文句あるか靖国へ総理
火の気ない筈はあるまい火の車
骨拾う震える箸とはむ箸
じわじわと年金を吸う玉貸機

大山と金

十丈の飛瀑ふたたび春の水

女の雛のしもふくれなる顔がすき

もつれ蝶飛び去り一つ戻りくる

差し出したままに名刺が放つとかれ

謙遜のうちに自慢が匂うなり

時代ですなァ老人同士言い

同席の夜汽車の客が話好き

犬ジョイも家族の一人クリスマス

大掃除小休止から一人消え

真っ黒に降って積れば白い雪

岡 井 やすお

船渡御へビルの屋上鈴生りに

大吉を引いた社へ忘れ物

高校野球ニュースとおしんだけ食えず

デパートで畳を敷いて呉服市

南極から帰ってぐるり皆美人

古里の渡し何時しかアーチ橋

隣席の濡れ傘徐々にズボン攻め

二時間のテレビドラマで良き夜長

奥の手は最終審へ取って置く

老妻へマッシュマロ三月十四日

岡田ふみ

母の選った柄は後から好きになる

老夫婦明るい話題を選っている

娘の家のお酒は禁酒を忘れさせ

その他大ぜい中の一人が私です

良い季節留守番ばかり頼まれる

水郷でゆらゆら歴史と遊ぶなり

飴一つ舂めても肥えるかと思ひ

早起きが手持ち無沙汰な冬の朝

手作りの封筒で来る母の文

もみじ手に祖母年金を惜しまない

岡 林 千 鳥

いらだちを蠅一匹にたたきつけ

ため息をそっと包んだ慰斗袋

割り切ってしまったえば風が吹きぬける

相槌はうたず悪口聞いてやる

冒険をしなさい月が青いから

横向きにすこし歩いてみようかな

美人薄命百まで私生きれそう

悪戯な風で女が翔ぶかまえ

結局は親の負けですお立酒

理想には遠い生活を温める

岡本清水

還暦の妻達者なり豆を撒く

幾重にも膝を折ったが成就せず

一徹の後押しをするキャリアかな

停留所きれいな人が立っている

亭主とは元気で家には居ぬがよし

寝たきりになりたくのうて地藏さま

ライバルが倒れ私はろくでなし

焼きいもの匂いほんわか風呂が沸く

よき人に出合ってからハイポーズ

年金も四度目光陰矢の如し

岡 本 天 平

妻今日も肌着かくれて脱いでくれ

傘になり杖にもなってくれた妻

三十年妻の料理が口に合い

田舎弁丸出し陽気な妻という

一寸した善意が小さな記事になる

つまずいた石に油断を叱られる

ほっといておくんははれようすねる

うま過ぎる甘い話に落し穴

五重丸貰った習字が宝物

約束の百点孫が取って来る

奥
礼
子

絵筆とる心も満つる八重桜

序の舞に魅せられ夜も更けてゆく

命日を忘れるほどに今満ちて

風邪引いて夫の作る粥の味

雑草を抜くには惜しい花をつけ

五指折ればまた川柳と子が笑う

おとし玉ちよつと子供に借りておく

ぐうたらな男養う女居る

ガラス玉つけても金持光ってる

水道の水音さえも涼を呼ぶ

奥谷弘朗

焦点がぼけて輝くものがない
貫い子の親に成り切るむつかしさ
辻つまを合わす手腕は別に持ち
和を保つための反対だつてある
借金に恥と信じている頑固
決心をにぶらすほどのいい笑顔
見るよりも踊る阿呆を取る世相
銃よりも私はペンを武器にせん
句碑除幕男の花道かもしれず
発言がたたり役職背負い込み

奥田みつ子

さし向かい答えを逸らす箸の先

大阪弁山手線でもよく喋り

私の同心円に誰を置く

はじらいの裸婦の指からこぼれ落つ

飛行雲熱い想いがいま届く

長城をその眼にとどむ武官傭

妹を叱ると姉が先に泣く

へそくりを息子にそっと洩らす父

熱帯夜浴衣でチンと坐る姑

車窓から虹を眺めている夫婦

小澤幸泉

表紙だけ変えて売り出す週刊誌
自由さに慣れた社会がおそろしい
道端の石に短気を笑われる
酒焼けの鼻だけ残る父の顔
半分になったグラスの酒の味
井戸水に冷えた西瓜の味を食べ
鍵穴の向うに見えたあるドラマ
割勘という安心についてくる
たいくつを恋の炎でもやしたい
母さんの手料理かえたコマーシャル

落 合 正 江

初鏡姿写して考える

なつかしい人と呑む酒腹も割る

都合よくかぜの寢床へ母が来る

遺品分けはじめをつける父の筆

外れてゆく子に父母の鈴が鳴る

老いて尚夫の帰りを待ち侘びる

あたたかい友温かい筆の跡

洗淨の写経に流す罪一つ

単純な風の誘いにとげふくむ

掘り過ぎに穴で熟年思案する

小野克枝

凡人の野心放さぬ縄の端

鬼のひげ伸びて優しい顔になり

鬼になれなくて吐息をためている

敵を待つ人だと知らぬ花時計

腹が減り敵も味方も無く食べる

吐息聞き飽きてマネキン眠くなる

相づちを打って思想に叱られた

湯の中で女は齢を考える

天に舞う花火見事な引退だ

少し照れながら母さん有難う

小畑幹子

左遷地の地図を一応妻と見る

決心をした目で父の前に居り

新しきままに残れり亡夫の靴

白髪の人美人に貰う白い菊

実るもの無くなり秋の陽の染みる

返事した後の迷いが深くなり

失意の日支えた本を繰る夜長

大声で笑って見ても一人きり

五十年空気のように愚痴を聞き

これまでの気ままを詫びて嫁ぐ朝

嘉
数
兆代賀

鈍行の温もりといくひとり旅
飢えた掌に情けがすこしづつ溜まる
齒こぼれの櫛より闇が深くなる
善人のいつまで白い画布を抱く
貧しさを分け合う血がふたつある
しぐれでも歩くほかなきおんなみち
文字盤の上を歩いている瘦れ
狂いはじめて一つおぼえの子守唄
一人にはひとりの掟陽が沈む
決断の彼方に菊は白く咲く

笠
嶋
恵美子

さざ波の如きときめき忍び逢い

コスモスの思いが深くなる夕べ

雨の音枕に渗みるひとりの夜

木屋町の雨は蛇の目が好きらしい

笹舟の行き着く先の恋の果て

秋深し妻の視線が遠くなる

妻の爪いつも短く切つてある

初投票子が世の中を変えるかも

家中の電燈つける淋しがり

さよならを言うのはよそう今日は雨

笠原吸江

有難や二度も甲子に巡り合い
寂しさをまぎらす酒は冷やでよし
喫茶店でポケットベルが鳴っている
仏の写真羽織の紋が違っている
掃除機の音に居心地悪くなり
車間距離までもって妻の独り言
恍惚となっても妻は妻である
妻病んで市場に顔を覚えられ
とんちんかん言うても又かと笑うのみ
文化の日菊は王者の顔となる

檉 谷 郁 子

禅寺に小野小町という菖蒲

カーネーション捧げる人なく瓶にさす

蝉しぐれ負けん気にいる裸の子

富士山のふところだって鬼は住み

妍競う隅にひっそり己が作

書展から出ると真白い姫路城

選挙など知らないことと吠える犬

航跡もかもめも白い連絡船

南座の古さを語る屋根の色

立ち並ぶ北山杉は兵に似て

櫛 谷 寿 馬

黙っていても妻はなんとかしてくれる

神前で殺し文句を考える

四十年ですねと妻が屠蘇を酌ぐ

七草や徒然草を読み了えり

花屋にはなるまい花の飾りすぎ

ダルマ画くときはダルマの顔をする

檜山に坐ると横に妻がいた

朝顔の浴衣素足に咲いている

乳呑児は横目で母とにらみ合う

胆石コロロ憎みきれない丸い音

鍛原千里

春風といっしょに女脱皮する

組紐の強さ女の中にあり

現実にもどる時計のネジを巻く

空白のページは私の宝物

妻の座をぬくめて蜜を貯めている

バックミラーに自分の幻見してしまう

ペン持てば真実の壁につき当り

恋知らぬ紙人形のうすき胸

旅馴れて伊達巻き一本入れてゆく

雨が止んだら私だけの旅に出る

片上明水

子が巢立ち鍋がだんだん小さくなる
ペダル踏む今朝の豆腐を買いにゆく
補聴器がやっぱり邪魔な秋の旅
お悔みに行くハンカチを小さく折る
囑託の勤め小さな判で足る
社を辞めて女茶漬の店を持つ
表札を外すと父の名が消える
孫ふたり童話の種が尽きそう
音絶えた人にも出逢う花の頃
さいわいなことに女房も鯛好き

加藤貞山

神風を給え砂丘のあるかぎり

大阪で草餅見つけ春を買う

春愁をどこへ埋めよう砂丘行く

雪今宵静かに積もる銀世界

雪折れに泣けて梅ヶ枝床に挿す

後継ぎが帰り店舗の若がえり

鳥取は雪と聞く夜の遍路宿

老いて子と雪道を行く歩が揃い

風紋に足跡のこし孫と行く

入院の妻へ内助の恩がえし

角野かず子

いつまでも割れぬ風船憎くなる

感謝状読めずに死んだ伝書鳩

よい名前持ってる橋で待たされる

姐が許してやれとくり返す

帰るのを忘れたように昼の月

似た顔になって夫婦の杵にいる

モナリザの微笑が映える鏡買う

国境がなくて気ままな雲がゆく

橋の上でためらいを消す風にあう

まん中の島で甲羅が干しやすい

門
脇

楓

浦島太郎が現われそうな春の海

紫陽花の森でむかしの人に逢う

神様の私生活には謎ばかり

艶のあるみかんは信じ切れないな

ピッカピカに心を磨いて生きようよ

青い鳥ほら貴方の後ろにもいるよ

三面鏡のひとりが嘘を言っている

朗らかな酒なら喜んで酌ごう

信念を貫きあじさいは青に

泣けるだけ泣いて朝日と笑おうよ

門
脇
かずお

神棚があまりに静か過ぎないか

地球儀を更に傾かせる気だな

一本杉にはきつとある咽喉仏

風ばかり見る人形の片想い

恋のおわりも真っ白な角砂糖

ブランコを降りようとせぬ青い風

天井に今夜も笑われてしまう

妻の涙に一度も勝ったことがない

父の壺に風が潜んでいるはずだ

最後には心に吊す母の鈴

金井文秋

いつでも読めると本屋は売れる棚へ詰め

TVガイドがよく売れている本離れ

危なかしい福祉の中の長寿国

人間から会話を盗った販売機

ごみ箱にある情報の落ちこぼれ

引き出しをなんべんも抜く物忘れ

食べるだけでよい気になって覇気失せる

無駄な灯をこまめに消して嫌われる

はげましを受ける立場になるひとり

ひかえめに立てる老後のスケジュール

金 戸 瑞 鼻

下請けの下請けがきて穴を掘り

合格の目の輝きを信じよう

思惑があつて密に名をつらね

ぼろくそにいつて寝かせる妻の風邪

添加物のぞくとただの砂糖水

勲章がほしいと書いてある名刺

渡りぞめすんでそろそろ総選挙

夫より母子年金のたよりがい

賞金を邪魔くさそうに勝ち名のり

孫がきて俺の女房こきつかう

金川満春

愛の渴老いの余白を捲きたてる

手作りか受けて乗り出す過疎の村

小雪舞う大寒お前と二人酒

娘の機嫌今朝快晴でソプラノで

百迄も生きたら日本へ相済まぬ

ゲートボール俳画川柳ワンカップ

世の流れ二宮精神疎まれる

世の流れ老人クラブジャズダンス

引算の名手がずらり大蔵省

日本に菊が生きてる注蓮飾り

神谷 凡九郎

都合つかんかい ナ アンタあかんナ

どっちも嘘言うてない当事者で

そうなんです ヽ人間なんです ヽとしか言えぬ

成る様になる サ素晴らしき結論よ

揺れ動く心 マツタク人間だ

自分も人間 人間嫌いなのも自分

そんな女にゃ自分を主張出来ないの

男と女神様 イタズラモノだん ナ

裸一貫 サスが女御はんだす ナ

言わしときまひょ男は先に逝きなはる

神
平
狂
虎

喉仏この人の嘘見える距離

傘叩く冷笑がある冬の雨

信念をねじ曲げられてからの闇

土下座する神の鼓動が聞きたくて

面白いですか他人を傷つけて

風船を見ると割りたくなる男

秘密持つ子は乗せられぬ縄電車

秋の樹は皆演技派で救われる

鬱の日のために引く潮満ちる潮

庇いあう姿勢で風の中に佇つ

紙本松女

喝采に遠く車輪の軸となる

初耳に女三人よって来る

決断のパイプゆっくり火をつける

かじられた臍なで乍ら子をおもい

泣き笑いくり返しては生きつづけ

名物にしてはならない被爆絵図

不用意の言葉を笑うバラの花

藁屋根も消えて民話も遠くなり

名犬は吠えるチャンスも心得る

先生の冥利ですわるクラス会

河合茂雄

どちらかに歩幅を合わず夫婦駒

命棒の二つは持てぬ渡り鳥

先頭を走れば走る程孤独

切符握って一寸先を考える

闇討をかけて男の名を捨てる

城持たぬ男に重い馬印

風紋の傷の深さも風が消す

影武者は所詮味方のない命

馬鹿にされ馬鹿で通した丸い石

こんな世に誠の旗は誰ぞ振る

川上溪水

人間の知恵が上下の差別する
学歴へ一步踏み出すランドセル
遅刻してせめて走って行く誠意
父親が居るそれだけの安緒感
疑えばみんな怪しい位置にいる
悪友が手みやげ持って来た不安
音痴とも知らずに眠る子守唄
健康という宝持ち職が無い
無口とは関係の無い寝言癖
冷汗の汗は季節を問わずかき

川 上 大 輪

自己防衛多数の方へ手を挙げる

ネジ巻いて何の予定もない明日

今だから言う真相を一寸曲げ

すべらせた言葉活字で拾われる

大安吉日パチンコやっぱり負けて来る

ここだけの話を貯めている女

血の薄い順に帰って行くお通夜

真っ白に洗って少し気が抜ける

迷いから醒めると女強くなる

産声の時から次男比べられ

川口弘生

大阪の鬼門に住んで医者で食い

かあちゃんに抱かれてるのに注射され

あの人もあの人も居て今日がある

適当な弱さ持ってて躰糸

仲間意識一人のユダが突き出せぬ

混血のそれぞれの血に背かれる

待った甲斐あったと言える縁うれし

妻病んで妻に甘えた過去疼く

詫びること多々あり母の爪をつむ

馴染客犬へも土産買って来る

川崎 秋女

やさしさがほしくて故郷への切符買う

弱虫を装う愛がほしいから

せめて髪洗おう明日の記念日に

人がひと裁いて地球たそがれる

明かしてはならぬ語がある花の雨

少し酔う少しおしゃべりしたくなる

底抜けに明るい女がくれた花

プラトニックラブそんな言葉をまだ愛す

死ぬまでに吐かねばならぬ嘘がある

私にあなたを呉れたクリスマス

川
竹
松
風

人口が倍ほどになり過疎の新春
本当の顔を鏡の外におく
金出せば何でも買えている平和
蠅叩き蠅も知ってるように逃げ
観音の片手は物を貰う手か
素晴らしい夕陽に嘘はよう言わず
栈橋に涙と嘘が落ちていた
低い鼻これも母さんくれた鼻
月並な言葉で祝いの宴にする
水子像女は罪を一つ抱き

河内月子

湯加減も生活もぬるい方が好き

他人から呑気に見えている短気

失礼な男で年齢を聞きたがり

たこ焼きを買うかまようている晴着

別れ際ちょっと小銭を貸してんか

マンションの猫もねずみは忘れてず

念入りが大きなちよんぼしてしまい

玄関を磨いて噂寄せつけず

立ち話西陽が背中おしにくる

花屋から出ると雑音動きだす

河内天笑

氏神の好きなひとつに下駄の音

指切りの橋を渡って嫁がくる

春の街少女は魅力たしかめに

風の伴奏ですこうしずつ冬に

ふりむけば尼僧もすこしふりむけり

素晴らしい夢を持ってるケチになる

ラーメンの屋台動いている夜景

砂握るカネのたまらん手で握る

肚の虫治まる頃は酔いつぶれ

生きているしるしに風邪も引いてます

川
端
柳
子

日向ぼこ昨日のことはいざ知らず

重い荷の一つ一つを過去にする

招かれていそぐ歩幅に夢がある

亡父の虫亡母の虫飼う耳袋

妊って虫一匹が殺せない

老夫婦磨き抜かれている鎖

阿波踊り指の先まで血が踊る

しあわせはうしろ姿も歌うたう

父さんを想い出す時みどりの樹

母さんを想い出す時沈丁花

河原 扶未子

息のんで友の訃を聞く雪しきり
すっきりとさせて帰した聞き上手
咲いたそうな散ったらしいと春が去り
古風でも女の倅せ知ってます
置替えて見ればやわらぐ胸のうち
しのぶように帰れば月が追って来る
紅白の幕美しい嘘を聞き
地図にない男一人の曲り角
止まり木に忘れた唄が置いてある
片付けて夫婦静かな膳となる

川村映輝

八十歳これから生きる道掬る

三世代生きて辛い日楽しい日

ねたきりに長寿を祝う言葉なし

菊薫る日の丸のない文化の日

故郷に居て故郷の良さ知らず

オレンジを買えと自動車責められる

席ゆずるにも勇気とタイミング

“一怒一老”解って居ながらかっとなり

赤腕章仕事か争議かわからない

浮浪者の胸に異様な赤い羽

川村好郎

塔四十路恩師二つの顔があり
親になり易く親には成り難く
私にかえる奥津城洗うとき
何もかも薄味でよし老いの日々
忘れたい影絵が消えぬ走馬灯
もう何もないひとと逢うにぎりずし
墨をする瞬間亡父が通り過ぎ
逢うたびにだんだん遠くなる人よ
一日と一歩よろこび八十路ゆく
ありがとうございましてと逝くつもり

川元いさむ

のんびりとあわてぬ人が先に逝き

念押ししてまた念押しして子の門出

方角を聞いてまた寝る冬の火事

金権腐敗この一票がもどかしく

さりげない小言をくれるいい仲間

みがくように作業着を妻洗う

貧しさがわからぬ子らで心配す

鎌研げば心農夫になつてゆく

ちよっぴりと近頃弱気父老いぬ

子ら去んで夫婦へ柿の実が落ちる

神夏磯 道子

温い日がいちにちあって隙が出る

忘れてたやさしさに会う柳の芽

チューリップ素直な風を持ってくる

憑きものが落ちたら若葉伸びていた

一粒ずつ子を撫でるよう梅漬ける

ピカソの絵歩いてくるよ初夏の街

深山のアザミ棘まで柔らかい

欲捨てて尾花の揺れにのってみる

冬の陽にやさしくなった影法師

毎日の祈り化粧かも知れぬ

紀市郁栄

どの花も枯らして守るなにもなし

旅に弾む女のぬくい手に気づく

心残りの指切に星が降る

夫婦ではない切符を二枚予約する

佗しさの数ほど年賀状を書く

振り返る終着駅に夫婦きり

城あけた男にしみるわらべ唄

新しい地図をもらって自立する

等身大の鏡に憶病が映る

栄光を辿れば瘦せた妻がいる

菊田いさむ

古都巡り萩のこぼれている茶室

来年の大安を繰るいい話

髪を梳き梳き湯上りの三面鏡

腹いっぱい音階がある笛を吹く

虫籠も吊って売店季節売り

座布団を抱いた男のかくし芸

もう五分待ってみる気の腕時計

灰皿に極秘のメモを焼き捨てる

ダイヤルで男きっぱりゆずる恋

スリッパで芝生に下りるお茶の会

岸 田 ユキヲ

人形と寝る子に母は添寝して

金婚の喜びこめて初詣

靴音で知れる夫の上機嫌

湯上りのみかんに心なごむ夜

三日振り大事な猫の朝帰り

嫁ぐ娘の心に宝石持たせたい

父母泊める部屋も出来たと子の便り

子の弁当リングの兎はねている

乳房吸う子の目無心に母の顔

盛装の袖に気になる手のこわさ

岸田将稔

流れ星恋しい人のいるあたり
デートする花の峠に蝶もつれ
産科出る美人大地をそっと踏み
産声に神の御姿見付けたり
母の肌判る赤ちゃん泣き止める
鍵っ子にとても嬉しい夜店の日
父の日のもう一本がまわりすぎ
もつれても笑顔に溶ける夫婦仲
老眼鏡一寸貸してと妻も年
妻逝きて古い筆筒に話しかけ

岸野 あやめ

元旦にもう顔を出す一家言

老夫婦佛頂面で連れ歩き

ひとり言だんだん七五調になり

なる様になれと流れに逆わず

啄木でないが自分へ花を買い

母親の弱気を昔笑ったが

色即是空心当たりはあるけれど

白内障に題す 連作三句

春琴の様に世話してやると言い

無器用な佐助はんやろなと笑い

泣かんでも大丈夫だよ俺が如る

岸 本 豊平次

子宝と言ふたどの子も光らない
気に掛けていてくれるのかよく叱り
一人住む女が門に水を打つ
二つなら安いと無駄を一つ買い
しゃあしゃあ受話器の妻に感心し
外からは何処も平和な灯がこぼれ
白杖の先で大地に話しかけ
野仏の顔にも昨日と今日があり
大声で泣く名案を子は覚え
人生はどこかに抜ける穴がある

岸 本 木 魚

おこたから嫁の戸締り聞く安堵

時計などいらぬ五月の朝の窓

食いぞめの箸に花咲く奥座敷

おでん屋のおやじと握手いい機嫌

年寄りを内の宝にして平和

立ち退きを拒みカンナの燃える庭

工場場にコンビが来ない火が煙い

叱ってもくれる男のそこに惚れ

乗り遅れすまいとブームにしがみ付き

断わってやったとプライド慰める

北
勝
美

駅前でチラシ呉れない齡になり
無駄もよし潤滑油になるなれば
傷あとを忘れはしない蝉の声
さるすべり咲いて記憶の墓探す
七色に咲いてあじさい憂気を秘め
冬よりも夏がうれしい膝がしら
凧もあり荒れる日もあり夫婦岩
店頭にものが溢れている平和
雑用の一つひとつにある誠意
変動へ泰然自若野の仏

北
川
竹
萌

一杯を心豊かに一人酒

適当に距離を保って子と平和

不沈空母言葉へ弓を引いて待つ

林道がついて変った郷の地図

あの人のようだと花の色を賞め

芋虫の願ひ原爆ない地球

蝉半分鳴いてこどもの網に入る

ありのまま話すこどもの目が光り

落ちこぼれ大根遠慮せず太り

香水の一滴お茶の席に出る

北
川
とみ子

母と子の祈りが違う鈴を振る
刑終えた背の毒矢は母がぬく
騙された女は強く鈴を振る
片思いらしい日記が荒くなる
倅せが横を向いてる独り酌
乾盃の手にライバルの眼が刺さる
小荷物の母の筆あとなでて解く
補聴器が隠し言葉をさぐり出し
誤解とく日をどん底で待つ母子
腹癒せに仕向けた罪がふりかかる

北田綾子

おぼさんのうまく値切るを待って買い

神様もあの手この手のPR

福の神はるか彼方の森の中

年豆によくも生きたり走馬灯

雨宿り自動ドアがサッと開き

かたつむり一戸建庭付移動式

祭だけ氏子になった豆絞り

選挙戦地元という字に弱い票

今日も客空出張に空会議

百雷の軒と出合い五十年

北野久子

聴こえないからいっしんに毛糸編む

姉妹も五十坂から気が揃い

憧れの人が握手をしてくれる

旅立ちの男ばかりも気にかかり

いつか娘に譲る身丈の裁ち鋏

自惚れがまだ少しあるネックレス

恋をして山田五十鈴にあやかろう

うさばらし結局夫のものを買い

アイバンク耳もなんとかならんかな

この家で一人になった日を思う

北村寛子

家事一切上手であつた妻の留守
平凡がよかつたのだと孫を抱く
雑草をきれいと思ふ齡になり
アクテイは幸せだけが歩くよう
年賀状風の便りの噂知る
風邪癒えて臆病風にかこまれ
暑気見舞あいさつがわり孫の顔
子のみかんむく手にまとも陽のやわら
友情は今も陸奥からりんど
人事異動夢ふくらませまたこわし

北山凡太

そつと来て水子の靈に詫びている

明暗を分けて涙の孤児帰る

敬老の祝言を聞く身の細り

祈り釘風蕭々と身に滲みる

立春の曙鬼気なお背戸にあり

伝統と言ひ張っている白い眉

歎喜仏彼岸にもある恋の道

当選まで妻も身内も低姿勢

高官も現地調査はヘルメット

亡き母のパーマ遥かな日の記憶

吉川寿美

諫言に行くネクタイを締め直し

頂点に立って孤独の風を知る

十戒の一つに背く薬指

シーソーの要に母の居る安堵

夏帽子思い上りは風に飛ぶ

しばらくは夢をみていた貝割菜

美しく老いたし女の赤い紐

おべんちゃらで蓋をしてある落し穴

ひとり居の女に弾ける遠花火

花八つ手亡母の想いを照り返す

橘 高 薰 風

夕桜積路郎が向うから

手榴弾嘗て握りし掌にレモン

菊の日の白い炎に焼かれける

養命酒汚辱のいのち養えり

春眠のそのまま覚めぬ死もあらん

ここは土佐河伯と河童呑みくらべ

母の闇この世は雨が降っています

墓の前もとの子一人母一人

こおろぎのように泣けたら涅槃かな

揚雲雀迦陵頻伽となりおおせ

木塚素石

町内もハガキで済ます寝正月

嫁いだ娘寝だめにきたと妻の愚痴

餞別にまずは気になるみやげ物

はいはいを真中に据え初節句

働くの好きなんですと若さ言い

見舞われた方が元気な精神科

月斗の碑太閤のごと韓望む

昆虫の厄日はつづく夏休み

笛太鼓だんだん高く月を上げ

仇討と笑顔で挑む碁の敵

清野こう

元日の空の青さよ生きる幸

初日の出誓いをしかと胸に抱く

気に入りの表紙に夢を積む日記

桜咲く日本に生を受けた幸

日の丸が残留孤児の目にしみる

寄せ合えば小銭世界に輪を広げ

嫁起きるまでを我慢の床の中

落葉散るかさこそ泣いているように

席ゆずる心に少うしいる勇氣

ゲートボール老いも燃やしている闘志

行 天 千 代

草萌える土の甘さよ春近し

今日だけを信じて生きた夜の膳

おだやかな風を選んで一人道

健康だけ欲しいと思う日の願い

桜咲き心たのしく遠まわり

樟脳がほのかに匂う初袷

君恋し今は遙かな雲の峯

澄み渡る空に夫と姉の星

十五年嫁も娘と変りなし

お湯割りの外は粉雪降りしきる

久家代仕男

ひったくり放火人質修羅の春

啓蟄を火あぶりにする芝を焼く

ひと葉ずつ風にめくれて初夏に入る

ステテコへ箸から洩れた冷奴

刈り終えた稲に夕陽も積んで押し

転作の大豆はじけて秋終る

添寝する乳房豊かな母の海

慎ましくつかず離れず賢母とか

檄に触れると縮む海鼠も人間も

そむかれた掌から卵の黄身が散る

草 刈 墮 駄

ゼンマイがとけて人形ふりむきぬ

辛口の酒に寝酒の甘き夢

サデイストの冷たさもある子供の目

地動説では手形など落ちませぬ

万華鏡ピカソの絵にも劣らない

邪魔したなこれを辞世の語としたい

かたつむり自分の速度でものを見る

なめくじが蛞蝓を生むはてしなく

夜中に時計みる死ぬる時見るや

獄門の首はとぼけて朝の露

日下部 逸 蝶

売ってないこの世の放のグリーン席
灯を消して明日のともしび抱いて寝る
昇進の遠のいた日に買うた本
いい期待こころの舵をとるように
遣る瀬なく水はネオンと戯れる
消しゴムのきかぬ言葉に泣かされる
感激は束の間それまでが長い
胸のすくような科白も独り言
晩学のゆめ花ひらくライセンス
人間の値打ちへ職位絡ませる

楠 貞子

ワンマンへ堪えるしかない米をとぐ
額を吊る小さなゆとり秋深む

蝉しぐれ亡びた恋など思い出す

陽あたりを余すところなく春を干す

倅せな落葉少女に拾われる

ぬかずけば墓標に悔ゆることばかり

狂わない四季人間の愚痴を聞く

真白になったすすきの中の風

パン屑をかついだ蟻がつぶせない

日照権黙ってヒマワリうなだれる

楠

美佐雄

沈黙の二人に悪魔通りすぎ

ブリッジのペンキが匂うお正月

窮すればなんとかなるさ酒をのむ

苦しみの果ての浄化が美しい

感情のたかぶり良い知恵湧いてこず

寄りそわぬ雲の行方を追ってみる

熟年の夢一つづつ海広し

日酒のみ天下国家を論じ合い

海の目が静かににらむ暗夜航

丸窓に男の夢が凍りつき

工藤甲吉

一冬を雪穴にいてけものじみ

津軽まで太宰と酒を飲みに来る

七十路に今や占うこともなし

酔い痴れて亡き妻の名を呼んだとか

臍の穴のぞけば亡母が笑み給う

凡聖の差へ自ずから畏まり

女には勝っても乳と蜜に負け

コイノボリ泳ぐや核の傘の下

どちらとも仲をよくする弱い国

天下泰平は軍配ばかりにて

久保和友

親子三代国鉄づとめ四面楚歌

樹と墓が異国の町の印象で

ロボットも腕をきたえるボディビル

影武者のつらさやがては殺される

満開の下で福祉論つづく

伝言板同じ言葉でみな他人

野ぼとけは遠い瞳をもつ峠

鬼貫の句碑四つ橋はビルの底

いたずらをする壁がある遊園地

露天風呂しあわせ落葉のように浮き

久保正敏

手話弾み明るく笑う若い恋

くすり指喪明けを告げる紅をひく

恋の耳チャイムの音を聞き分ける

卒業の序列と違う門構え

物溢れ男の眉に骨が無い

判押せば一枚の紙喋り出す

こめかみに失意を探る指二本

妻や子が走る犠打なら打ってやる

出陣の女の帯がボンと鳴る

検事室本の背文字が威嚇する

栗谷春子

新年の光も同じ隙間から

とき刻むほかに時計の息づかい

お世辞なんか言っておわが子も遠くなり

荒れた庭植木屋一存あるらしく

立ち上がる鹿は枯葉をつけたまま

汽車の旅一級河川みな渡り

小春日は朽ちた壁ほど暖かい

柘榴咲く紅一点という顔で

颯爽と裏切っていたプロフィール

病床に邪心のぬけた顔があり

栗原隆

列島がたった一人を持って余し

風雲をよそに自適の道悠々

山ひだの里老農に捨てきれず

たくましい父を見つけた横ビント

嫁も来ぬ農地に若人未練なし

豆腐屋の倅家業を継ぐ気なし

声かけて通してもらおう近い道

つむじ風落葉舞わして走り抜け

石壁に芽吹く野草のたくましき

たくましい老人ちよっと憎たらし

栗原富子

つつましく育てた子らの親思い
虫の音をどう聞くやろう黄泉の国
お祈りから帰った老母は機嫌よく
時どきは覗いてくれる子等が居る
七十の手ならい時間ほしゅおます
心配は神にたのんで鶴を祈る
バアさんは軽いつづらが良いと言
ちらつかす指のダイヤの罪つくり
朝の蜘蛛合格電話ありそうな
孫達にしかと伝えん原爆忌

黒川紫香

夫婦して母呼び寄せる話する

水平線なんぼ漕いでも行きつかず

楯持って転任先の土を踏む

竹の寺風の音だけ灯が洩れる

風船の悩みは空が高すぎる

雑巾をしぼって嘘を聞いておく

あんたまだ独りだっかと亡妻笑う

美しい金魚はいつも逃げまわる

笹舟がつくった波は平和です

一枚がドキンとさせる遺書になる

黒田真砂

裸木の意地寒風に身構える

逢うて来た余韻を拾う銀杏の実

熟年と言われて拭う春鏡

騙されてだまして夫婦坂登る

遠花火想い出巡る母の忌に

傷心に紫色の陽が沈む

亡母の指輪すれば心にある安堵

ねぎ刻む音に厨の春の朝

女の血さわぐ日もあり髪を梳く

夾竹桃に或る日の心のぞかれる

黒田 よしを

夫婦茶碗妥協の音で洗われる

吊り人形吊るされている眠くなる

左の耳なら非武装中立論を聞く

十字路で聞こえた亡母の子守歌

手をつなぐと男をきらう女橋

妻でない女と泥の中に行く

手の届くあたりは錢ですむ話

滑らかな木の肌を見て猿が哄う

童画から夢がふくらむ柿の種

焦点がきまらず淋しいめし茶碗

桑原伊都

川の字の起点へ枕位置づける
真中で父が支えるやじろべえ
一歩ずつ登る高さの風に会い
ひと呼吸おいた歩幅で夫を追い
蝉しぐれ今日の命を主張する
つゆ草の藍を信じてかたつむり
菊日和どこかで亡父の咳払い
数え唄山が次第に近くなる
廻り道もある檜山の地図を買う
少女たちよ明日の空はきっとブルー

桑原喜風

冬眠の土筆園児の歌に醒め

新緑の萌えて茶摘みの唄弾む

ミニバイクお洒落の娘にも青春譜

ママの真似幼女仏にお茶を上げ

家裁から愛の抜け殻貝になる

女性とは因果トイレに順を待ち

年寄の医者に縫れば薬漬

倅は使わず垂れる縄梯子

コーラスのママを音痴のパパが賞め

いさかいかも解けて抱き合う洗濯機

小池 しげお

庭師ふと祖母の氣立ての事にふれ

若鮎へ年寄りの鶉はのどをつめ

金借りる話笑うてことわられ

横綱に勝ったうれしい乱れ髪

ゴキブリに身構えている居候

お見合いへみかんを出して纏めかけ

夕映えの紅葉へ寺は鐘をそえ

警察も本気で叱るミニバイク

まじないで癌を治すと言うてくれ

強情な父はやさしい医者に負け

小出智子

美しい錯覚のまま秋になる

もののはずみで廻るわたしの風ぐるま
竹の皮に包んでほしいにぎりめし

若者の五月とおなじ筈がない

月見草ひとりの湖をもつひとに

わたしの花にいつでも水をやりすぎる

立ち直れそうな五月の風の中

あじさい寺の冬を想像せぬことだ

七十はさほどに遠きことならず

長い手紙を旅のおわりのように書く

越田みつ子

孫等来て先ずポチ袋に目をつける

お手玉貰った孫が比べ合い

一命を預けてホーバクラフトに

すねた子の舌打ちで示す反抗期

落慶法要にお稚児さんが出て花添える

子年三代続いて我家も新春

窓際の陽射しに微笑む福寿草

寒波去り一足飛びに春が来てほしい

池の水にフト小石を投げて見る

下校の子等手話で弾むバスの中

兎 島 与 呂 志

おおらかに戦陣訓を持つ男

人は死を恐れる余り嘘もつく

世話やきを叱ると夫は死を撰ぶ

金銭にうとい夫にまだ惚れる

歳甲斐もなくマスコミに共鳴し

歩をゆるめ追い越しされて悔いは無い

あわてるなあわてるなと知りあわててる

若者のするどい言葉に馴らされる

口下手をうっかり馬鹿にするなかれ

恐ろしい音で若さを捨てる闇

小島蘭幸

朝の風呂いざ出陣の日の男

達磨眼を貰い神通力消える

モーニングコーヒー闘志伏せておく

長女一歳叩けば叩き返すなり

小児病棟みな美しい妻をもつ

動物園の親子の情を見せておく

長女よ次女よ父は仇討ちもうやめた

ふるさとよ大きなパンツ干してある

酒やめた父あんパンを食べている

父の忌が明ける顚顚あたりから

越村枯梢

折り込みにいのち売ります年の暮

獄窓に昇る朝陽は無表情

大根の首の青さよ黄昏れる

うすみどり女いち枚脱いで春

老人老人聞き飽きた九月十五日

筆太にめしという字の工場町

資料館の片隅にある肥柄杓

静脈を探す多弁の注射針

糸切ってマリオネットは自我にいる

蒙古斑のわが子もいつかいくさ好き

小
谷
仙
山

四対六四が庶民の味方する

何事もなかった今日の陽が温い

熟年のプランは遊ぶ事ばかり

幸せの予感梅一輪ずつ開く

後悔の風がドラマを操り返す

飯の味三日の風邪で見直され

蛙には蛙の面がよく似合い

十年のドラマは砂の一握り

余命まだ春には春のプラン立て

知らぬ顔どこまでするか石仏

兎玉歌子

狂言の女ハンカチ利用する

もう嫌いな火の燃え方がちぐはぐで

昨日来たベンチで後悔しはじめる

ショベルカー私の過去へ届きそう

喝采のうしろで苦労消えてゆく

灰神楽一度は許す妻でいる

借りものの白さへとても気を使い

始発駅女うしろを切り捨てる

諍いの中で研ぐ米艶を出し

役持ため髭でゆっくり散歩する

後
藤
火
鳥

初夢のな お戦場に荷を担ぐ

戦友の鬼哭とも空の虎落笛

この風邪は金剛山の雪の精

しあわせは金で買えない雪が降る

若き血は矛盾の波を乗り越える

逃げるなよ酔うてはこの世味わえぬ

昼の酒更くるも醒めず冬の水

老妻よこれから一と日一と日尊い日

余生守る心の土を肥やさねば

老母静かに野球のテレビ席を立つ

後藤正子

待っている春へ予報は嘘ばかり

時々はおかめの面を付けて待つ

邪魔者は消えて下さい春の宵

もったいない程のみどりへ二人連れ

さよならの余韻旅路を刻み込む

あじさいが雨に約束した五月

イチゴジャム煮れば明日が夏になる

叱ってはくれぬあなたに試される

妻の座を地味につとめている自信

半分はあなたの為の人生で

小西雄々

目標へ戦陣訓に似た社訓

追われてる立場へ風も味方せず

注目へ菊は無欲な顔でいる

残り酒あつめ温みのある助言

雑用へ今日もちぎり絵つなぐよう

妥協する距離かんがえて風に佇つ

飽食に馴れ根性を見失い

人妻と開いてならぬ地図もある

過去帳へ連れて逝けない人を恋う

修正をしたい頑固へ血がさわぐ

小林 生代

わが道を一途に歩む白い杖

この坂を苦もなく越えるわらべ歌

私がここにいるんだ咳一つ

はやくねよう明日の生活が待っている

待ちぼうけゆるる柳もひねている

背のびする子の足もとが揺れている

罰だった余韻に残る母の声

妻ありて打ち水のあり我が家なる

振り向いてごらんよ椅子が待っている

ついて行く広き夫の背を見つめ

小林一夫

失った自分と出会う古日記

人の世や狂った時計も時を告げ

母の忌は少女ただただ犬を撫で

雪どけになっても消えぬ雪を抱き

恋人の鼓動を耳で確かめる

おそろしき色の一つに鳥居の朱

しんどくなったら逢いたい人がいる

母へ出す手紙は強きことばかり

愛されているから愛しているのかも

過密都市妙に静かな雨も降り

小林 孤呂二

元旦や判官びいきの夫婦かな
犬つれて子のない夫婦朝を足る
もう秋か酒の好きが舌にのる
役人の翹鳥知らずが多すぎる
風のふきだまりへ役人目を向けず
寄り道はするなと寺の鐘がなる
聖徳太子には左派も右派もない
友禅の絵柄もちいさくなる不況
鳥居をくぐれば氏子の顔になり
父の日を黙っていつもの刻に出る

小林 妻子

結局は酒を呑まれただけのこと
年賀状受取るだけの名となりぬ
私を父と呼ぶ子に春の音
女妬く私は家に居たとする
本心を探る手だての酒をつぎ
斜めから人間の裏少し見え
太い指これが親父の総てです
夢の中へ亡父の足跡陽に続く
親切へ縋らぬ強い車椅子
湯煙の中で本音を語り合い

小林トメ子

三味線が女の意地を通させる

小包は上手ではないが母の手で

疑えば無色の水も怖くなり

だんだんと般若心経急テンポ

嘘でよい好きよと言ってほしかった

腹の内読まれて言葉にごされる

老化をば売物にする逃口上

玉の輿贅沢な愚知聞かされた

お隣は礼儀よすぎて堅苦しい

薄緑似合う女将が挨拶し

小林 由多香

裏方に居て賑やかな拍手聞く

三が日終つて夫婦だけの餅

目覚ましで母のいくさが火ぶた切る

ラッキーが重なり己れ見失ない

性格の違い夫婦として合わす

隠し芸派手に左遷とは見せず

虫籠に馴れた順から鳴きはじめ

履歴書を飾る短大卒業す

蟻今日も生きてく列をくずさない

目ざわりにならない位置で母が待ち

雜 賀 美 世

戸を開けていつまで待たす青い鳥

置き薬味方にくらす島の老母

ほころびへ錆びてはならぬ母の針

あきらめて素足で渡る丸木橋

さざ波も消して静かな姑の海

冬の陽へいく日会えるか紅椿

一本の管で生きてる熱帯魚

旅立ちへ迷う重荷が一つある

父の灯を抱いて積木を崩せない

明日は晴れる空の青さを信じよう

齋藤通風

癖でよい母の心にある追伸

核もたぬ国にも寂しい北の窓

寒流に昨日の夢は凍らない

正論を待つ風船は気を抜かぬ

裏切りを浮べる酒を注ぎにくる

さようなら言えぬ男に貸しがある

学歴を問うまい日日の棒グラフ

苦心して地球を破壊する科学

余生などあるか働け食っている

仁術が魔術を使うベビー管

齊藤 三十四

古稀近く許す心を広くする

分別がありそう黄門に似た髭で

三十五年保護司の履歴に陽が当る

褒められる木彫飯にはならぬなり

田畑が売れて富豪の番付に

仮釈放暮しの道は狭すぎる

酔心地妻なんかには恐くない

病人の抜毛だまっていてやろう

核反对妻と署名の筆をとる

肚割って話すはなしに酒がいる

細呂木
魯木

記録には無関心吾れ凡夫

雑草も生きていますと花をつけ

ふれ合いもなく自販機の固い音

路地の角影が先に出る灯り

着飾ってみても影は黒いだけ

生きている証し影も動いてる

目的を変えてつまづく人生譜

同年会長寿のラインに横一線

失意の日妖しくも川に魅せられて

ガイドの笛を信じてバス後退

酒井靖子

控え目な女に見えて隙がない
円満の二字が夫婦をにらみつけ
運勢が替えた女のイヤリング
どぶねずみ走って幸を見失い
宮詣り未来をかけた鈴の音
不発弾一人になって撫でまわす
嘘一つまげた手本が活きつづく
飾るもの持たぬ夫婦で赤を着る
この鈴がいつも母さん呼び寄せる
文化的くらしの中で泣く女

榊原秀子

蜺舟帰える舳先がいそがしい

たんぽぽの綿毛へ托す春の思慕

呼び起す記憶一とこ薄れてる

神妙に針持つところ五月雨

歩きたい道あり友と歩きたし

とても一途に屍になつた島も春

菊にあけ菊に暮れてる日の充てる

善人の顔ひっさげてする募金

楽茶碗なでて豊かさを貰う

逢えぬ日の傘に重たい雪しぐれ

坂口公子

観念をした時心の夜が明ける

たてに振る首が逃げ道探してる

泡一つ浮いてガラスの中の恋

撒き水へちごうた音で礼が来る

愛それはそれは鋭い刃物です

ヨードン枯野の下で構えてる

神様に与して歩く白い道

拾うても拾うてもある母の愛

昏れ残る银杏黄葉と厳父の拳

ライバルに新春の笑顔を惜しみなく

坂
根
流
水

峰に立つ鉄塔秋の雲をよぶ
鐘の音に靄も比叡を這いのぼる
辻地藏散華のごとく雪つもり
精神科安定剤で手をはぶき
遺言のつもりで日記書きのこす
宴果てて残灯磯にただ光る
亡妻の墓建てて故郷が一つふえ
魂胆を持たぬ花々みな奇麗
進むこと夢中になって畏に落ち
病室のなかより今朝も観音経

坂部 紀久子

紙人形帯もとけずに人を恋う

暗闇も慣れると何かが見えてくる

水ぬるむ朝はすべてが優しくて

水仙のすこし汚れた白が好き

蟻の巣を避けて落ち葉を掃き寄せる

喪の幕をくぐり他人の甲斐甲斐し

おむすびは拝む型で握られる

的になる女で髪を乱されず

屈折の光へ別のあなた見る

まだこんなときめきがある恥かしさ

坂本仙吉郎

国東の石仏群は道の端

室戸崎航跡残す白い船

バスツアー見残す飛驒の国分寺

高山に恐い名の酒鬼ころし

松山で句碑又句碑に行き当り

青島で洗濯板のしぶき浴び

長命寺石段見上げて立ちすくみ

小豆島孔雀に道を譲らされ

初旅は大和三山正恵方

生き残る古都の家並と鯉の群れ

桜井千秀

投函の音できっぱり縁を切る

医者にする計画の児が歩き初め

御詠歌が洩れる月夜の銀の舟

母の顔女の顔が日に幾度

似た名前あちらは文部大臣賞

ボーフラのたわごと泡がちよっと立ち

先代の苦心を今も味のれん

口止めをされたショックでしゃべる羽目

妻の吹く進軍ラッパ切れ目無し

勝ち負けがあるのがつらい甲子園

里 小 路

四百年祭大阪城の青い屋根

燈台の灯はとどかない釜ヶ崎

妻と佇つ心齋橋に川がない

妻吉の堀江もマンションビルの街

浪花座の前で沢正好きな頃

命令に馬鹿者が居てひとり死ぬ

生きて又今年も会えた路のとう

医者に無茶すなと言われる程達者

天井に飛車が走って寝付かれず

五百円するからコーヒー飲んでみる

佐藤方昭

(四歳から小一まで)

かれんだーめくるとあすがたのしみだ
ないているころのなかはきれいだな
やせガエルピョンピョコピョンととんでみる
ほほえみのりんごのほっぺわすれない
えんぴつがぼくをよんでる一ねんせい
ちびっこのほこりじぶんであるくんだ
かぞくっていいなごはんがおいしいよ
ちびきんぎょスイスイおよげ生きぬいて
にんじんに顔があったらワッハッハ
なが生きをしてくれぼくの父と母(祖父の死)

佐藤仁昭

(小三から小六まで)

勉強がおいかけてくるころげそう
どろんこにスタイルなんかいらないよ
父と子ではだかになれるふろが好き
置き手紙きづかう母の声がする
アルコール又ちゃん長生きしてくれよ
宇宙には星の数だけ夢がある
枕なげやっぱり父もしたと言う
スケジュール一杯僕にも自己主張
六面体一つのことのできぬまま
希望不安中学僕をせめてくる

佐藤藤子

ひとひらの欲も持たない春の雪

人を待つ空気の揺れを敏感に

鉛筆は倒れた方へ意地を張り

右の顔左の顔のある怖さ

前書も後書もなく人を恋う

ぞうの鼻長いだけではないらしい

残雪は遠くで見ればあたたかき

禁猟区いつか私を見失う

暮れ初める川の流れを見て飽かず

通りゃんせ絶対後には戻れない

佐藤令子

夫の爪パチリパチリと温き掌よ

一休みしてから頂上遠くなる

さよならが言えない愛の重さ知る

やさしさが重荷になってくるけじめ

妻楊枝くわえて父が眠ってる

人形は恋に恋してひとりぼち

焦るまいやもりのしっぽ伸びている

子が答え出すまで明日を語るまい

輪の中でいつも誰かに助けられ

教え子に囲まれ夫が輝きぬ

佐野白水

ドヤドヤの熱気に六時堂かすみ

被征服のアイヌにすまぬカメラ向け

山好きにだけ聞こえてる山の声

或る日ふと女医を女として眺め

瓢箪がなっていますと妻静か

心齋橋河童を丘に上げたよう

ごまかしの出来ぬ二二ンが四の人生

須磨の浜平家ここから敗け始め

病妻へ娘の味嫁の味僕の味

山茶花の赤老人でさえ燃える

澤田千春

鏡ふき朝の素顔をたしかめる
逢える日は髪の先まですきとおり
ネクタイが踊る新任教師です
手紙焼く煙の色にある想い
無人駅手まりが一つ誰を待つ
母のように砂場は泣く子安堵させ
悲しみを見せぬメガネのすみれ色
さまざまな運命線が駅を出る
渡し舟みんないい顔して渡る
月あかり信じて歩む崖の路

塩田新一郎

楽をさす楽をさすよが嘘となり

歓喜らしい顔もなさらず歓喜仏

それぞれの顔で驚く干し鰯

夕浴び女琥珀の雲に滴りて

空蟬よ我は戦艦大和なり

虹に立つ嵐に耐えた風見鶏

割勘の友逝き酒の店を替え

菊の香やわが情念の醜さよ

幽かなる裏切りに似て冬の菊

メルヘンの世界を尽せばたん雪

塩
満
敏

ぴったしの当字に校正感じ入り
通り抜け芽ばえる恋も散る恋も
八十八駅五十年の刻きざみ
ロボットを部下に一人改札員
和服着て重労働と知る女
新入社早速保険が追いかける
長引いた病い漢方の出番です
父の日も働き蜂は家を出る
出合いから暖めてきた恋もあり
せめてもの苦労の指をなでてやり

唇が君を恋い

石女の柔き肌

女めく少女の目

抱擁の夜が更け

娘の恋を妬む母

振り向けば女の目

肌を這う愛撫の手

拗ねて見る愛もあり

謎めいたマダムの目

尼さんも読むポルノ

直原 七面山

柴田英壬子

河は流れるモンローと同じ千支

海行かば緑の星となり給う

秋海棠わたしの涙溜めたのか

孤独など海は久遠の愛寄せる

出窓はステージいろんな花が咲く

押し花のロマンに負ける水中花

ほころびをそっと見付けた相手です

申告書また女房の年齢わすれ

もろもろを脱げば肉体頼りなげ

持つものを持ってば弱気が逃げて行く

島 崎 富志子

負けん気が自分のミスも許さない

子の足を引っぱっている愛と知る

色々のセールス二十歳の娘をせめる

妻よりも母でいる日が多くなる

成人の娘へはなむけの言葉選る

親ばなれする娘へ子ばなれ出来ぬ母

泣き言は言うまい明日も陽が昇る

子の夢を叱った心が落ちつかず

古いとは言わぬ娘の気のくばり

小銭入れポスにおさまる五百円

清水健司

酒癖の悪い男と釘を打つ

裏切りを黙って見てる錆びた釘

夜通しを喋り続けた五寸釘

眠れない夜にかぞえた釘の数

中心へ打った釘だけ効いている

釘を打つ裏方がいて妥協せず

釘箱の釘で操を持っている

職人がきっちり攪む釘のかず

ユーモアのわからぬ釘はすぐ曲る

ときどきは脱線をする錆びた釘

清
水
康
恵

皿一枚投げて悩みが消えた崖
幸せをすこし外れて笛を吹く
夫だけ信じていたい冬の音
ぎりぎりの女に響く下駄の音
違う道歩き始めた子がひとり
大根を干せば母にも春がくる
宝石を知らずに生きた母の指
つり橋と母の背中がゆれている
菓の馬三日ぐらいは黙っている
うそつけぬ男と歩く女下駄

白岩文衛

古き家に古き人住むしじみ汁

これからの命を思う塩昆布

さびしさを妻も言わないめし茶碗

妻といて言うこともなし冬の天

人生きる難さを思う夜の硯

灯を消して夫婦子のことなど話す

ひとは皆ひとりで生きる鱒雲

石積みば夕日わがつむ石に入る

人憎むまいと思う雲を見ながら

雲の峰に書けばでっかい僕の句碑

白 髪 末

ライバルの握手へ火種埋めておく

綿密な野心ほろりところげ出る

落し穴亀は静かに掘っていた

懸命に生きてる背中風も押す

腹帯の中で癖までおぼえ込み

幾山河小骨抜き合う夫婦箸

主義曲げず土に生きてるこぼれ種

信念を曲げぬ老父の白い旗

汗流す裸へ怖いものはない

贅沢を詰めた袋はほころびる

新
谷
笑
痴

脈のない言葉敗者の位置できく

人間の弱さ曆をあけてみる

立飲で送る本当の友がいる

へそ曲り負けを知ってる煙草の輪

底のない袋をせっかちもてあます

一匹になると男は肌を脱ぐ

あおり酒ひとつの過去を捨て切れず

職人の腕履歴書には書かず

吉日の父の涙を探すまい

編棒の交叉に枯葉の私語聞え

新開 千代女

夏の間は金魚になりたや水の中
孫が書く金魚は鳥によく似てる
煙草やめ得意になって友誘う
肺ガンも煙草やめれば気にならぬ
お年玉子のない者は出すばかり
お年玉貯金しとくと親が取り
還付金とくをしたよな気にさせる
サービスがよい時何かねだられる
娘が成長する程雛出しおっくうがり
四捨五入されて息子の嫁選び

菅 井 とも子

繩張りを解いて拵げたかごめの輪
橋がついても島は島から抜けられず
まだ少し若さがあって走り出す
貧しくて貧しいことが言い出せず
妥協して鈴が一拍おそく鳴る
ナツメロのまま軍歌よ居てほしい
鬼ごっこ追われて萩が散っている
継ぎ足したおとぎ話は大切に
傾いた陽に追いつがる鐘の音
願わくば一足おくれの渡し舟

杉 浦 婦美子

アクテイ大阪夢が若さがひたに欲し

夜の爪月より遠く亡母はいる

すこし甘いカレーで育つ子が一人

生い立ちをきれいにたたむ舞扇

葡萄種多弁な女の句読点

ビー玉を透かせば無垢の日が還る

出迎えの亡母がいそうな里の駅

北枕に変えて治った不眠症

カラオケの妻に夜なべの唄がない

気の弱い鬼でときどき歯が痛い

杉 本 智慧子

ふとふれた手から明るい春の声

卒論の是非を預けてスキー行

新学期カスタが響く四拍子

パソコンに一途になっっている若さ

旧友と話すとき遠くはない昔

母に渡す笑い袋が見つからぬ

哀愁の粉ひき唄に祖母が居る

こまくさよお前に会いに遥々と（北アルプス）

つつましい女になりたいくすり指

バランスが大事と威張る中の指

鈴 木 かつ子

四十年寄りそって来た肩と肩

セールスは玄関の花ほめてくれ

いい視力していて見えないものばかり

寄せ書きのサイン逢いたい人ばかり

ここの鯉手の鳴る方へ寄ってこぬ

花鋏こんなところに置き忘れ

さわがせてごめんね財布ありました

子等の目を盗みドラマに拭く涙

帽子また忘れていった同い齡

残り火を大事にかばいあい夫婦

鈴木節子

ひょっとこ面一人が笑うとみなわらう

近道を教えてくれた地藏さん

宿帳に旧姓を書く一人旅

うちへ来る客だと犬が知っている

後姿でときめきが通り過ぎ

三面鏡斜めに心のぞかれる

息子との距離を埋めずめる餅をつき

夫のポケット覗くと他人めいてくる

エンピツを削れない子に誰がした

生き残るために小さな穴を掘る

鈴木良征

暖かい陽だまり探す冬の蠅

学園でヌード教える池の坊

バレンタインデーあって歯科医が息をつく

秋さむの風に戸惑う朝の蜂

俺巨人隣のおやじタイガース

米国の傘下で楯となる腑抜け

信用の出来る奴でも金貸さぬ

お水取り松明もえて黄砂ふる

訃の知らせ受話器の中で咳二つ

明日の虹夢みて生きる馬の足

妹
尾
春
江

雪便りこけしの里も降り積もる
流れ星子はひとりずつ旅立ちぬ
祭笛故里ゆきの汽車が出る
臥せている姑に着せたい浴衣柄
お互いに名刺の裏をよんでいる
友は去るひびく言葉の無いままに
一喜一憂時の流れに支えられ
再読にあの感動が戻らない
脇役で居たい私を攻めに來る
底力明日の為に蓄える

曾我部

裕

新人の台頭句座に丸くいる

九分九厘締め殺されていた無罪

大国の核のはざままで酔う平和

ないものと妻が思わぬ戻り税

これみんなあなたが飲んだビール瓶

ナースコール末期の母がはなさない

もう母のいのちが切れる心電図

日向ぼこ死の順番を待つように

口出しはすまいさせまい嫁が来る

新築と新車大きな道が付き

園田文子

仏法僧祈りの声かびょうぶ岩

ハチマキが美人にさせる運動会

岬への天草の道に澄む十字

奥能登の哀歌を磨く千枚田

みがく手の北山杉にあるドラマ

海底の幻想に酔う魚の群

陛下にもお散歩を乞うスケジュール

白樺の旅情にペンの走り書き

岩壁の穴につがいのアホウドリ

百六歳大西管長盆の顔

園 山 栄

原点に戻り生傷舐めて見る

左遷地でやっぱり他人の塩を舐め

古本屋探して愛を確かめる

眼から鼻抜ける男で嫌われる

遠来の客にすすめるあり合わせ

静と動 動を制する眼が光る

良い悪い打明けあって無二の友

斗酒辞さぬ男老い初め古稀の杖

ひぐらし亭その日ぐらしの気と呼ばれ

廻る地球に巡る大地の四季がある

園山 多賀子

たくましい女は踵返さない

深呼吸大きく今日を把握する

ロボットが人間くさいミスをする

底辺に生きて笑いを忘れない

高層のビルの砂糖に蟻も棲む

考えて考えるロダンうづくまる

夢のない女紙幣の皺伸ばす

愚痴溜める手頃な壺を夫が撰る

夫唱婦随夫の笛なら踊ります

躓いた石にも有縁の温みあり

高木桃里

地に還る紅葉よ悔いのない軽さ

父と母と坐った位置に妻と居り

焼くものは焼いて年越す文机

灰色を白手袋で偽装する

老いたのし夢溜めている小抽き出し

早冷え主治医が軽い咳をする

訥弁もよし丹念な聴診器

神童の弟は左派で兄は右派

もつれ糸端々を持つ夫婦像

枯野から浄土への道見付けたり

高須賀 金 太

一球は遊んでくるとみた誤算
変貌を遂げ行くキタに酔うている
逆コースとれば戦火の音に逢う
口開けたままへ齒医者はずえを言い
ほころびを繕い合うて夫婦傘
本当に惚れているから手を出せず
一等地手が出せぬまま放つとかれ
帆船に美しい夢のせてある
ストレスをのんで中堅やせている
決心がついて夜空が美しい

高杉鬼遊

にんげんがひとり沈んで水が澄む

またしても他人の風が灯をよぎる

夫婦とは支え合わねば砂の上

大切な人の名を消す砂時計

年頃ときいて美人と想うなり

足あとに莫迦だ馬鹿だと書いてある

そのうちによいことがある鍋の底

畔みちを情けが笑いながら来る

人や佳し花屋に花のある限り

代官と長者を嫌う藁の馬

高杉千歩

贅沢は言わぬ厨の二人分

逆境を想う日白い飯と愛

雑音に惑わぬ妻の坐りだこ

口下手な妻だからすぐお茶を煎れ

いくばくの余生おかめとひょっとこで

仕残しが山程あって神楽面

つぎ足した鉛筆願い叶いそう

年金の軽さすんなり痩せて秋

死ぬときはひとり笑顔で飴を噛む

少しずつ利口になって夏終る

高田よしを

亡き父にうけた拳骨の有難さ

孫の手をかりてたのしい上り坂

古い一人釦をつける針の穴

バーゲンで火のつく泣く児ママ忘れ

宮水が三田の米を酒にする

釈迦如来指を丸めて欲を出し

ラムネ呑む一口ずつの玉の音

墓参り居心地よいかと聞いて見る

迷信というたその手で繰る暦

猪食えば昔の傷が疼き出す

田形美緒

銀行のカメラに向かつてハイチーズ

小京都地図のお店でコーヒ飲む

生む期待靴のかかとも低くなる

悪戯が飯より好きなピカソの目

百になり手直しをする辞世の句

鍋かこむ仲に通じる言葉あり

頼まれて困る神様普通の子

ほどほどに褒めるのが良い妻の友

文豪の手紙無心が書いてあり

雛あられ五彩の夢掌に

高野宵草

鍵っ子の凧へ冬の陽もう沈み

楽しさは貧しき中の無駄づかい

枯れ草のなかにほらほら春が居た

口喧嘩しながら銀婚式の膳

皮むけばリング差しそうな肌

叩くまね逃げるまねして恋たのし

萎むとも知らず風船かけのぼり

迷うても街へゆくなよ赤とんぼ

人形の顔の憂いが身に沁む日

その時に辞世がつくれるまで作る

高橋 千女子

冷静にもどり喪服の薄化粧

やる気一ぱい弁当箱も大きくし

生甲斐にした恋人と行きづまり

流行のパンツで父を嘆かせる

子の帰省特效薬のようにきく

恋捨てて主婦本来の日に戻り

母きらう方角小さな恋進む

四五枚の硬貨で神を味方とし

秋たけなわ今コスモスはバラを抜く

木々芽ぶく逢いたくなくなった遠い人

高橋操子

柏手のみな善人の音でなる

お身ぬぐい大仏様のお手に乗る

それぞれの生き方汗は光るもの

合掌をすれば十指の素直なり

舞妓さんの涙か京の五色豆

横笛のどこか流れて月と居る

ぼんぼりに花をあずけて月の城

海へ立つ少年心満ちてくる

お参りを忘れて帰った花の寺

商売と別に仕入れた好きな柄

高見ほまれ

鍬を継ぐ悟りを大地から貰う
嘘つきの海だが父は離さない
蛇口全開昨日の罪を流さねば
三文判では沈まない母の船
詩になる坂は急がぬ方がよい
実印を捺すとき眼鏡拭き直す
声出して泣けぬ扇子を父はもち
伏せてから孤独に耐えている茶碗
坂道を登ると父母の風匂う
無表情妻はなにかを知っている

瀧 北 博 史

還曆はプールに遊ぶ日が多く

いろいろな雲を見て来たひとり旅

叱られる子よりも叱る親が泣く

遺品分け母が残した五十銭

夏の町歩くは他所の町の人

サハリンへ流れる雲も呼びとめる

目を病んで人の心も見えてくる

野仏に風の行方を聴くトンボ

いやなこと断わるたびに風を引き

風鈴も私も風があれば鳴る

田口虹汀

針千本呑んでも言わにゃならぬ嘘

堂々と島田の結える娘に育ち

寡婦という枝には冬の花が咲き

長生きの秘訣怒らぬことにする

炉端焼き嬬と気分を食べべにゆく

喜寿の座に届く梯子を買うておく

投句する前に嬬が味見する

古稀にいて猶長生きの術を聞き

孝行の真似をしようとして近く住み

表札は未だ生きていた夫であり

武

俊
春

どうしても揚げねばならぬ孫の風

叱られたあともやっぱり父の膝

いろは順妻の座席は上にある

啓蟄へ土筆は袴つけて出る

古ビスを捨てる勇気のない明治

意識した視線の来ない孤独感

遠回りして帰りたい反抗期

世をすねて曲った胡瓜もてあます

合鍵へ不安の鍵をかけて出る

盆の菓子じりじりじりと四面楚歌

竹内花代子

夕立が忘れて行った陽の匂い
いたずらな棒へカマキリ身構える
寒々と楓ちぢんで苔へ落ち
当然の躰を母はためろうて
春の顔見せに雀が窓へ来る
美粧院私の顔にしてくれず
泥沼のたにし青空見とうなり
脱ぎ捨てて今日の暑さを口にする
らっきょうが箸から逃げる朝の膳
草に寝たホタルの夢をさます雨

竹内 すみ子

風船が破れてからの蝸牛

もう一度裏返して見る置手紙

上げ底の器を誰も持って居る

青ざめたバラに処刑の朝が来る

美しさ切り売りをしてやがて秋

暗闇の情を語る埴輪の眼

青空にまだ赦されぬ昼の月

子に遺す皿白きまま秋となる

ユダになる日の両耳が立って居る

華やかな笑顔をつくる涙壺

竹中綾珠

人間の流転の果ては核で死ぬ

群集が廻れ右した恐ろしさ

寝そびれて亡夫の思い出来来する

ピエロ子を死なした日にも笑い撒く

失敗を詫びる時にもいる勇氣

血圧が上がった日だけ食養生

座禅して心磨いている積り

割勘にしといてよかった訃報来る

焦点が決まった途端泣きだされ

嫁やさし孫と同じにお八つくれ

田 崎 あき子

一枚の賀状今年の幕あける

縫れ糸解く楽しみが母に似る

埴輪の目この世の風がくぐり抜け

記念写真まず真中へ祖父母の座

義理堅い家にはぐれが一人おり

雪崩ニュース捨てた故郷も雪国で

病窓が四季の景色を額にする

人影が一丸となるラッシュ時

首の鈴猫の自由へついて行き

広島のドームくぐって来る夕日

多田 あやこ

ハンカチをうめて砂丘に冬が来る
鬼に子を二人とられたかなかなよ
その日から母は化粧箱を開けぬ
耳栓があったよ亡母の手文庫に
死とはなに生きるとはなに水流る
パンドラの箱へ止まっている鴉
満ち潮に島は無口になつてくる
寄り添うて肌の冷たい雨蛙
見られてる金魚見ているかも知れず
懺悔する大地の果ての丸さかな

立
床
晴
風

通訳が欲しい車内の国訛り

欠陥があつて不思議のない夫婦

両肩にローン支えている若さ

レコードの酒が私をしびれさせ

判押してもらう頭の低いこと

理屈っぽい孫に兜を脱がされる

爽やかな気前が私を虜にし

現世に染まぬ因果の髪おろす

手不足の秋が片付く嫁が来る

ボタン付け妻が見ている器用な手

田中亜弥

花好きになつて蝶までつきまとい
月の旅きつと兎を見つげ出す
コンパスで引いた範囲の旅をする
まがり角越えてわたしを練り直す
母の樹へ幾たび教え乞うことよ
ちちははの願いの数の砂の数
水鏡のぞいて月のひとり言
逃げ場所の予約は月へしておこう
ゆれながら蓑虫的をはずさない
千羽めの鶴が命の灯をともす

田 中 国 彰

釣自慢自慢するほど釣れもせず

一言で自慢の鼻をへし折られ

放置した廃車の部品減って行き

売上げが減って晩酌ちよっと減り

風さそうなどどこよいは義士まつり

三十年歩んで父に追いつけず

いにしえの古墳科学の目で覗き

バカ二人よればいつもの釣談義

獲物なし帰れば庖丁ウロコ取り

縁側でねこにあくびをうつされる

田中好啓

亀老いて翁の面の温かき

天皇の眼鏡に虫が冬を越す

俗名を憎まれおおす木馬きんま曳き

おんな好き指はいつでも清潔に

平家納経六十余州鐘をつく

人混みのはずれに瞽女の莫産がある

簡単に脱ぐのも生きている証し

健やかに育ち誘拐され易い

喪が明ける蝶の素質は悠にもつ

ニコチンで死ぬのは聊かも悔いぬ

田中笑風

靴下をポイツとわたせる妻がいる
一周忌母のみかんが熟れている
玄関のすし桶客が来たらしい
出勤の距離にポストも入れて置く
十本の指で家族は庇い合い
赤ペンを持たぬ家計にある油断
愛犬が死んだ少女は慟哭す
溜息をうっかり妻に見破られ
電柱がポツンと家が建つらしい
行先のメモは文句を言わさない

田中正坊

ビーナスはビーナス僕の妻は妻

人の世の運命は悲し会者定離

妻の遺影定期に入れて胸に抱く

裏話書いて乱れた世を稼ぎ

定年を待ってたように痛む膝

受付でノーネクタイは待たされる

手が四本欲しい男の台所

深海魚お前もそんなにゆううつか

車内でも山のマナーを山男

兵の墓ありし日のごと整列す

田中柳人

酒の支度しとけと竿を持って出る

ゴム長で稼ぐ女のうすい紅

掌の豆をつぶした土地をはなすまい

はた目から見れば十八無鉄砲

長女まだやるのは惜しい七分咲き

再会のホクロのまままで年をとり

終電車トンネルまでは起きていた

水枕逆さに干され役おわる

出世からはずれ尻尾はもう振らぬ

夕張の荒れ地に父の墓がある

谷
三
柳

人見知り今日も詩集が売れている

雲一片男に捨てるものばかり

砂文字明日は晴れるかも知れず

あきらめてから鉛筆がちびている

足跡を消す風なれば温かし

太鼓が止んだら捨てたお前がふり返る

善男になれそうもない手を洗う

美しい負け方と思う白い足袋

攻め易いならば籠城つかまつる

ためいきはもう聞こえない午前四時

谷 眞 風

千羽鶴翔ばそうみんなのいたみ載せ

飛行雲子は大阪へ着いたころ

ありがたや日にち葉のしるし見え

お互いに傷にはふれぬあたたか味

初光り白い四角な室ながら

春はもうこの道端のイヌフグリ

浜木綿やナースやさしき南予弁

電柱にも頭を下げて当選し

銀杏並木を真直ぐ歩く朝の幸

看護婦の冷たかりけり標準語

谷垣史好

丘は緑子供が欲しいなと思う

埴輪には含羞みがある西陽

草に寝て思うチロルは遠きかな

西海岸の陽は燦々とレモンの黄

あみだくじ生きてゆくとはこのような

尻尾つかまえたぞおや胴がない

春の海虞美人はなお睡りおり

ホラ吹いたあと剃刀がよくすべり

なめんなよ腹に晒を巻いている

枯葉舞う怨みつらみの女文字

谷口信子

知恵熱を出したわりにはただの人

号泣の妻へマイクを事故現場

わらべ唄ふと口ずさむ茜雲

炎えるよな老いの絵筆に温まり

荒波を寄せては砕く夫婦島

勢いが緩み七色見せた独楽

おにしめの醤油の匙は亡母ゆずり

好きな色亡母に似てきた七回忌

還暦もチャンづけで呼ぶクラス会

火消つばいらぬ夫婦の残り火よ

谷 出 巳三代

我を折ればたくまぬ笑顔ふっと出る

首だけがなびいて里芋土の中

越えてきた山をしみじみ振り返る

ポケットの中から内緒が顔を出し

転作へ期待をかけて見る市況

活けられた花も蕾の頃憶う

緊張が解けて欠伸が堰を切る

世を渡る手だてを舌が使い分け

碑の遺訓へ合掌はなれない

晴着縫う一針毎に来る師走

玉井豊太

悠々と雑草でいる自尊心

産声に付き添う母も汗しずく

亡母さんの躰が染みる生活費

人妻と真っ暗闇の橋わたる

薬箱古い薬がある暮し

足踏みのスター晦日の寒い部屋

宿替えに漬物石で揉めている

おんな好き女が知らぬ筈がない

娘もやっとな落ち着きくれる候文

根なし草今日もゆっくり流れよう

玉置重人

花好きな人の善意は信じよう

うららかな日ざしでベビー靴を買う

老妻とナンバあたりで待ち合す

花道で味方がひとり去って行く

息子から貰う情は輪廻だろ

口も手も早いのがいる紳士録

数え唄ふれてはならぬ傷を持つ

人間ドック出るとポケットベルが鳴り

よく迂る口で後悔ばかりする

両手では掬えぬ恩を抱いて生き

垂井千寿子

幸せな人生を来たアンコール

腹立てて鏡の中の貧しさよ

紙人形作る夜女の影うつる

少年の拳が握っている光

道草の炎は女の方が消す

現実を見つめたくない心の目

脱線はしても阿弥陀の手の中で

寸前の笑顔が語るデスマスク

千羽鶴千羽で痛み分かち合う

避けられぬ運命線は受けて立つ

丹下玉子

家出した猫の飯皿仕舞いかね
嘘一ついちごの赤にとじこめる
月の夜は乳を飲ませている人魚
コンパスの中で夫を遊ばせる
深くふかく火種を残している夫婦
独楽ひとつ回しそこねた挫折感
強がりの男ポキポキ指鳴らす
大きな涙ためて真珠は人を恋う
風の又三郎タイムトンネルぬけて来る
風止むと森の神々失語症

千原恵

川岸の柳が芽吹く春曆

蝶が舞う春の音譜が聞こえそう

草木染ゆかしい色をかもし出し

お茶入れる庭へ、三分の梅が咲き

古漬の梅壺しきりに亡母恋し

理屈ぬき気の合う同士句座にいる

シルエットに心ひかれるあだ花よ

義理人情うすれゆく世をわびしとも

親切があだとなる日の風寒し

繕ったほころびうれし逢いにゆく

丁 坪 サワ子

終電に間に合い酔いが廻って来

宿坊で朝の茶粥の旨いこと

カラオケで若さと溶ける術おぼえ

十二支の頭に景気かけてみる

フルムーン亡夫と夢見た遠い日々

養老院長い旅路を語る顔

切り札は黄泉の国まで持っていこ

茶碗柄嫁の世帯で派手になり

見返りは求めてならぬ孫の世話

入園の孫は家中の人気者

月原宵明

行く里はあっても泣ける母はなし

シャンデリア貧しい者の味方せず

ひとり言毎日香が聞いていた

瓶の水じっと謀反を抱きしめる

親と子の会話ほんとの親子かな

角砂糖嘘が崩れてゆく姿

雨靴を女系家族の色で干し

入道雲五百羅漢の貌がある

まん丸になって消ゴム意地がない

人の訃を酒の肴にして悲し

辻
圭
水

日本髪知らない人によろ撮られ

友情は黙って判をだしてくれ

福相が頭下げたで丸うすみ

積残しすまない顔もしてくれず

予算通り使うにこうも判がいら

お茶一杯よばれただけの義理がある

お茶だけで帰らし悔いの残る夜

目的もないが人出の中にいる

支払いをするのにこうも並ばされ

バス停へ今日が始まる顔が寄り

辻

白溪子

初孫と対面心がすぐ通い

寝返りの智恵で玩具へ手が届き

定年のない仕合せな趣味を持ち

還暦に生れたことにする余生

仕合せな余生身内が頼り切り

夫婦仲よいご無沙汰と信じきり

どん底の出直し夫婦で屋台ひく

日雇に馴れ逞しい寡婦の汗

野の仏文化に遠く忘れられ

柴積んだ構図が絵になる雲の位置

辻
文
平

仮縫いの糸倅せな顔になる
人間を捨て切れず曳く遍路杖
米びつを満たし疑い深くなる
流灯の霊しばらくは犇めけり
絵日記の始めに父が拾われる
許されて古い言葉の中にいる
喪が明けて女を捨てるにぎり飯
葱刻む遂にわたしを刻む音
絵にならぬ一生だった土踏まず
目が醒めた男に痛い妊婦服

辻川守

三十の男を揚げる夢を持ち

まだ早いお世辞言われる三十路

義兄の癖横目で人に話しかけ

書店なら安心するか待合わせ

優勝かファンに夢をスポーツ誌

休職に長編ものを読みつづけ

外食のわびしさのこる一人者

浜風にふる縁談も親まかせ

責任を背負う男は旅にたつ

大空へでっかい夢も鯉のぼり

恒
松
町
紅

還曆に一つ秘密を置いておく
この道もいずれ舗装か曼珠沙華
縁談に宗派が違ふことでもめ
落ち目なら庭の盆栽までも枯れ
夫婦して積んどく主義の性が合い
あらそえぬ血筋に高所恐怖症
肉食と菜食別居して平和
両手があるのに勿体ない自動ドア
平均に播いた種にも出来不出来
身体だけ大人で学生証をもつ

坪田紅葉

里帰りの着物がつづく宮の道

旅の駅お茶のサービスお茶所

昔の香ほのぼのとあり新茶飲む

パン食になれた子供のすし嫌い

寿司出前客が帰ったあとで来る

常備薬持ちあるいてる年になり

のみ薬忘れる様でよいきざし

道を聞く人見あたらぬ屋敷町

買わぬ気がセールの波に巻きこまれ

おだてられ押しの一手で買わされる

津
守
柳
伸

正月の笑顔をコピーしておこう
美しい記憶に戻す母の種

風花が舞うと地蔵の眼に出合う

修羅ひとつ越して絆が強くなる

ぬるま湯にひたって虹を見失う

いとも無造作に盗まれていたハート

嘘に逢うたびに凍結する受話器

帰したくない肩を刺すのは細い月

栄光の椅子に孤独を貯めている

智恵の輪を抜けると春の風が待つ

津山冬子

母の日に娘の贅沢な京の味

言い訳を持って訣れた雪の道

妻の傘駅へ来ている声をかけ

ライバルに負けて心が軽くなり

黒髪の過去修道院にカンナ燃え

失意の日ふとヒマワリに励まされ

諦めた世代の流れ乗り損ね

老眼鏡好きな和裁へ秋深む

安楽死したいと思う曼珠沙華

しめくくりしたい心がガラス拭く

寺井東雲

ひたすらに尽す女は美しい

ビデオ見てがっかりしているお父さん

一円を拾った人は主婦だった

口ずさむ浪速しぐれの妻になれ

モンローは去ってもファン生きている

先頭の蟻はやっぱり甘党で

嘘で良い褒めて下さい易者さん

社名よりスターの顔を覚えられ

ホステスが堅い男に酔をすすめ

悪役の顔をタワシでこすりた

寺 沢 みどり

約束の通りに生えた糸切り歯

なだらかな曲は持たない蝉しぐれ

弱虫の雨が雷つれてくる

月へ近づきたくて雑草屋根で咲き

噴水のしぶき一定距離で舞い

ちぎり絵の花にも四季の風当り

持ち慣れた袋と歩む細い道

ホカロンがじわじわ効いて来るなさけ

冬の海それでも島の灯が誘う

髪巻いて明日の天気を信じ切る

寺田裕美

負けるのがきらいな首をひっこめる
本物に出会った固唾が喉をこす
充電がそろそろ切れる寝返りだ
ひと山で売られるリングに傷がつく
少年と孤独をつないだ天の凧
手のならぬ方を窺う鬼の首
平坦な道でなかったハイヒール
羽繕いばかりの一生かも知れぬ
春夏秋冬草の匂いの母でいる
疵つかぬ言葉をさがしている無口

天正千梢

人間を相手に悪魔将棋さし

「お役に立とう」大それた事思い

峰々の対話を運ぶ朝の雲

いとしさはふれずも落ちる萩の花

禅僧の無言が楽しくなつて来た

沈黙の哲学語る散り終えて

香たいて人生の深さに沈みきり

ペンで刺してかえり血あびている

老いゆかば形なきものほしくなり

罪業消滅祈る音かも瀧落下

天 満 三 千 代

丁重な言葉ではだかの電話口
不意の客二本の手足うろたえる
投函がポトン淋しい音をたて
叱らない母の笑顔に責められる
顔たてるただそれだけの会に出る
追い越さぬパトカーやけに気をもます
寝そびれた耳がピーポー追っていく
バーゲンセール女心をまつり上げ
羽生えたようにお札がとんでいく
和の中に生きて夕日のすばらしさ

土居耕花

跨がねばならぬところで妻昼寝

媒酌をして暫くを若返える

善積んで観音様に抱かれよう

お角力の何処を見ているのか女

アベックに敷かれて草がこそばゆい

腹立てて出るのではないジャンプ傘

恍惚と言われ勅語を言うてみる

すぐに効くポックリ寺は詣られぬ

焼きするめ旨いと思う齒を思う

老妻に時どき足を触れて寝る

土井輝恵

クーラーは快適息子殿の部屋

進路決定自衛隊の子もいるという

親離れする子へあれこれ荷を詰める

はるばると息子の下宿にたどり着き

嫉妬するほど父と娘もつれあい

習いたての英語で迫ってくる長女

コトコトとミシン踏む子に育ちたり

うんうんと素直な夫は二日酔

不景気風身辺忙しそうな夫

悪友が一丸となる一大事

東野大八

隻手老残

戰場を想えば無き手がしびれだし
片腕で抱けば泣く子が寂しかり
両腕で抱いて欲しかろう妻もまた
歩く妻手のない肩により添うて
うれしい日丹下左膳を真似て寝る
姿なき手がわが青春を握りしめ
義手はなぜ御仏の手に似たりしや
アカシアよわが片腕の傍で咲け
白髪が幻の片腕へ抱く鎮魂^{レクイエム}歌

遠山可住

寒椿咲いてまだ来ぬ蝶を恋う
陽が落ちてから公園が若返る
数え唄一番星へ手をつなぎ
三十年流れ作業の鋏を打ち
折鶴になったら紙が呼吸する
誘惑の嘘はやさしくやって来る
年寄りがおりなはるにと恥をかき
晩酌代だけ稼いでることになり
銀行が来て定年の気にさせる
定年へドットとお金にならぬ役

富上光代

心まで下積みでなし大手振る

米一合といで女の城暮れる

一代の富ボンと吐く遺書を持つ

矢面にも立ちます今日を生きるため

ふれあいが欲しくて旅の切符買う

浮き沈みまた一回り大きなり

行く先は一つ十字路迷わない

浮き草の水に委せて今日も生き

ちぎれ雲明日のわたしを見てしまふ

波除けの母へ甘えて打ち寄せる

土
岐
ト
ク
子

水割りを片手初子にほれなおし
母思う娘の心情のプレゼント
もみじ葉の小さな生命愛のうた
酌み交す婿はつらつと笑うなり
スピーチはお手のものよと娘の気っふ
才たけた嫁でそつない思いやり
ママ作る児のほほえみのマドレーヌ
耳朶に亡夫華燭の宴に遠く居る
念願の二重橋を背にハイポーズ
美しく老いて小さく会いにくる

時 末 一 灯

淡々と唄う人あり冬の坂

老いの手の珠を放てば野火になる

頂上に覇者を弔う穴がある

花道が切れたとみたか至近弾

刑のごと渡る深夜の歩道橋

友でなくなる日弁解遠く聞き

一軒だけの日の丸無風になってくる

放されてから風船は考える

努力賞だけの柩に細雪

杖ついて路傍の石が見えてくる

時
広
一
路

大空に向って不遜なる欠伸
足の向き変えれば向い風となる
お互いに檻の中から手を伸ばし
眼を閉じてごらんよ海は喋ってる
気まぐれな彩は持たない冬の花
倅せな日の自画像を描いておく
善人の指そろばんがはじけない
家中の時計が今朝もみな動く
片方の耳は良いことだけ聞こう
この服を着れば私でない私

徳田しずか

一握の米を男が研いでいる

葦が聞く川の身の上話など

祈るとき女の髪は長くなる

十三夜すこし重たい蟹の爪

鍵ひとつ水の深さへ投げてみる

誠実なおとこと暮らす竹箒

本棚の奥に二十歳の飢えがある

今日いちにち溶けてはならぬ雪兎

父が黙っているそとは風だろう

夢売りが夢の続きを売りにくる

都 倉 求 芽

一と処は切れるとこあり錯刀
遠吠えも遠吠え地球の裏側で
街灯のとこだけ雨のひとり言
小さいけれど固い幸せ握ってる
音もなく流れる水に似て夫婦
短足でよし僕には僕の歩き方
駅前のおどん屋乗る汽車聞いてくれ
庭の夜を抱いて沈丁花眠らない
春雨の中で木蓮座禅組む
嫁った娘の部屋そのままに陽ざしのび

富田康子

品種改良すっぱい味が欲しくなる

秋深む蟻の貯え出来たやら

夢のせとばしたはずのシャボン玉

胡瓜植え胡瓜が実る嬉しさよ

素晴しき夢もう一度閉ずまぶた

丘越えて行けば倅せつかめそう

幸せかと尋ねてみたい盆栽に

ぎっくり腰になって気づいた四十坂

ぬくもりを絶ち切る朝のオルゴール

クラス会レモンの味の君もいて

仲
どんたく

春に逢うまでの命の糸紡ぐ

まだ生きるつもり
の会費前納す

民芸の窯の野性を撫でている

秋の冷えアドレスブックへ死去と入れ

敬老日去年は歌うていた位牌

お月さんちちろのカラオケ聞いてはる

秋空の底まで投げる石拾う

もろもろの去来の中の敗戦日

盤石の尻安心の境に坐す

故郷を持たぬ男のサングラス

中井栄美子

真直ぐに来るあの人を避けられず
ときめきが背まで廻る春の風
もうひとつ影が欲しいの月夜道
お声だけちょっと聴きたい十円貨
リメンバ―ミーそっと囁く岐れ道
そっとしてあげよう疵が深いから
やさしさの裏にハイドも北叟笑む
まだ幕は引けぬ私のドラマ描く
策はもう見抜かれていた懐手
耐えぬいて許す心が広くなる

仲井素水

一粒のゴマ万位と僧の説き

本人は知らずガンだという噂

注ぎ足して呉れる火種の音便り

華やかな彩を探して孤老の画

わずらってからでは遅い食養生

賽の目が思い通りに出たよい日

年輪の乱れも見えて喜寿近し

過去のシミ抜けず白紙に戻れない

住みよいか貧乏神も宿替えず

金のこと言い出し女遠くなり

中川幸一

呆けてからホントの事を口にする

ロボットに真似の出来ないゴマを揺る

感動の窮みか手話が動かない

遁世の尼にも熱い血の滾り

べんちゃらの種がないので犬を褒め

親の言うこと聴かんとこまで親に似る

征露丸正露丸とはよう言うた

碧い眼のお世辞何でもワンダフル

酔うて詠む李白の真似をした鴉

補聴器を外せばこの世静かだな

中川滋雀

五風十雨明日の財布は考えぬ
少年のてのひらをひよこ知っている
シャボン玉消えぬ思いを追うばかり
自画自賛白紙のままにあるロマン
捨て切れぬ欲を小出しに今日を生き
向い風耐える喜びだってある
腹立てたときが素颜かも知れず
鏡には写楽の顔もして出かけ
安心が欲しくて判コ貰てくる
日々好日菊の白さが極まれり

中 島 生々庵

初恋も二の恋もなく尉と媪

癩性の女房シャツにも糊がすぎ

親ヒスに子ヒスをほめる小児科医

大雷雨虹一本を置いて去に

後ろ姿拝みたくなる母の老い

聴診器私の胸を聞いてほし

粗品とは書いたが内心得意なり

病む母が俺の夜汽車をいとしがり

せめて楽に死ねる薬を聞きたがり

枯れてから又蓑虫の役に立ち

中島小石

光と影とりんごでさえも裏表

連休とかかわりのない老夫婦

冷暖房完備で衣更え知らず

松葉杖ついて嬉しい試歩の朝

負けて勝つその後味に救われる

ぜいたくに馴れた味覚をもてあまし

独り居へ茶柱心はずませる

電話とはちがい矢印逆につき

物価高曲ったきゅうりで間に合せ

旅の宿料金外が高くつき

中島正博

味噌汁の味が変らず日々平和

角の立つ話は止そう丸い月

上塗りへ今日も一つの嘘を積む

葛藤の渦が決断鈍らせる

よく笑う一日だった腹が減り

先に血がのぼった奴が負けになる

塗る程に佗しさ滲む厚化粧

窓際で廃車の山をふと憶い

じぐざぐの足跡八方美人なり

寒鋤きに土新しく蘇える

故 中 田 野 川

大雪へ思い思いを提げてくる

春づく日小村半分晩になり

月影に鎌首立てた縄のきれ

鍬ふれば影は隣の畑を打ち

石段を数えて鎮守の栗は落ち

叱るにも保母は頭を撫でながら

だんらんへ阿呆になれる妻がおり

若やいでばあさんと繰る古日記

病妻と老いさらばえど恋依然

老人のしょう懲りもない夢に生き

中 西 兼治郎

負けそうな犬が来たので抱いてやり

大粒の雨スタンドに傘の花

信仰の強さが寒の滝へ立ち

貧乏が私を磨いてくれました

ピカピカの自転車こない安定所

ボリーナスを社長言い訳して渡し

来客にテレビ消す客消さぬ客

約束へ母にはすまぬうそで出る

迷惑をかけないためのうそをつく

奥の手の寒肥で春の花を待ち

中 根 勇 太

糸車廻す月日の中に老い

歳月の流れが功を風化させ

汗の価値汗を流したものが知り

負けチームよりも泣いてる勝ちチーム

連休の雨文無しを喜ばせ

あり余るものに心が貧しすぎ

長命も天下の権を握る運

ヒナ壇に残る一人が高島田

おめでたい席へ真鯛が反りかえり

祝吟の馳走に弾む披露宴

長野文庫

子の閨は景氣よいぞと楽しませ
豪雪を忘れて花は予定通り咲く
五度六度「雪」占いは吉か凶
「雪」六度豊年どしの六倍か
雑草は冬の用意もなく枯れる
小鳥啼く声にも春の気を感じ
青い芽を見つけて心弾むなり
ピアノ弾く代役の指大写し
下請も積木のように共倒れ
自炊して覚えた即席料理法

中原 汲香

倅せをつくる涙は塩辛い

手と足へありがとうなど言いたいな

楽しみへ苦しい汗がほとばしる

広場へ出よういい友達が待っている

倅せに遠い人だけ手をつなぐ

おだやかな海怨念の骸寝る

私まで仏は慈悲を注がれる

喘ぎつつ生きて来たとは語るまい

棒振ればバツハヤショパンが躍り出る

実らない花で私を悩ませる

中原比呂志

路郎師のひ孫で編集五〇〇号

責任を果せば風邪熱消えていた

前進の構えで玄関並ぶ靴

分けおうて絆深める荷の軽さ

祖父尋小父母中卒で一浪し

小中塾高浪大卒就職難

罪人も金持ちも出ぬ男すじ

制服を着て正月を忘れてる

くるま偏妙なところで意気投合

ラッシュとは逆方向に乗る非番

中原 諷 人

流された時間にボクが浮いていた
指五本まるめ倅せ固くする

断水の蛇口おんなは眠くなり

目障りになるから僕の妻にする

食卓の上でスマレが咲きました

天気晴朗けさの妻には歌が出る

リハビリの軌跡ボロ靴捨て切れぬ

身障手帳ボクは有難うが言える

出雲の神はでかい夢だと申された

点と線つなぐ身障者のふたり

中原
みさ子

どん底に母の笑顔は変わらない

廻り道しても貫く的がある

嫁ぐ日にそつと眼鏡を拭く父よ

女です十字路迷うことばかり

絡ませた小指やさしい風に逢い

ハンディを背負う夫婦の夢は燃え

月よりの使者が適齢期をさらう

風呂敷へ亡母も涙も入れて置く

母亡くて広場が好きな赤いクツ

髪撫でてポツリ夫が詫びてくれ

中村優

雑沓で一息入れる四面楚歌

クーパーと再会雨の降るシネマ

遠い日の手まりが弾む亡母の唄

神の鈴鍔の鈴を振るも妻

冗談が冷えて背中に風刺さる

啄木の背文字が重いエトランゼ

銀婚へ幾度贅えた夫婦箸

百面相映して寒い姫鏡

札を着て男冥利な夢芝居

眼隠しで手の鳴る方へ導かれ

中村有入

他人には聞かれない戸を閉める

馬鹿なる俺には勇氣持って居る

糠味噌の味も母から妻が継ぎ

一日が暮れて二人になる会話

天然の美は色となり音となり

針運ぶ女の季節木の葉散る

自画像が笑った夜は嬉しくて

戸を叩く音は風なり一人寝る

懐手してる男に謎がない

打てば響くでは無いがよい女房

中村 ゆきをを

ガヤガヤと胴上げされて見送られ
商社マンかばんに語学とユダを詰め
自己主張他人の痛みなど知らず
人情すすりラーメンすすり話きく
だまされてよかったあの日の落し穴
気ばらずに漫画読もうよお父さん
叱られた上司の背中があたりたかい
自動ドアまねかぬ客へ機嫌よし
ふと我にかえるとなにもない都会
戦争をしない約手を探そうよ

仲 本 こうじ

禁断の木の実よなぜに手に触れる

鳩時計ふたりの刻をノックする

恥じらしいの返事コックリだけでいい

淡い色日記に彩をくれたひと

思いきり甘えてみたいひざを恋う

砂文字が消えてまぼろしもう見えぬ

時効でも明かせぬ秘密ひそと抱き

改まる口調彼女もちとこわい

シクラメン炎のごとき思慕を秘め

さよならを目顔で残す横断路

柳 楽 鶴 丸

針の穴から女は何を覗いている

モーニング・キッス習慣は恐ろしい

半分ずつという落とし穴がある

夫婦喧嘩今日も千日手で終る

命あずけて膝枕で耳掃除

僕のホッペへ落書きしたキッス

一輪差しへ甘い言葉が活けてある

白いスターラインが毎日引いてある

赤いボールペンが僕を裏切った

ゼニにならぬ肩書ばかりで義理を欠き

灘尾民子

巢立つ子の胸に大地が果てしない

拭えない業を背負うて女坂

老いの坂押して押されて二人連れ

母の愛どの子もおなじ匙加減

断ち切れぬ未練に雨のサングラス

なだらかな坂でも押す手ゆるめない

身の上を語れば同じ傷に逢う

倦怠期輪ゴムは伸びて手のひらに

欲一つ男の海は妥協せず

未来凶に親子のライン交わらず

難波久夫

受話器置く音も心のとどく音

名前まで良い名に仕上げられてゆく

名月をつけっ放しでどこも寝る

人間と動物園の差で笑う

人生をあたふたと行く朝ご飯

階段を神経痛と降りてくる

布団縫い上げましたにぎやかな塵

感傷と平和になって来た軍歌

持病とはまだ昵懇にしています

置かれたらマイクーと言ひとりごと

難波久代

流れ来てここに黄色の花が咲き

紅芙蓉咲いて緑茶に人を恋う

満点の夫でないからついて行く

頼る杖神に求めて今日を生き

嘘言うてそれでも白い足袋洗う

善人の嘘聞いている蝉時雨

思い出のつきぬ親娘の針坊主

足入れた趣味に時計は休まない

明日を見る眼鏡は何処にも売ってない

一人寝の枕が聞いているひとり言

新 岡 回天子

喜寿の宴まだまだ生きる笑いあり

トンカツになる運命を良く太り

雲一つなくて対馬の見える釣

何もない俺だが自伝らしい物を書き

無為無策原稿用紙は〇とてん

大いなる天地理論に生きたいね

退院を近所又来て長話

退院を知ったか電話又かかり

久々に見れば雑草花が咲き

今朝の夢何分気になる朝の膳

西尾 棨

読初や句集旅人福寿草

てっちりや路郎門下の生き残り

空蝉や我れ七十の掌に

新幹線隣りは何をする人ぞ

森田たまの随筆を借りたままである

もの書きの妻叱られて叱られて

大きめの屑籠がある書齋

君に似し姿におどる心はも

湯豆腐を掬う夫婦をかろく妬く

紫陽花の見事な変身我れ愚直

西田 柳宏子

しばらくと待たされコロッと忘れられ
妻が居る空気みたいに居てくれる
隙間風親子の対話消してゆく
甘んじて卑怯者にもなる大志
出しゃばったとは思ってぬお人好し
プライバシー覗いて罪を一つ抱く
目の届くところには息子居たがらず
背伸びしてみてもヒールの高さだけ
兄ちゃんの二の舞はせぬ塾通い
取替えた筆が未熟を笑い出す

西 出 楓 楽

うれしさの隠しようなどない手毬
父と子が入ると風呂が長くなる
かばわれて心のたがが締らない
過去形で話せばすべてあたたかし
言い勝ってひとりの闇を深くする
本心を吐けばくずれる砂の城
地図にない街で捨てたいものがある
目の位置を変えると美点みえてくる
逆縁の仏は闇を抜けられぬ
胸底に鬼が一匹棲んで冬

西岡豊

教育のどこが欠けたか軋む音

寄せ書きに望む言葉の鮮やかさ

燦然と輝く校旗ピアノの音

巢立つ子に励ましの手を差し伸べる

大安の家紋の袷紗春の使者

振り袖の金屏風背にハイチーズ

司会役ここで一笑メモに○

河豚鍋に天狗と鬼が和んでる

春うらら蝶も蜂もと浮気する

生きるため女笑窪を深くする

西岡洛醉

平凡な積木でもよし崩すまい

貧乏神背中を押した行きづまり

通勤の隅で小さな夢かこつ

正論を吐いて男は竹で居る

一輪差し嫉妬を知らぬ花で咲き

一億円あれば死んでもいいの嘘

理想に遠い運命線握る

賽の目を投げそれからの長い旅

サデイズムの鞭振り上げた日の焦り

影ぼうしもう一つの顔かくしてる

西川景子

春です、ね、間違い電話多くなり

糞虫に意地悪をして風邪をひき

それはそれは涎が出そうな毒いちご

風みどり樋口久子になる帽子

悪妻を宣言してから太り出し

洗い髪すっかり乾いた長電話

犬の皿夫婦げんかの余波をうけ

ポリーナスを浮気の虫にもちよっと分け

楽しみな約束続くカレンダー

二人だけの小箱の底にある話

西口 いわゑ

荒れた手を眺め歴史をふり返る

美しく老いたと言われた鏡

沈丁花存在しかと伝えて来

うなじ吹く風が美人にしてくれる

半分は心残して旅に出る

汽車の窓後へばかりの走馬燈

いつからか目礼をする朝の駅

のっぴきのならぬグラスが向い合う

誤解とけ花も一際美しい

梅の香にフツと浮んだ遠き人

西村 かすみ

寓と書く門へ手描きの帯が消え
スケッチの続きをたどる旅帰り
恍惚の父にもあった光る過去
たそがれの寡婦には遠いおもちゃ箱
まともなら惜しい美貌を精神科
傷心の道に歪んだ影法師
よく笑う母はやっぱり欺せない
三人の旅の一人は石を蹴り
啄木の歌が身にしむ汗をふく
舞台裏そこにも一つあるドラマ

西村早苗

あふれ出る不満を酒の座にこぼす

傷だらけの女体を北風にさらす

女憎む日もあり朝の蜘蛛殺す

老化した運命線についてゆく

たまに来る女の勘に匂うもの

ひとり酔いひとりで愚痴を吐くのれん

炎えた日の記憶に遠い石仏

なりゆきにまかすと耳に小さい声

子のようにはしゃぎ嬉しい日の心

煙草の輪ふっと崩れたすき間風

西本保夫

明日からは囑託として通う道

誰も居ぬところで囑託年齢をとり

まだボクの名前が残る設計図

あっさりとの場は悪者になる勇氣

音の無い拍手に定年迎えられ

もう二度と来ない会社を振り返る

このボクの休まぬ記録老父に似る

いま老母が生きてれば喜ぶことばかり

定年へこれから妻とのプランだけ

ゆとり持つ心にプライドだけは持つ

西 森 花 村

弔問は寿限無寿限無と言うに似て

貯金帳心経に似る空と無と

磨き甲斐あるのは鍋の尻ですな

真直ぐに葦も電柱も立っている

注文が無くても歌うバスガイド

サヨナラに病人よそごとばかり言い

横穴遺跡ビジネスホテルの跡ですな

秋風の河原に犬も人も老け

三十三間堂スパイが隠れて居やせぬか

私の目届かぬ背中
で年を取り

西山草笛

黙禱へハンカチに包む咳一つ

秋日和緑樹にひびく庭袂

折々に母を招いて知恵を借り

冬の海遠き思い出攻めてくる

太陽と仲良し父の肌の艶

千鈞の重さは父の白髪です

嫁がせて母はもろくも杖がいる

風鈴に子守させてる核家族

酔うほどに父は陽気のひとり言

籐細工勝気な老いが二人入る

西山幸

咲いて散るただそれだけの世に疲れ

花びらの掟は風に背けない

捨て場所がないポケットの石ひとつ

私をころす雑巾縫い溜める

傍観者になりきっている置時計

長い夜の人形の眼を拭いてやる

明日があるあしたがあると毬をつく

凧かあれは積木の揺れる音

峠にはきつと踏絵があるだろう

歳月やゆるし合うより他はなし

二 宗 吟 平

定年まで亡父の保証の印が生き
鳥籠はいらぬ木の實が庭にあり
貯金して年寄りなりの夢をもち
ゆうらゆうら唄で鍛えたかずら橋
由加山の句碑をカメラにみなおさめ
残留兵あきらめていて名を探し
横好きがボランティアの役にたち
山寺のここもゲートの枠を組み
孤児が月泣き日本中がつられ泣く
梟が鳴けば遺影に目がる

二宮山久

好きだから貴男まかせの舟に乗る

子育てもはなれ静かな夫婦酒

境界を持たぬ男の太っ腹

印鑑の重さを知って押す書類

悪人の口の重さを信じよう

爪あとがうづく昨夜の別れ道

ウインクを盗んだ男は独り者

表には出ない器用さだけである

妻の持つ紐の長さにある自由

プラスにはならぬ煙草の輪がゆれる

仁 部 四 郎

有名税請求あれば払いたい

沖縄の海美しく嘘のよう

今日はまだ人生相談読むゆとり

おそろしや彼は教科書だけを読む

月曜のハンカチ白に決めておく

人情を押し売る標語の好きな人

月光の青さを知った謀叛の夜

国民が学校好きで国が伸び

教員の帰宅が記事になる恐怖

振り向けば折れてくれるか後ろ指

野坂なみ

梅一輪ご縁頂き候て

枕木もれんげ菜の花恋しがる

乗換えの駅ここからの一人旅

当り前の顔してみんな生きている

弱虫へ殊更きつい風当り

髪二本秋の畳に落ちている

秋の仲間よいたわり合って暮そうね

寝過してゐる間に緑青染みついた

壁の創庇う暦は大きめに

末期の水一つの罪が昇華され

野
田
宵
風

源平の夢を螢の灯につなぎ

延暦寺一隅照らす心の灯

つくばいの一人楽しむ昼の月

他人から見れば二人の良い歩調

雑草の生きる権利をもてあまし

ついてない顔で佇む雨宿り

味噌汁のお替わりもよし里の味

豊作を語る農婦の葉風呂

子育てへ心もとない共稼ぎ

一本になってマッチを持ち直す

野 田 素身郎

肺切除泣くなお前のせいじゃない

ボーナスの使途狂わせた肺切除

ネオンが綺麗な部屋で明日の手術待つ

死亡記事がやたら目につく手術の日

手術後の点滴続く熱帯夜

入院百日酒も百日断ってます

見舞客帰ってどっと日が暮れる

自宅療養丹念に見るコマーシャル

朧月病後の酒がよくまわり

既往症欄改めて顔見詰められ

野田實

科学者の夢が地球を砕きそう

よい夢をみようと思ったジャンボくじ

人生は夢に生れて夢に死す

悔いのこす夢は青春のことばかり

科学者は夢の世界で息をする

微笑まし老人夫婦横断路

夫婦碗大きい妻も小さい方

平和だなミカンとオレンジ日米戦

母の城近頃男に明け渡し

子の祝辞じんと涙の金婚式

信 本 博 子

好きだから肩もこらずに筆が持て

平安の夢にたたずむ梅の里

おしゃべりをしてうっ憤が晴れました

長男が小声で話してる電話

くり返し親のない子におじぎされ

おのろけに最後はなつた友の愚痴

ヒヤシンスお義理みたいな花が咲く

一つずつ食べ食べころの吊し柿

ビスケット孫に与えて叱られる

赤いくつはかせ立ったもまだ出来ぬ

野村静雄

艶やかに少し乱れるように酌ぐ

晴耕雨読道頓堀へ時に出る

もう孫の方を向いてることにする

耐えて来た妻に老後を耐えてやる

宿帳へ嘘を書く日へ浮いている

焼香の順番までを句の話

負けたのを残酷に呼ぶ披露宴

還暦を無病の母に祝われる

もう悪いことは出来ない顔で寝る

夢を見た事には出来ぬ深い傷

野村きみ

春うらら意見無用の天下り

ワンパターン平和日本の歌ごよみ

高齢化昭和如きに負けられぬ

ご意見をどうぞ貧しさ語れない

溜めている涙は意欲の足がかり

もういいじゃないか挨拶長過ぎる

学習熱主婦も何かと背伸びする

たたかいを終えて無欲の店じまい

終着で拾う小さな玉手箱

迂濶には言えぬ言葉が伏せてある

野村 太茂津

なんとなく破滅に近い世に生きる

あの手には乗らぬこれから生地で舞う

バトンタッチまだ出来そうにない突っ走る

伴走に応えてくれたテープ切る

片足はいつも粹から出している

人間丸出しみんな哀しく美しい

人愛す生き生き旅の終るまで

つぎはぎの人生毎日新しい

失敗のとき泣きに來い俺がいる

次の世紀も人間であれ同胞

野呂右近

歳を積む生けとし生きる一人なり

鍵増えて信ずる物が減って行く

繋ぐ愛壊れる愛も赤電話

湯浴みして知る藍の香の肌ざわり

過疎讚美価値千金の水あふれ

美人薄命他人事として笑う妻

末世迄添うかと聞くを野暮と言う

一面識の人ともはずむ花の事

口惜しさは善意の嘘を詫びる破目

生真面目さそれが傷とはいただけず

野 呂 鵜 汀

さりげなく背の糸屑をとって愛
立ち呑みは愚痴り座敷は唄と三味
電話口誰かそばから知恵を貸し
身構えて見ても悲しや歩は歩なり
労働の喜びを知れ蓑虫よ
ルンペンも春は万花の下で寝る
縁遠くなる顔で寝る旅づかれ
うつ向けば髪の薄さを指摘され
お袋はきたのう老いて偉大なり
あゝ!!これが極楽という朝の風呂

萩原 みね子

流行に縁ない母の丸い背

縁談に見向きもしない翔んでる娘

手打そばさすが老舗の味を見せ

主導権嫁にゆずって丸く生き

祝い酒母も座らす場所を開け

現役を引いて老後にあるゆとり

古里は母なく足が遠くなり

合格の別にとび込む赤電話

麻酔よりさめれば闇に川の音

人の世の汚れを水で洗いたや

橋 元 美 恵

貴方待つ電車待つ花は枯れてゆく

うどん啜る水漬啜る片思い

女です溺れることも夢のうち

匂う花もらえばきつと夢を見る

道頓堀男女の悲鳴流れない

棘だけが残っていますバラの愛

執着は見せまいしだれ桜見る

思い出は枕の中を流れゆく

休息にやさしい椅子と熱いもの

灰皿を汚してどこへ行ったやら

長谷川 春 蘭

紙包みちよっとひねった志

駐禁を守り素通りした名所

午前二時夜のしじまの遮断機よ

鈴なりの絵馬の中から運盗む

ローンゆえ重荷担いつ夫婦船

難聴に妻のことばも荒くなり

合格を先ず母さんに知らす孝

泣きに来た子へ鬼になる親の愛

畳紙に女の見栄と満足と

みちのくを慕うこけしのうるんだ眼

長谷川 鮮 山

打ちおろす呼吸もぴったり向う槌

手の甲の厚さ古木のような指

茶がら撒く座敷五月の風が抜け

屁は屁とも思わぬそこがいいという

まっすぐに行くから人が馬鹿という

物差しで計ってみてる人の価値

いいところへ来たと言が言う助け舟

事なかれ主義五十年固い椅子

作戦にそれはなかった肩すかし

お解りになりましたかと知恵袋

波多野 五楽庵

飲んで泣く酒が哀しいのにあらず

難病も仮病も同じ薬のむ

発車ベル涙も一緒に歩き出し

震度五へ御先祖様の位置がずれ

忘れたと言いたい言えば嘘になる

七人の敵へ笑顔でいる自信

まだ五分の愛が哀しく荷をまとめ

太郎でも花子でもいい産着買う

柿の葉が散ると女の村になる

さよならも言わない君を泣くつもり

羽津川 公 乃

気が向けば男とことん掃除をし

恋人を持たぬ息子の登山靴

保険屋の粘り夫を死なす気か

宝島さがす目鏡を夫と買う

定年のやっぱり日曜朝寝する

職安で屈託のない長い足

若いっていいな素肌も光ってる

天職が見付かり無能の面外す

温室に咲いて自然を軽く見る

焼芋の値段庶民に遠くなり

服部 明陽軒

南北の句碑に誰待つ赤い服

請求書このおかみは筆が立ち

有情無情勇歌集の女達

持ち舞をメニューのように書いて出す

歳月を思う小唄も久し振り

Bの妓と酔い本心はAが好き

好奇心ママの履歴がきれい過ぎ

東では愛子西では聖子書く

わたくしと言う人からのいい電話

近松の女が生きている浪華

花田 たけ志

わが城にもどれば顔の小ざかしや
ため息は命を削る鬼の声

大小の差があるだけと罪の愚痴

心から見舞う言葉に無理がない

発展の途上へ先進の厚化粧

泣き言が聞こえぬふりの鞭もある

錆びついた仮面に本性乗っ取られ

味わいを現代テンポがせき立てる

靴脱げば既にささやく明日の敵

狙に乗れば通じる道がある

羽原静歩

幼稚園賛歌（一句）

不死鳥の苑にこどもの夢を描く
生かされて真実一路の旅をする
ふるさとの絵馬堂時雨するばかり
ブランコよ父の自画像越えて行け
流し雛亡母を流して満ち足りる
時よ止まれ山茶花ふぶきの女たち
神さびてカナダの山に声もなし
木曾路もモンマルトルにも石畳
ひのきしん則天去私の匂いする
柏手は漣か潮騒か

浜 本 義 美

古机憶い出一つひとつ拭き

天高く実りの秋を空財布

性別は脱がにゃ判らぬ人が殖え

汐風に脊中を向けて家並び

投函の後で気付いた誤字一字

倅せはいで湯の窓で陽を拝み

まり投げをして日本中湧きに湧く

羽搏いた理想の空が広すぎる

手の鳴る方へ従いてゆけない主義主張

目覚しが必要なくなつた老い二人

林
荒
介

椈の樹の翳から生れ出たおとこ
賀状から殺す相手をひとり撰る

闇深し祠にゆらぐ絵曼荼羅

目玉焼ふたつ並べて闇を抱く

蟋蟀が三半規管で鳴いている

十二時を打った時計が耳を突く

諦めたおとこ皿の花がつお

いきさつはどうあれ猫を飼っている

さていのち頭の上に雪が降る

般若心経を聞いている夢のつづき

林
瑞
枝

ドレミファを唱う椅子なら引き寄せる

淋しくて月へダイヤル廻す指

砂の塔ノラを退屈にはさせぬ

悩み解けるまでかごめの鳥でいる

一度だけ啼いた小鳥の黙秘権

子守唄聞き眠くなるピカソの絵

秘めごとを持つ人形は背を見せぬ

人恋いし文箱に青いペンを買う

仲間からはずれ月夜の蟹となる

指定席まだ風船は手離さぬ

林
す
て

空腹に思わず時計ふり返り

蒸発のテレビ子供に貰い泣き

気にいったおみくじ出ないとひきなおし

迷惑と言っても風邪は勝手にやってくる

老姉妹デートの別れはコーヒーで

コーヒーの後は番茶で口なおし

餌おいて鳥のくるのをじっと待つ

初恋の人もわたしも老人に

似てほしくないところばかり母親似

金婚式冥土と娑婆で別々に

林
澄
子

我が財布聖徳太子と気が合わず

鈍行で終着駅がない夫婦

泣き顔を見せたい時も鬼の面

ここからは他人同士のすりガラス

手繰り寄せもつれ糸解く母の意地

翔ぶすべも知らぬ素足の座りだこ

下馬評のつんぼ棧敷で出るクシャミ

冬雲の破れに温さ待つつくし

蟹喰いの旅の土産にお漬物

寅年がチヨロチヨロチヨロとコマネズミ

林
露
杖

生も死もなべて泡沫出年今年

毛糸玉ころり転がり童唄

悠久の自転の軌跡陽が昇る

鉦叩き心を敲き盆供養

円周の中の自由に甘んじる

責任の重さ知るから念を押す

虚と実の狭間に揺れているいのち

熱帯魚ミセスの情事白昼夢

なだらかな肩に女の業纏う

煩惱にコントロールが利くも年齢

林

はつ絵

窓開けて星まで続く風に逢う
風邪癒えず金柑なかなか色づかず
長い畝汗のみどりが深くなる
やじろうべいたったこれしきななぜ揺れる
子に写るわが影思うことしきり
クッキーが焼き上がり鍵あいている
ひょっとして鬼が顔出す窓である
菜を洗い見事に消えている月日
島を出る日痛みの数をみな許す
子だくさん放っておいても自立する

林野甦光

甘酒の余韻を母は口ずさむ

ものぐさに春のあかりが眩しくて

京都弁に少し油断はなかったか

きき酒の舌はひととき鬼となる

山門に哀歎がある千社札

職人の目であるいくらか頷いて

鈍行でアイラブ雨の町がある

次の駅で錆を落して行こうかな

零れ花昨日の彩を隠し持つ

風を着て秋を素適な旅にする

原

さよ子

本を借るだけで終った好きな人

年金のおかげ静かに趣味と生き

子育てにやっぱり借りる老いの知恵

かな看板見れば大きな声で孫

口下手で何度も頭さげておく

早朝の先行く人を追ひ抜けず

つまらぬことみんな忘れる今日の空

反省の自分を悔いる夜が更ける

呼び捨てにされて童心とりもどし

うっかりと教師口調がでてしまい

原
仙
波

スーパ一のレジは男に嫌なとこ
男一人で来るところで無し喫茶店
政治とは所詮切りはなせぬ五輪
嫌な思い出なれどもなつかしい軍靴
塾習字珠算現代っ子は哀れ
六十路半ば過ぎ心霊を信じたし
義理人情説けば浪曲さと息子
こりもせずよくサラ金で借りて死に
男は狼それは母さんだけの事
日本人だけが騒いで居るコアラ

原
独
仙

亡妻追慕

限りなき慕情独りの夜の炬燵

白紙いま悲しい文字の墨を吸う

流し雛恋知り初めし娘が二人

カラオケに現抜かれていて平和

すべからく平和な家庭恐妻家

虫めがね国会記事を憤る

女性から電話あんだのなんなのさ

末っ娘が猛反対の茶呑み友

杖ついてまだ情熱の歩と運ぶ

おい居るか居るぞ上れの仲である

春
城
年
代

宮水を守る婚家の白い壁

寝返ればそこにいつもの顔がある

夫の掌のなかで存分やんちゃする

ささやきが耳に残っている火照り

移り香がそこはかとなく長い夜

流れながれて終のすみかに萩こぼる

着飾ってほんねの吐けぬ場所にいる

捨てたとか捨てられたとか困に

残照に思いが映える誕生日

ご先祖の艶聞法事なごませる

春 城 武庫坊

ヴィナスを脱がす手ちょっと貸してんか

裸では幽霊出ないことに決め

不器用のままで過したまむし指

月に土地買うて每晚眺めよう

イヤリング外せば耳がおっこちる

水中花咲かせたままで退院し

ロボットのいれた香りのないコーヒ

バス停で一円玉がふるえる

終電が寒さを乗せて車庫に入る

首巻の狐が餌をさがしてる

故
春
名
米
花

君々二二ンが四では通らんよ
天井のまわったまでは覚えとり
友情は冬眠の俺起しに来
風雲をはらんだ妻の瞳に出逢い
夜の雨嬉しい人を引き留める
退屈をさせぬ車掌の片えくぼ
姉妹示し合わせて里帰り
無駄なよな父の言葉が生きていた
緩急はあれど流れにそうて無事
思い出の名簿にひとり無事な俺

吐田公一

傷口をなめて野良犬路地に消え
静けさを残して最後の娘が嫁ぐ
伸び縮みする人生の影法師
足跡の歩幅が合わぬ親と子と
我が家の花道妻に開けておく
筋金が支えた明治遠くなり
故郷の唄出稼ぎの胸を打つ
半分だけ信じとくわと妻の笑み
七色の夢を秘めてる孫の顔
子育てに化粧忘れた妻の顔

樋口匍底

今日こそが今日もに果てて年をふり

朝是色夜は是空とくりかえし

山川を汚していかで人の幸

法筵に“後生大事”のどこへやら

ほとんどの妻の白髪はわがつくる

我が家にもカナダの匂い娘ら帰る

あなたならどう思うかとなぜ聞かぬ

核競争人智の果の死闘かな

ままならぬ冷暖やはり大自然

過去は非非余生にかける鈍器匍底

日 阪 秋 子

下町の血が野良犬に味方する

そのたびに出発点にした日記

気がつけば哀しい財布の握り癖

性質をいつか眉間に刻み込み

嘘言えぬ気性が重荷になることも

貧しさよ五円の損を口にする

大切な夫に保険かけている

苦勞した髪をいたわり染めずいる

こころもち会釈で通る路地の幅

ご近所の留守引き受ける路地の犬

人見翠記

霧雨の木立の中の一人旅

ふと見れば人の流れに居る孤独

茜さす書写の峯々今日も無事

鷺一羽播州平野をひろくする

熱き血の流れを感じる手を握る

佛のふつつつとあり蜜柑むく

楽しみは京の都の京べんとう

有明の月を見上げた露天風呂

朴の葉に長寿と書いて祝われる

うつむきに落ちた椿の水たまり

平井照子

石投げて遠くで波紋確かめる

意地捨ててからは平和な母の日々

本心とは別にお世辞を置いてくる

ベル押してまだ迷ってるプロポーズ

背信へ怒りが徐々に深くなる

横笛をボスが吹くから踊ります

すばらしい初日幸せ抱いている

突き放す愛の深さに気付かない

真実を求め孤独に突き当たる

笑っても泣いても同じなら笑う

平井露芳

2DK場所決めてからごろ寝する

仕合せな落葉葉で生きかえり

年金に過去の栄光など効かず

掃除器が省略させた大掃除

戒名を予約それから元気が出

五尺七寸ぶらさがり器にほぐされる

餅つき器最後やっぱり手で丸め

寒いから走ると風もついて来る

寝不足の元旦計は立てられず

交番の空巢はピストルだけ狙い

平田実男

乗れば人歩けば車に腹が立ち
淋しさは老眼鏡を買い替える
心まで握手をしない手を握り
ギャンブルで会えば上司の顔でなし
スケジュールだけは立派な視察団
危険物思わす尼僧の美しさ
善人の嘘つく時は嘘の顔
特級も二級も同じ舌でよし
争って得た椅子ときどきささるとげ
恩人の皺の一つは僕の皺

平田たけよ

たがために羽づくろいする寒雀
花の咲くころの約束あたためる
風邪の妻もう起きている台所
勘ちがいふっと気づいた台所
八代亜紀背なに聞きつつ洗いもの
機嫌よい足音と知る妻の耳
いたわりの言葉がぬくい老いの耳
宝くじのように待ってた嫁が来る
太陽の恵みうれしい老いの背な
一つだけ知ってる童話で孫寝かす

平野 百合子

踏まれるより摘まれる土筆なりたくて

ポーフラに広さはいらぬ水たまり

ねずみ算赤信号は避けている

七癖に合せる妻と知る余生

倒算は掛け算ばかりの中で死す

易の灯に責任のない道しるべ

出来た姑嫁満点へ近づける

一人居の悲劇へ我を置いてみる

減反は前借機械の泣きどころ

勲章のないいとしきを母にみる

平松かすみ

乾杯で私ひとりが酔いました
幸せな切手美人になめられる
職業の欄へ小さく主婦と書く
チーズケーキ一口ところが丸くなる
それ程でないが心が美人です
ふとある日退職すると驚かされ
心配の数だけ剥いだキャベツの葉
壁に当たったら私はシャボン玉
ペアルック絡み合ってる洗濯機
夜食来る頃には本を開けておく

弘
津
柳
慶

盃よ今夜の愚痴を聞いて呉れ

三尺さがるところかバットで追いかける

妻供養過去をたどれば限りなく

あれが癖ですよと妻は笑ってる

雨の日を隣朝から声高し

山の温泉の朝霧南画となって明け

悲しみの事故へマイクの無遠慮さ

震度四新幹線にとじ込める

棄権するもしかで共産党へ入れ

待たされるままに花瓶撫でて見る

福井桂香

手のとどく位置で心が届かない
病む痛み知らず白百合むせかえる
春雷の中で生命が一つ消え
紅引いて母の性からぬけてみる
遠く身をおいて噂に耐えている
過去のある女話の輪に入らず
ガリばかりお替りしては銚子あけ
一合で酔える夫婦のよいはなし
すず虫を左の脳で受け止める
裸にはなれぬ鎧が重すぎる

福浦勝晴

向い風おのれを信じて踏むペダル

妥協せぬ男に師走のつむじ風

息巻いて行くパチンコで返り討ち

あの人もぼけたと自分は棚に上げ

石段を上ると涅槃のぬくい風

判断が邪推の域を出ぬ嫉妬

政界のアラを突ついてコップ酒

核論議熾烈のんびり秋の魚

中曾根もおれもおんなじ縞のシャツ

早寝早起き酒を心の妻として

福
士
ト
キ

ホームシック孫子の声に励まされ

宅急便故郷の香りが充満し

味噌汁の味は満点陽が昇る

凍てついてタワシがキスをしてる朝

思い切り背伸びしてみ春の空

草笛を吹けば驚く孫の顔

カーテンを引けば寝坊と鯉笑い

冷害の村にも嫁の来るニュース

戦争を知らぬ娘のカーキ色

洋食になじめないまま年をとり

福田 あや子

ストレスを消す処方箋妻が持ち

まるい石転んだ数は覚えない

白粉を塗って私が二人出来

特価撰る背なに冷房感じない

ハッキリかやる気か賀状デッカイ字

脱税を吉相印に咎められ

道標に誤字は許さぬ子が続く

悔いのない歴史を刻むネジを巻く

妻の座でモナリザの笑み確かめる

うるう年花は太陽信じ切る

福原悦子

雪に耐えた心に梅が咲きはじめ
木には木の約束があり新芽吹く
川渡りきるまで見てる母の虹
染めかえの着物に母をかみしめる
夏草の中で安らぐ野の仏
捨てられてもの言いたそう自転車は
断ってしまえば明日は敵になる
廃校に昔しのべと銀杏ちる
寄せ書のように眠った忘年会
内職の儲けはヒップエレキバン

福
間
芳
枝

足裏に父が流転の一代記

肩の荷を一つ形見と子に残し

平和だな四つの影がお茶を飲む

落葉径二人の愛が鳴っていく

逆らった風がいのちの奴隷

大正の郷愁へ餅ふくれ出し

詫びた背が納得いかぬひとり言

血圧が今日の私を支配する

大空の夢を学者のメスで切る

飲み残すコップの底に人生論

福 本 英 子

やがてみな一つに溶ける春の川
騙されてあげようあなたの夢だから
父と子に表情のない朝の膳
ゆび切りの指が突然疼きだす
汚いと思う日もあり母の箸
美しいことわりを言う泣きぼくろ
お隣のフェンスを好きなバラのつる
ひたむきな愛が彼岸の花を選ぶ
南無如来指先あたりむずかゆい
これからをひとりで渡る橋の数

藤井明朗

幸せの合図はだれもしてくれぬ

人生の浮沈ドラマに似て終る

春ひらく老いの泉も少し湧く

帯解いてひとり住いの灯に座る

荷を軽く寄り道もする喜寿の坂

古稀からは歳をとらない化粧する

家族の和ひとつ欠けてるのを探す

自分だけ生きてるようにぐちを言う

雪解けの谷間に躍る春の音

子の夢を育てぬ愛が逃げている

藤井春日

金貯めて心貧しき人のあり
人生の旅路一人落ち二人落ち
他人から見れば仲のいい夫婦
花鍔花の個性を知っている
故里の島は吾が島父母の島
悪女とて綺麗な涙は持っている
栄光の座に転落が待っていた
燻銀の重みを見せて父無言
新緑の匂いにむせぶ車椅子
何時までも美しい母でいて欲しい

藤井高子

石碑の欠けし頃より石の情

千の鶴翔ばして君の笑顔買う

風有情愛の積木をまた一つ

やすらぎは亡母の瞳に湖がある

愛愛と九官鳥を鳴かしむる

散りぎわへライト桜は恥ずかしい

うつらうつらと昔駿馬であった夢

夕凧や私の戒老録綴ろ

みそぎして熟年の首売りに出す

また新の筆で女は虹を描く

藤井 一一三

無造作に活けていのちを失わず
土に生き水の命を知りつくす
水に流すそんな大人の顔になる
無駄かも知れぬ種をせっせと蒔いている
子守唄耳に別れた母がいる
土になる日を数えてる蝉しぐれ
軽口を淋しい風の中で言う
手毬唄十は詠めない過去を持ち
再会の友へ肩書隠しとく
海に貌埋めて夕陽泣いて落ち

藤岡花梢

五月の海は愛の言葉を持っている
鬼の面はずしてみくじひいている
雨の日は雨の音する計算器
歯こぼれのナイフにもある数え唄
靴音がときに私を責めにくる
下ごころひとつ渡れぬ橋がある
風すこし入れて自分をとりもどす
樽から遠く桜も散りはじめ
お別れのそのぬくもりを楯とする
冬の滝裏切ること知っている

藤田 軒太楼

絵に画いた餅に暗示は隠される
再起する決意に軋む車椅子
あっけない幕切れでした芸のなさ
老旗手の歩幅時流に逆らわず
仕来りの根強さ家紋に生き残り
しぶとさが身上保険屋向きに出来
耳打ちの甘言寝た子起される
誘われて引立役と知る集い
天皇の演出帽子を振って足り
気をつける目明きに欲しい白い杖

藤 田 頂 留 子

五里霧中だけど出口はきっとある

判断の可否は歴史にゆだねよう

親馬鹿にゆがんでしまうしつけ糸

もろもろが渦巻いている空地

高野慕情一人ではない鈴の音

案ずるより信じてやろうとつきはなす

善意での言葉できずつくのも女

待つ方が良いと律儀な靴をはく

一人言いわねば言葉忘れそう

老化などまだまだ般若心経とちらない

藤田泰子

誕生の日の新聞にある帆船

私の虹は一彩紅い彩

静脈に流してしまふ青い夢

潮騒は海に沈めてあるピアノ

砂浜はダリの世界のあるところ

放牧に棚の代りの深い谷

公園の裸婦に陽の刑雪の刑

頼まれて捺した拇印に渦が巻く

その時は溶ける覚悟の雪女

浮き沈みやっと港の灯がみえる

藤村の女

便り書くペンの先から届く春

春の風もう猫柳しゃべり出す

惜春の筆をふとおく風の彩

花開く雨はなさけの音で降る

涙は禁物ライバルの眼が光る

くやしさを涙は一人になってから

子に生きたそれだけで母心満つ

子に賭けた夢だけがある母の地図

公園でひとり石蹴る影がのび

移り香の枕に愛が詰めてある

藤 本 行 代

合掌の心を抱いて丸う生き

企みの絵皿に女惑わされ

皿盛りを斜めから見る子沢山

煩惱を夕陽の落ちる海へ捨て

新しいページをめくる手を洗い

天の川方程式は解けぬまま

思案橋の真ん中辺で陽が暮れる

一点を悔いなく廻る夫婦独楽

迷い断ち切る妻がいて子等がいる

母さんの扇子まあるい風が吹く

藤 本 洋之祐

けつとばす石がだんだん小さくなり

上手の手しんしん凍る闇ひとり

すりこぎ人生老父のちびた靴

五分と五分男の眉がピクとせり

チョット豪華に弾む話と動く箸

おおらかな父の料理の落とし蓋

切り札の言葉を舌で遊ばせる

乾杯の男も女も軽い罪

花を抱くおとこに男の夢を聞く

指切りの明日も芝居をするつもり

布施サチコ

アメリカのオレンジが待つ田道間守

主義はいざ知らず倒れた人悼む

身の始末じぶんでつける鳳仙花

講義より余話に魅力のある講師

療養の苦で培った透視力

本能という才能のしたたかさ

ほん少し外れた所にある火縄

如何ほどの掛値か迷う京言葉

ふっきれたとき終焉のベルが鳴る

左足から階段を降りる癖

舟 木 与 根 一

初鏡おまえの皺はきれいだよ

欠点の鼻で似顔絵生きている

粗大ゴミ一層目立ち農繁期

可愛くて孫の尻尾は見ないふり

嫁の目を盗む呼吸が孫と合い

大物と小物うたた寝でもわかり

泣きに来る場所でなかった夏の海

倫理倫理野党は靴の裏を搔き

世の中へ地団駄踏んでいるディスコ

あぶく銭師走を逆に歩いている

船越正

クジ買うて夫婦でちがう胸算用
病んで知る誓いの言葉ままならず
手術前妻のやさしさ気にかかり
下り坂不安な直感だけ当り
狭くても家族が揃う三ヶ日
表替え出来る畳がうらやまし
先生に親も叩けぬ子を預け
急ぎ足ジングルベルが合う師走
爪先を立てて息子と撮る写真
常備薬父の柩に袋ごと

古川 美津枝

泣かないで嫁御衣裳は千代紙よ

何も彼もすぐ手のとどく部屋が好き

地獄でも茂平とならば泣きはせぬ

ほどほどに酔うて丸味の美しさ

大根も双葉のうちに身受けされ

瀬田の橋手甲脚絆で渡りたい

叱られた顔を描いて叱られる

ゴキブリの方がこわいと言っている

くずかごに私の恋を捨てておく

日めくりは一日ずつの春を待ち

古田鈍舟

初夢は妻の乳房を抱いて見る

決意これ仏心写経の筆を取る

絵になりたくて降って来た春の雪

春うららおたまじゃくしがしっぱふる

桜散り果てて毛虫のぶらさがり

ふれあいの太鼓を鳴らす秋の天

深みどり萬年青の静と動といる

透明なガラスが嘘を書かさない

思い出をたどれば川がうづくまる

生きている今生きている石を積む

古田比呂子

大の字よべビーベッドが小さいぞ

さわやかな風へ二歳のパンツ干す

子の髪をなでてなでて満ち足りる

四歳のないしょ聞く耳しあわせで

子を二人のせて自転車たくましい

子を叱る自分の声にハッとす

竿いっばい干して太陽ありがたし

酢かげんは姑にまかせて祝い寿司

煮こごりへなんとはなしに亡母おもう

さかだちをしてみるもひとつの世界

古
谷
節
夫

元旦を寿ぐ国旗が少なすぎ

元旦の日記は夢で溢れそう

喝采は要らぬ大地へ根を下ろし

針持つと亡母に似て来る妻の背よ

直球もカーブも巧く打つ妻で

止まり木へ女だんだん強うなり

青春の匂いかぎたく日記繰る

語り部の祖父から習う手打ちそば

立冬へ譜面も変わる風の音

四捨五入すれば中流かもしれず

古野ひで

入試パス城も桜も僕のもの

あじさいの下で御地藏くすぐられ

寒月夜恋に破れた猫もいる

花でさえ日陰は小さいままで散り

春を編む糸糸ころころ手もはずむ

無理矢理に老人にする書類来る

いい事が重なって来る春が来る

メモ置いて出たがやっぱり気にかかり

言い過ぎた悔いの余韻を抱いたまま

なんとなく紬を選ぶ齢になり

芳
地
狸
村

信楽の女狸にある嫉妬

學歷に小学卒と書く自信

ペン先に力がこもる保証人

定年が宿敵同士を別れさせ

顔見世の幕間は女の彩となる

脈のある少年だから意見する

福娘笹のみどりに映える彩

年金があれば檜山無くて済み

駄目ですと言えずにあとで自己批判

よろこびの酒はじわじわ効いてくる

細川稚代

堪えている女絵筆を放さない

自己主張遠くで雪崩の音がする

家政婦の愚痴を聞いてる腹の疵

御意のまま流されてゆく雛の舟

ひとときの逢瀬へ仮面ぬぎすてる

かりそめの愛かりそめの別れかな

捨て切れぬ人形の目にすくわれる

それなりのわけがあります包装紙

琴線にふれた一言だきしめる

お茶をのむ只それだけでいい二人

堀

いくの

片方は手をつなぐ為あけておく
あの角を曲れば笑顔とりもどす
自立など言わぬに猫が戻らない
潮焼けの笑顔に負けて買っている
これからの暮しに赤い花を選ぶ
風邪の子へ一輪挿しの位置を変え
面ざしの似た人形を買っている
炬燵の上にむつかしい本置いたまま
赤いポストがいちばんあとで暮れてゆく
ほころびを繕うように日記書く

堀江正朗

音だけでも踏みこめぬ世界地図

雪しきり負けたくはない年に負け

人並みの欲手さぐりで描いてみる

善悪の悪は指先には触れぬ

妻ちよつとちよつと長い留守ひとり

禅組めど生きる笑顔のむずかしさ

幸せを音の中から選り分ける

今年こそらしくありたし年男

妻の顔見える気がする秋の空

欲はまだゴム風船をふくらます

堀 江 芳 子

雪月花夫の記憶を埋めよ画布
ほろり酔いましたと女美しい
まだ拗ねているのと夫の背軽く押し
理屈いい方へ自分の独楽廻す
療友とひょっこり生きてきた握手
嫉妬などしない妻だと思ひこみ
疼かせて絆は絶てぬ雲を追う
失明の夫には使えぬ黙秘権
楽しきの余韻するする帯を解く
てのひらに音なく握る運ひとつ

堀
江
光
子

沈黙もそれぞれちがう部屋の中
声持たぬ虫を憐れと蜘蛛逃がす
入り日の道人旅人に見えてくる
他人とは思わないでと他人いう
うれしい時もかなしい時も同じ歌
戦友を全部歌えるおじいさん
ひとりごとの様におばあさん歌う
桃の花とおい昔とおなじ色
虫すだく夜の食事は皆しずか
柿の実の柿色という美しさ

堀 口 欣 一

新世界香車が一つ落ちていた

ふるさとはやっぱりいいなささめ雪

美しい妻で疲れた顔を持ち

マドロスを啜え夜霧の顔にする

勤労の喜びなどと嘘っぱち

本店が頑張っている二階建

神様のような善人逮捕され

橋下で蜷がとれたそのむかし

あいさつが長い室町蛸薬師

中国はみな健康なお下げ髪

堀 端 三 男

ほどほどの距離を保って持つ情け

従いてゆく気だから文句ありったけ

人形の箱には鍵をかけず置く

頂を追う夢があるかたつむり

脱皮へのきっかけ師匠から盗む

青い海いつかは帰る母の胸

無になろうなろうとスタート台へゆく

冴えぬ日は仏の眉も重たそう

横に振る首はあっても縦にせず

米粒にナムアミダブツと書いてある

本 田 惠 二 朗

人生譜描くペンだこの疼く日も
もう一つつかめぬものを追うあせり
無理をすな無心であれと独り言
海図捨て去って勘でゆく老船長
はるかなる思い出は佳し夫婦箸
日向ぼこ木の芽の合唱聞きながら
耐え抜いてつかんだ自信の歩が軽い
無欲淡々余生の四季に詩がある
ちび筆で画く残照へ夢を添え
地にかえるうれしさを舞うぼたん雪

本 多 洋 子

愛と死を見つめて老母はひとりぼち

座り直して老母は何かを言わんとす

死神と仲良くしてはならぬ母

誇り高く生きて明治を通しきる

死ぬ事の厳しさ母の瞳が教え

兄嫁へ老母の重荷を詫び続け

何が見えたのでしょうか静かになった母

母逝きてリングの赤がうら哀し

春の雲に母の命をあずけよう

白磁壺母の笑顔に似て哀し

本
間
満
津
子

銀髪になつたら着たい色があり
覚悟して出れば冬陽があたたかい
俯けば幸せいっぱい落ちていた
澄む水の底にも動くものがある
思い出の街今の風今を吹く
老い呆けの種子いく粒か持っている
黙ってる人と黙ってお茶を飲む
バラ散れば共に散りたいかすみ草
後からくる足音に急かされる
独り居の耳が大きくなってくる

前川千賀子

約束へあなたも踏み絵踏んでくる

一瞬の沈黙受話器にある遠さ

編み棒のひと目ひと目の迷いごと

逃避行例えば秋の男鹿十和田

言い訳をさらさら落とす砂時計

果されぬ約束がある冬木立

餌をやると色褪せていく青い鳥

コバルトの海に染まれぬ深海魚

早春譜子の毬母の手を抜ける

雪しきり白の無限に殉じよう

槇田英詩

こめかみは玩具のピストルでも避ける
逆境にカンシヤク玉の的がない
ひとり旅名もない川で詩を拾う
涙涸れば立ち直るだろう座を外す
ジグザグに歩くと畏が齒がゆがり
母からの便り火薬を湿らせる
灯を消せば睨に今日の悔いばかり
よう喋る女の口をみて飽かず
秋深し妻も近くで何か読み
ちびた靴ちびた男が履いて冬

眞喜内

實

六十路春これから咲く花数えてる

ぽかぽかと暖かくなる君と居る

止り木の蜻蛉とばあさん話してる

ねむるのは神からミルクいただくのです

夕焼に摘まれてりんごよい機嫌

開運の扇はいつも開いてる

花だけに見せる顔して一人居る

散る時が見えてる花を愛してる

みつめてる花うるわしくなあってゆく

小指だけかゆくて長い長い夜

正 本 水 客

眼鏡の雨拭いて山頭火に出合う

昼と夜のはざまの湯煙が和ませる

一列に並んで連帯感がない

仁王さんの背中を押してみたくなる

葉げいとう一日雨が降りやまぬ

祭り笛ひとり来ていよいよ独り

庭を掃く父と一緒に庭を掃く

鯖ずしや母の勝気を懐しむ

タクシーを待たして花屋の花を選ぶ

恩のある人の噂にめぐり会う

増田竹馬

これからが人生余白と言うなかれ
足跡を残そうゆっくり墨をする
一病を抱えて無理をせぬ長寿
友情の手で知恵の輪が解かれ
美しく乱れて本心打診する
傷心へ非情のマイク突きつける
母の国忘れピラニア泡と棲む
代筆の訳を知りたい年賀状
舞扇人間国宝というリズム
眼帯を除けばお里がそこに居る

増田とし

雪折れをした笹の雪除けてやる

カーテンを開けてびっくり雪の高

まだ知らぬ私の故郷は北の国

玉仏の明るくやさしく笑み給う

幻想と夢の中絵の魅惑（デルボー展を見る）

侍が現れそうな武家屋敷

遅がけの年賀の挨拶隣の娘

中三の孫に振袖すすめられ

年齢忘れ赤いセーター買うて着る

ギャル二人手話でとっても楽しそう

松
浦
輝
月

紅葉谷水子地藏は錦着る

水子地藏男に言えぬドラマ秘め

拍子木が鳴って名優見得を切る

年輪の彫りの深さが光る芸

雨宿り思わぬ人と傘の中

見送りの老母の振る手が点となり

父母が逝き古里への道遠くなる

流行に遠い暮らしで皆達者

遺言はアルプス見える丘に墓

脇役がうまく廻って家栄え

松浦礼子

四十坂ころころころところげそう

自分でもわかるお皿を洗う音

一緒にいるだけの幸福をかみしめる

お見事な菊を咲かせて姑達者

本当のこと言いすぎたなと思う

腰かけのつもりをこんなに頼られて

鬼ごっこしながら反省くり返す

何ごともなくて今年も障子はる

ずっしりと嫁には重い格子戸よ

時として胸の高鳴る四十坂

松
尾
柳右子

お叱りの電話へお辞儀二度三度

雪国のなさけ一杯つめた三味

引出しの隅で小さく日章旗

ねばる児にかたい財布の根くらべ

解決へ糸口となる毛一本

税務署がこわいメモ帳一つあり

割引も特別もない陽が炎える

北斉の描けぬ演習富士裾野

懐のラジオあばれる大リーグ

涙つぼ干して女傑の束ね髪

松岡三吉

下駄箱をもう靴箱にしませんか
普段着でいても髭だけ剃りなさい
悪友がタイミングよく今晚は
スタイルがよいから顔を見たくなり
昆虫が笑っていますモデルさん
あかんべーおとこを馬鹿にしたおんな
わからねば浮気をしたいとも思う
極楽の首が盃へのびている
とっくりが転んだように父が寝る
女ごころお風呂だんだん長くなり

松川杜的

辞書を繰るたんびにアカサタナハマヤラワ

活けたなら絵になりそうな冬木立

妻が居て母が居て冬の灯あったかし

自在鉤民話の色に煮えてくる

みかん畑漁師の墓は海を向く

熟年の手の鳴る方へ行きたがり

ラムネ瓶昔噺が詰めてある

十代のあっけらかんと語る性

お地蔵さんの頭が好きな赤トンボ

「歩調トレノ」と言いたいようなブーツ来る

松
下
蕉
露

曾根崎署毎晩違う虎を飼う

三の糸切れて今宵は雪もよい

いけにえは神と祀られ忘れられ

事故現場凍てた舗道に人体図

葬式は生きてる人のために行く

迎え火を焚けば今宵は二人妻

早や十年待たせた夫の墓洗う

身の上を語る筋書できている

小走りに女房従いて波立たず

御免ねの言葉天の邪鬼が食い

松 高 秀 峰

地図にない道も歩いて来る候補

鯉幟り隣の屋根へ行きたがり

聞こえない程度にぼやく嫁しゅうと

仕送りの枠でマージャンまで覚え

少しでも高い利息を追う女

自販機は大事な客も同じ音

栄転の友も肝臓をまたやられ

ぎりぎりに来て特賞のくじを当て

夫婦老い交わす言葉もない炬燵

人間も接ぎ木したいと思う日々

松 永 清 太

赤じゅうたん喧嘩さなかにミグが降り

青春は一銭五厘でさて老後

金持になる程素顔消えてゆき

見直した提言虫の好かぬ奴

両親の行年よりは長生きし

何となく会釈して乗る無料バス

きっかけは酸こんぶ貰ったバスの旅

兵馬俑生ける歴史とめぐり合い

後姿ばかり見せる夢の亡妻

或る日フト渡った橋を戻れない

松原寿子

あなたと言う切符が女の駅にある

憧れは女の芯に棲むあなた

胸の砂漠をうるおす雨となるあなた

鈴が掌に踊るあなたに逢えた日は

逢えた日の鈴はあなたの胸で鳴る

海風いであなたが側にいた目覚め

花の沼あなた慕うは罪なのか

あなたを好きなわたしでいたい瞳が濡れる

手鏡の視野にあなたがいつも居る

思慕一途あなたの海を忘れない

松 本 一 郎

還暦が定年退社道づれに

孫達もその手に乗らぬ四月馬鹿

青葉陰五百羅漢に父を見る

生き甲斐は脛かじる子の居た頃か

肩書きもネクタイもなく趣味に生き

学歴が素直に言える齢となる

冒険が出来ぬ男で自適する

満ち足りた身に何ゆえの隙間風

悪役もあでやかに着る菊人形

一年を人それぞれにしめくくる

松 本 今日子

嫁きし子を思う心に虫の声

出してから後悔してるクイズ狂

黄昏に待ち合わず人帰る人

七日すぎこれから私のお正月

風邪で休んだはずの二人が戎橋

建前と本音が遊ぶ日記帳

答弁につまり出てくるせき払い

風見鶏東西南北うけ流す

左遷され妻と始めて旅に出る

わすれたい傷を他人は肴にし

松 本 忠 三

八十の母から習うことばかり

風呂敷の荷物は母に持たせて居

母の肩あれもこれも荷がかかり

僧籍に身をおく八十路の母厳し

腰かけの積りがのっぴきならぬ義理

辞めろとは言いませんがの肩たたき

逆さまに歩いてみたい時もあり

見ただけの判で許可したものでない

じゃんけんの握り拳をどう開く

騙すより騙される身をあきらめる

松 本 元 江

回れ回れ止めてはならぬいびつ独楽

馬鹿になるつらさ知ってるピエロの目

世話好きな母がかついだ荷がこぼれ

初孫を抱いて五十路の春が明け

夢かける孫の瞳が澄んでいる

苦を楽に変えて五十路の坂登る

も一人の私をとらえていたカメラ

忘れたい想い出もある冬の川

印象のスナップいくつ抱いて冬

命ある限り舞いたい女舞

丸山よし津

花あざみ生きる姿勢は変えられぬ

満足な現在位置の○印

迷惑な車中で組んだ脚線美

器用な手で不幸ばかりを掴んでる

葬儀には艶っぽ過ぎるナレーター

昭和元禄女子大生の華やかさ

青春は戦時下だったが輝く日

障害を持つ子の母の明るさよ

ピノキオの自信過剰の鼻が折れ

宝石も金庫の中では光らない

三 沢 幽 香

きれいごとばかりが並ぶ指定席
目覚しを少し進める意気地なし
デッドボールを弾き返している若さ
どنگりの信念がある日向ぼこ
だしぬけに鬼がふり向くかくれんぼ
人形の捲き毛がゆるみ小さな秋
コスモスが信じきってる青い空
喜んでくれるひとあり栗をむく
こんなにちわさよならがある風の辻
上品な人まで値切る大晦日

水粉千翁

そのときは腹をかかえて笑わんか
見まわして見上げることの多かりき
生きざまへ見果てぬ夢の長さかな
これしきのことの涙を拭くもよし
分け合えるとは満ち足らぬものばかり
長いながいなあがい旅の川のどか
教えたきねがいを下駄が揃えられ
手術台生きねばならぬ冷えを知る
髪撫でてこころ嬉しき孫なるぞ
孤に耐えるこことよりほかに花の下

満
仲
きく子

松林詩人にあえるかもしれず

ほんのりと愛を匂わすチョコレート

その余白花一輪を活けておく

前身を蝶は信じるものですか

はみ出した眉毛坊やの描いたパパ

真実は一つしかない梅雨明ける

花になる人形になる余り布

傷つけた事は知らないバラのとげ

子らはみな恙なしとか赤とんぼ

親不幸母の涙は海となる

水野上
備後桜

どれも齡を一寸はみ出す職さがし

あの星は私の夜の案内者

旧友と昔のみせで飲み明かす

ふる里の方角を向く罪ひとつ

朝起きて顔を洗ってここは何処

菊ばかり褒めて借金切り出せず

詫びながら草を抜いてる墓まいり

墓参り故郷に知人減るばかり

賽銭箱見つめ仮面の手を合わせ

自由業ですいろいろと趣味を持ち

宮尾 あいき

娘から妻へ脱皮の帯を解く

愛の水涸れた私は水中花

子が病めば老いの乳房がうずきだす

ラストまで欲を捨てない安楽死

ふし穴があっても裏はのぞくまい

なるようになるさと思う虫の声

良い話聞く方の耳掃除する

釘一本打てぬ女の顔でいる

まだ暫くこちらに居ます亡だんな夫様

女とは悲しきものよ孕み猫

宮口笛生

金のこと言うなムードがこわれるよ
石段を登れば仏の慈悲に会い
すんなりと折れてこられてまた慌て
つくづくと無職の幸の朝寝坊
冬の樹が確かに新芽抱いている
人間の弱さを酒に支えられ
酒借りて心を満たす負けいくさ
ずけずけと言う友情に嘘が無い
手を合わす心をいつも持っている
波の私語島の女も海へ出る

三宅ろ亭

風鈴は春夏秋の風を知り

春風に応えてネクタイゆるぎ出し

初日目は慈雨二日目からは嫌な雨

ほんとうの男心は漏らさない

夕方になって握り飯ようやく届き

空に雲動かないまま受話器鳴る

ボケかいなアホウかいなと身を叱る

秋風を連れて残暑のお人よし

隙間より忍ぶ寒気の巧者ぶり

古稀越えてなお七彩の虹を抱く

宮崎シマ子

花一ぱいの五月に孫が誕生し
拗ねるのがとっても好きな姫だるま
手を休めたまには周り見てごらん
母さんの頼る長姉がまず背き
みかん剥くみかんもぐ母おもいつつ
席けた男一瞬子を想い
船溜り大声で海の荒れた事
故郷は灯台の灯と父母と
地元には鎮守が一つ寺一つ
落葉焚く煙叙勲を聞いている

宮西弥生

駅ビルが生れ戦争ごっこする

同じ齡三人絵になる春霞

壁掛けの少女と春の夢の中

また一つ年を積んだだけ厚化粧

窓ぎわの男にもらう知恵袋

風は緑男も女も鳥になる

早春の響きに少年まりを蹴る

耳に蓋するとこの世が美しい

傷うけた日から火花もっている

哲学の径で結ばれ主義主張

宮 本 佳 女 男

賞状も貰えず主婦業半世紀

人生の主治医は糟糠の妻だった

誇らしく明治生れと言える齡

居眠りの醍醐味を知る老い二人

来るものが来たと一瞬声を呑み

百歳に照準当てている余生

敗戦に檻褻着て帰るパイオニア

明日への期待に今日を安堵させ

山茶花の褥に佗し細雪

とっおいつ朝の目覚に死を思う

本吉宗光

スピードに酔って地獄に招かれる

王道と庶民の歩く道の距離

野生馬の鼻人蔘をふりむかず

落武者は己の影を踏んで行く

片意地のうろこ落せば地平線

人驕る野鳥の生きる場所を埋め

幸せな話題はじけてすぐ消える

金剛石が幸せと決められぬ

幸せを運ぶ車は急がせず

誰か背を押してるような老いの道

茂見よ志子

雛のつぎ二年目にして兜買う

冷蔵庫満杯にして帰省待つ

里帰り近くする子の布団干す

産む娘より産まぬ私が安定剤

嫁の好くワイン忘れず買って置く

式服の帯を夫に手伝わせ

正月に着せたし夫の袖縫う

境遇が同じ枯葉の吹き溜り

み仏に切る初咲きの庭の菊

花鉢を買って豊かな今日にする

森

鯉子

総白髪五十年ぶりの重い歴史

めぐりあえば禿げっぷりもたのしくて

年金も恩給も平和を祈ります

理念もよし思想もよけれどパン尚よろし

六十年オテンバ心で生きている

環状線孫の子守りは三周め

金のなる樹ある様な顔でロイヤルホテル

この時とばかりでっかく坐るロビーなり

ある様な顔でホーク握ってる

あすからはお茶漬でよしダイナーショー

森

岳
六

生甲斐の友ここにあり硯箱
健やかで孫ひきつれて初参り
神仏の味方に余生の張りをもち
空元氣口ほど体ついて来ず
朝刊も夕刊もなし二日酔い
玄関の横で良かったツバメの巢
居候氣になる冷蔵庫のビール
恋の花みのれと暦が急がせる
健康な農家全員留守の秋
嘯み殺す心よ涙吸ってくれ

森

三枝子

優良児表彰状はママのもの
手ぶらでは帰せぬ姑の虚栄心
若返る煙がほしい玉手箱
サンマ焼く太目を夫の膳に添え
合掌にいらだつ心包み込む
祭壇もお金次第とする展示
触れた手に余熱が残る影を追う
寄付金を電話で話す腹づもり
弁当も枕にされる花見酒
屋上へ春に呼ばれた車椅子

森井

愛

(高二)

力もちのドッジボールがとんできた

(小二)

あやとりのはしご小人はのぼれそう

(小三)

可愛い顔ね鏡がそういった

(小四)

コンパスで書いてもつぶれた丸になる

(小五)

もぐったら海のひみつがつかめそう

(小六)

中学の校舎がお城のように見え

(中一)

雨のグラウンドを見つめている青春

(中二)

創作劇ピタッとクラスメイトです

(中三)

ネクタイは緑素適な春が来る

(高一)

ナンバーワン目指すとしんどい事ばかり

(高二)

森井菁居

生き方の違いを敵のように言う

火あぶりの刑がないから愚を重ね

農民の詩集は非売品でよい

すつからかんになったら渡る丸木橋

食うや食わずでバイブルが読めますか

花好きの僕にはわかる花の私語

無視された一人が正論かも知れぬ

すす竹を割れば先祖が喋りだす

妻に恋してお揃いのシャツを買う

自業自得の泪は乾くまで待とう

森井

紀

(中二)

ひこうきぐも長いおひもをひっぱって

(小二)

おりづるのつるがとんで行くゆめの中

(小三)

かいじゅうの歯がたをリンゴにつける父

(小四)

花の種風がふく日は芽を出すな

(小五)

すばらしい絵をかく同級生無口

(小五)

思い出に会えそう校庭ほってみる

(小六)

母の留守パーティーずしとメモがある

(小六)

酒飲みの父をやさしいから許す

(中一)

お互いに転機と思うクラス替え

(中二)

みんなライバルで朝から燃えてくる

(中二)

森 川 まさお

手袋を脱ぐといたずらしたくなり

なんの話あるのか姉妹よくしゃべり

みな寝るを待って娘はなにか書き

声出してみたくて大きな欠伸する

訪う家の大きさ一度通り越し

水やりの植木にもあるえこひいき

お日さまと対話しているつくしんぼ

一列に家鴨は親のあとを追う

ガッターリと列車左遷の街に着く

見上げてる亀には亀の意地があり

森 下 愛 論

大和路はここからという塔が見え
大和路の日うらに竝ぶ仏たち
ほほえみを見せて日溜りの道祖神
旅人として説法を聴く古き寺
古都の旅終えて仏の顔になり
遍路行く影ものどかな春となり
お遍路の場違いで見るビルの中
ふる里の途も変らぬままに老い
静かなる平和我が家が飽き足らず
興福寺一言頼む鉦をつき

森 田 カズエ

宿命と悟り木魚は耐えている

七転び八起き女は母として泣かぬ

城下町もと花街の連子窓

粕汁を食べて陽気な妻の顔

豆の木を登って星を掴みたい

一丁の鑿に仁王の口が裂け

幸せな雨名園の苔に降り

ストレスをいっぱいつめて胃の下垂

鶏の声に目覚めた日が恋し

奇蹟的ですねと医者が目が和み

森 田 布 堂

巻きずしはこう巻くものと巻いて見せ

無邪気さを撮る誕生日ひまがいたり

写経する墨も片方減ってくる

財布ごと渡して妻を疑わず

質屋からこれは偽物だと言われ

夕暮れの灯をふるさとの山は抱き

灯台のその灯にたよる沖仲仕

仏壇に絵日記がある児の法事

愛情の深さを別居気づかせる

海の死の記憶港に風が鳴る

森脇和子

どの鬼のタクトで狂うつむじ風

干し草の匂いが残る父の背な

ニコニコと日課こわしに孫が来る

人並みに母となる日の毛糸玉

妻となり時計を五分進めとく

指きりの約束ちぎれ雲にのる

針運ぶ後姿の母が好き

子の許へ移り住む日の積木積む

平凡な花道だった共白髪

一コマを名作にするぶらり旅

八木千代

青空をうつすと狂う蛇の瞳よ
ままごとは終つて破る紙の皿
隠し絵にきのうの雪が降りつづく
砂時計ひと粒ずつのあきらめよ
落ちてから本音吐こうとする椿
蓋をしたピアノを風のまん中に
水甕があふれて朝をうたがわぬ
標的をしぼるとすれば月の弦
月の弦鉄の槌よりしたたかに
一本杉の血がにじみ出す 月は中天

八木芳水

退職の留守居なんでもメモしてる

おしまいは金に絡んだ内輪もめ

入れかえた心を試すネオンの灯

奉仕品に真ごころ添えて繁盛し

貧しさに嘘と知ってもついて行く

嘘承知そうかそうかと聞いてやり

縄のれん名前ともかく顔なじみ

譲ること悟り心の角が消え

心眼を開いて善を身につける

早起きの散歩で句想練ってくる

安田志津

船場ゆくふとこいさんに会えそうで

バスツアー土産と疲れを持ち帰り

西隣りの出来が気になるミニ菜園

この齡でチョコレートでもなく和菓子

握んでも掌からこぼれる愛の砂

別れぎわ見上げた星も泣いていた

岐れ路風の誘いに乗ってみる

茜雲小さい悔いが追いかける

胸はって立っても影のないわたし

これという不満のなさが物足らず

八 塚 三五島

七人もいるかな靴の紐結ぶ

ぽんぽんと柏手無我の音で鳴り

勝ち負けの鍵の一つは運が持ち

肩車されて夜店を通り抜け

实例を聞くとあいつかと思ひ

空しさを贅沢という金で埋め

飾り気の無い野性味につい惹かれ

もう紳士止めてジャンパー党になり

赤を着て男の春を謳歌する

楽も家海も野山も広く住み

柳原静香

春の精夫婦に手などつながせる
夫婦かな聴こえぬまままで通じ合い
もう六十まだ六十と紅をひく
誘われて付録のようについてゆき
母の日のなかつた亡母へ花を剪る
春や憂し膝の小猫もみごもりて
嫁かぬ娘のころは聞かず覗かせず
聴こえないことも一つの武器として
黒を着て女華麗な彩をもつ
母さんを古いふるいで片付ける

矢野佳雲

腕時計今日も暮らしの枷をはめ

こんな子がご近所に居た夏休み

ファスナーが嚙んだとボタンそうれ見ろ

先生と呼ぶと四五人振り返り

冗談だハハハと本音呑みくだし

寝ていても吐息で動く蝶の羽

水槽の鯛は蛍光灯の色

凡人の日々ゴム印をおすごとく

上りつめふっと戸惑う揚げヒバリ

妻よ出て見ないか街は春の風

矢 萩 貞 子

先生も主婦買物は自転車で

瀬戸の海島影うすく灯がともる

玄関に突然噂の人が立ち

立久恵の五百羅漢は川を見る（立久恵峽）

夜の客冷たい風をつれて来る

メーデーを主婦マンションから眺め

雨蛙鳴いてみたけど雨降らぬ

川柳が支えとなって白い杖

母さんがグローブはめてコーチする

煙突の先に半分だけの虹

山内静水

何くわぬ貌で止っていた時計

相槌へちっともぼけてはいなさらぬ

狙撃は覚悟ふらねばならぬ旗

拍手鳴り止まぬ徹底した音痴

鬼火ゆらゆら政治劇終る

川柳馬鹿三人寄って夜がまろし

御歳はゼツタイ言わぬおばあちゃん

戦争はまっぴら七草粥する

険悪な空気へ妻が運ぶお茶

おかげさま十と二貫メ異状なし

山内房子

内助の功などと勿体ないお賞め

春陽燦々もうやまうち娘ではない

沐浴へうす目あけたりつむいだり

雪しんしん孫のおしめはどうしてる

一合を夫婦で湯豆腐ふきながら

一と休み桜はらはら散る畠

せわしゅうてご先祖様に掌を合わせ

わらべ唄松ぼっくりがぼとり落ち

ご先祖の供養夫婦で盆踊る

勿体ない齡を忘れた初扇

山片紀雄

「ひまわり」が列島地図を刷毛で撫で

犬よりも綱曳く朝の顔なじみ

想い出し笑い頬染め周り見る

人形峠に怖いウラン棲む

憎からず心のスイッチ触れてみる

友好の絆みかんは甘くない

生中継狭い地球に和がほしい

テレビっ子押して見るだけ字が書けず

蜷取り春を一緒に掬いあげ

北の人耐えて粘った底力

山川克子

いつの世も故郷母の手の温み

幸せは細くて長い道の先

懸命に歩む必ず虹に逢う

転んではならぬ人生旅半ば

大空へ狭い心は通じない

過ぎ去れば修羅も絵となる唄となる

生きている喜び今日も頼られる

人生も所詮ゲームだよ諭される

永遠のテーマやっぱり愛だろう

パズル解く矛盾だらけに生きながら

山下登舟

ひとときも同じ様なし霧の山

ひれ酒に罪をかぶせる悪い酒

国民を背負う陛下の背がまるい

子等巢立ち加速度がつく老いの坂

割勘の顔をきかせた後のつけ

金婚の喜びスナップからあふれ

忘れたい事を掘出す事件記者

真直のに引けぬまずしい設計図

紅灯の蔭に屋台の灯を守る

風邪気味の妻と仲よく玉子酒

山下みつる

核の傘返したいからデモに行く
紛争を他人の顔で見る日本
基地の町耳医者どこも大はやり
脈々と革命の血が子に継がれ
不沈艦寝言や夢で済まされぬ
お田植は住吉さんへ行って見る
じわじわと禁煙場所がふえてくる
ジパンの娘が神妙に針を持つ
長旅をして来たカモへ銃の音
くるくると心境かえた娘も巣立ち

山田妙子

大根のうま味が増して外は雪
湯の香り外の寒さを丸くする
通らねばならぬ処に犬が居る
したたかな女豪雪連れて来る
旧姓で呼ばれてまるい返事をし
嬉しい日五本の指がよく弾む
ひと雫女の武器は残しとく
遠い傷桜咲く度うずき出す
五人目もやっぱり可愛い子沢山
これからは隠れる穴も探しとく

山
根
いつを

一度だけ妻にお礼を言うつもり
重い荷で泣いたこの道いま散歩
子宝をさずかり指の石外す
かたつむり決心などはせずじまい
もててもてて左程美人でない美人
早起きの母頼られてたよられて
走っても歩いても着く川堤
生きてゆく恩に一つも報いずに
見渡すと周りに数えきれぬ恩
輝きを望まぬ鉄の黒光り

山 本 規 不 風

少年の絵に鍵かけた箱がある

お隣が好きで垣根を越えた薔薇

わたしのコンピューターにあなたの手の温み

グラス透して運命線が伸びている

生い立ちを話して女目をつむる

初恋を追う夢がある柩まで

完結のない猿芝居の主演

渡り鳥都会の風を置いてゆく

先決を女の愛が泡にする

二号から見れば本妻価値がない

山本公

核戦争あの世でそっと眺めたい

砂浜の土人追われてビル並ぶ

耕地呑む布哇五世の龍生る

珈琲園ナイチンゲール姿消す

コナ珈琲天上知らずに飛び上り

誕生日四年に一度若返り

閏年誕生待った昔有り

岩壁に逆まく怒涛海唸る

ケヤの峯白帽被りお嫁入り

蹴る石のなくて怒りが止まらない

山本三郎

ベルを押しふと気がつけば他人の家

やじ高し子供の野球見る大人

ホームラン屋根に当ってはね返り

よろこびも悲しみもしわに刻んでる

ぶらんこに大きくゆれるパパの顔

又しても傘を忘れたバス発車

顔色をほめてばかりの見舞客

赤字でも学校の貯金もってゆく

手づくりの芋今日掘るか明日掘るか

風船ゆれる子供のみこし街をゆく

山本玉恵

父の手に母を返して子等巢立ち
明日なら打明かされるこの想い
今宵ふと亡夫の愛がほしくなり
畳替えすれば外野がさわぎ出し
夢を抱く女をさそう青い鳥
未来凶へ心ときめく線を引く
鯛やきの温さ家路へ急かされる
生甲斐をくれた小さな糸電話
逢う丈を小雨がそっと邪魔をする
交番も優しい人か紙のひな

山 本 テルミ

御利益を信じ遍路の心澄む

子の咳へ母の耳だけ起きている

あれ買うての孫が寝る

五百羅漢どれがわたしの顔だるか

神様に聞えて欲しい独り言

脱ぎすてたまま朝になる留守ひとり

京訛りに心がなごむ伏見の酒

金だけが頼りじゃないと知った老い

残り物パツパツとすてる現代っ子

お水取り今年やっぱり雪を見て

結城君子

山峡の案山子やっぱり紺がすり
手を触れば手を染めそうな桔梗咲く
慎重に慎重に白桃市へ行く
人格者或日人間ですと言ひ
風邪引いて長篇一気に読み下し
六月の雨だから白の傘にする
ライバルが対角線にいる不安
横面をはった悲しみ掌に残り
不可解な左遷に浮ぶ顔一つ
やかましい家族羨む時もある

行 吉 照 路

種蒔いて反旗振る日をじつと待ち

残り火が消えたら闇の檜山よ

雨しとど鬼はぼつんと手をこまね

自惚れの風がつまづく車椅子

平の椅子だから足台にも化ける

流れ矢が過信の背に突きささり

門灯がピエロを主人として迎え

吊橋も張切る男の子が通る

恍惚のパスポートには手をつけず

点と線姥捨山に突きささり

横山一声

滝に落ち岩に砕けて水が澄み
絶景の松の根岩を割って生き
貝殻の過去を海は語らない
長屋に住んで家紋が立派すぎ
先生もやっぱり辞書を見て教え
情熱の炎に壺の色を賭け
一寸ずつ積んだ塔が崩れない
念入りに拝んで団体からはぐれ
へそくりを挟んだ本の名を忘れ
屈かない所に好きな花がある

吉岡 きみえ

自画像にだけは聖女の目を入れる

愛されぬ女こよなく酒愛す

三角の愛は八分であきらめる

人形も夜のムードに目をつむる

四面楚歌電話のベルさえ鳴らぬ日か

花一輪摘んだ罪は消えやせぬ

正念場妻が化粧せぬ日がこわい

日曜日仮面を脱いだ父が好き

縫い針のさびておんなでない女

山椒のとげにスリルふとおぼえ

吉岡美房

元旦や晴着とわかる声が行く

梅林でそっと夫婦の手が触れる

病室へ入る笑顔を用意する

天国の妻へ聞きたいことばかり

妻の喪があければ桜散っていた

不幸だと思えば不幸掌の表裏

砂山を越えれば蟻の視野がある

異端者になりたくなくて旗を振る

十二月やのにとぼやく留置場

戦友会俺だけ残る日のこわさ

吉田笑女

皇后のお髪も白いお立ち台

百度踏む素足へ春の息吹きする

そこはかと亡母の香りのよもぎ餅

人生のドラマ写して居る車窓

もうこんな時間になつて立ち話

亡母何故か私一人をよく叱り

本心を明かせば廻る独楽の芯

古く良き時代を恋うる箸枕

浴衣着て家族で詣る盆の墓

ぼたん鍋冬の丹波は雪の中

吉水照江

出店の灯消えて目刺の香が残る
孫も年スターと同じ髪かたち
日だまりへ猫も老母の後を追う
遠くから富士は見るもの雪帽子
散らかした部屋に親子の味がある
根性で生きて根性は捨てられず
エリートに育て老後は一人者
神様は男女の数をまちがえぬ
生涯をがんこで通した皺の数
街を行く景気上々触れ太鼓

吉本千代

寿と言われるまでの長寿なり

曾孫の数をかぞえて年のこと

涙とまらず亡き夫の日記読む

八十のカラオケもまたいきなこと

満開に咲く時待って縁結び

約束を守る男のいい笑顔

泣き顔をうつして又も泣きはじめ

あやまちの姿うつせば澄む鏡

臨終に花散る前の言葉あり

一夜漬人の心は変るもの

米 澤 曉 明

生き場所がここにもあつた屋根の草

伏し目がち言えば言うことある女

素顔までお見せいたして気に入られ

ふり上げた腕どうおろす気の仁王

つながれて春待ちわびる鶺鴒飼舟

人並みと思う女が少なすぎ

なり年の柿あっちからこっちから

偏差値がどうあろうとも子は宝

食品か栄養剤かお薬か

取消しの取消しがある早合点

和井觀洋

掌を離れてからの風船気まま

臟腑がぐつつぐつ煮えている吹雪

雨蛙泣くだけ泣けば寝つくやろう

ペラペラと無駄口叩いていく風よ

煙草をぶかりぶかりと企みぬか

ポケットの嘘を非常食とする

倦怠期お皿の縁は欠けやすし

日曜日は僕お母さんお父さん

父は父母には母の冷蔵庫

蛇口からコトコトコトと集金人

和海草春

もう脈のない肩書ははずれさる

まごころの付合いもあるスラム街

河内弁同士であっさりケリがつき

肩で息して後悔はしてません

離さないマイクへ一人去り二人去り

肩書は無いけど僕の親父です

帆船に海の女をかいま見る

草野球の宣誓している河内弁

饗終えて幹事残った靴をはく

素人の修理は傷をして終り

若林一止

満腹が乳首くわえたまま寝入り

敷布団地図を見せないように乾し

空っぽのびくが重たいペダル踏む

座り込み解いて妥結の旗を巻き

ライバルの友情変化球で来る

白皙のかつては赤と言いし人

脇役が唄えば悲し枯れすすき

併せ呑む濁肛門にひっ掛り

大根も芋も煮ようの辻おでん

六十がまだ恥ずかしい夢をみる

若宮武雄

春雨に高層ビルも伸びている

孟蘭盆会 先祖に詫びる事多く

未練とはいえぬ梢の二三葉

地藏さんのまわりは優し冬の風

ははの骨埋める深さにまだ迷い

“ありがとう” 妻に一度は言うつもり

善人の顔して花をほめている

一本でこれこの通りおらが酒

大臣は無理だよ君は嘘が下手

嘘つき奴ッなぜ政治家にならなんだッ

若柳潮花

警策の音禪堂は冷えて来る

詰び目が解けたら切れるかも知れぬ

すだれ巻く指がきれいな紗の単衣

人妻が女に見える日の愚か

木を切らぬ与作がビクを提げて出る

盆梅の影が屏風へのびて来る

かしの式角屋に夜の灯がともる

春の雨牡丹の彩を砂が吸う

えりあしへ浮気すすめる宵の風

怖いから自分のビデオだけは見ぬ

脇田米朝

大らかな笑顔に胃ぐすりなど要らぬ

喝采の嵐の中にいる涙

得意芸チャンス待ってる胸の内

笛吹けば太鼓も叩く友を持ち

神と鬼その真ん中に僕がいる

べんちゃらの下手な大工で腕が冴え

回診の医長の笑顔が目を通る

天ぷらと肉に攻められお手を上げ

一ランク下りれば楽な日々が明け

欲つゝの掌から倅せこぼれ落ち

鷺見章

スポーツ紙ひろげて易者所在なし

樟脳を匂わせ通夜の客でいる

どさ廻り踊り衣裳の夜繕い

胸襟を開けばボトル横になる

保釈金娑婆の空気は眩しすぎ

追いつかぬ家計の穴を児がひろげ

出囃子に楽屋と違う顔をのせ

事故現場芋屋いつもの笛でくる

好き嫌い多いねずみで捕まらぬ

砂場から生れたような児がかえり

渡 部 さと美

振袖に声も優しくなってくる

立ち話ふえて女に春が来る

春の夜に地声の大きな客がくる

ガス消して好取組へ座り込み（大相撲初場所）

土曜の夜こっそりニンニク効かしとく

荒磯に抱かれて生きる海女の村

途中下車ひまとお金が折り合わず

御先祖もさぞ暑かろう花と水

つぎはぎの人生きれいな色もあり

とも角も稼げる事はありがたし

渡
辺
独
歩

輪の中で焚火に解けてゆく掟

忍従の女が練っている謀反

チアガール勝利の女神へ直訴だな

鐘一つ鳴らして一つ罪洗う

潮を汲む女は潮の子を宿す

トルコ風呂呂聖女が見えぬ糸を引く

約束を包むベールは秋に買う

北の海鱗のうすい魚が棲む

コラム読む消化不良の痩せ蛙

悪人の耳にも嘘のない時計

渡 辺 菩 句

僕だけの世界を一字ずつ歩む
日向ぼこいのちを充電してる
人の句を囓むように餅食べてみる
格子戸のどこからみてもいる仏
零という数が宇宙とも見える
あしたという未来へ蔦のはい上り
仰臥して空百枚をめくり読む
純粹な馬鹿になりきれそうな秋
時々ハートへ希望という注射
魔術師の自分が自分消してみせ

和田 維久子

握手する温もり人を信じよう

石穿つその一滴がものを言う

一行の重みボールペン無言なり

思慕の人次々遠く雪解道

赤い糸ではほころび縫えぬかも

頁繰る山程のこと思わずに

愚痴捨てて胸におさめる彩さがす

人の胸よそこに波止場のドラの風

さよならの涙は又逢う涙とも

一枚の紙になさけを待っている

索引 (五十音順)

あ

青戸 田鶴……………	四
赤川 菊野……………	五
赤木 和子……………	六
赤沢 周子……………	七
秋元 てる……………	八
浅野 房子……………	九
麻野 幽玄……………	一〇
朝山千世子……………	一一
芦田 静江……………	一二
安達 清路……………	一三

い

尼 緑之助……………	一四
天崎 只士……………	一五
阿萬 萬的……………	一六
荒谷シゲヨ……………	一七
淡路ゆり子……………	一八
安藤寿美子……………	一九
安平次弘道……………	二〇
飯田 悦郎……………	二一
飯森 泰世……………	二二
池 森子……………	二三

石川侃流洞……………	二四
石垣 花子……………	二五
石倉美佐子……………	二六
石手向上庵……………	二七
石手 武……………	二八
石原 淑子……………	二九
板尾 岳人……………	三〇
市場没食子……………	三一
市楽 種子……………	三二
伊藤 春子……………	三三
糸谷 春草……………	三四
稲田 豊作……………	三五

う

稲葉 星斗……………	三六
稲葉 冬葉……………	三七
稲本 凡子……………	三八
井上 照子……………	三九
井上柳五郎……………	四〇
今西 静子……………	四一
岩田 美代……………	四二
岩田 三和……………	四三
岩本 笑子……………	四四
岩本雀踊子……………	四五

上江渕勝子……………四六
上田登志美……………四七
上田 佳秋……………四八
上原 逸……………四九
植松 慶子……………五〇
植村客遊子……………五一
植山 武助……………五二
牛尾 緑良……………五三
内芝登志代……………五四
内海 幸生……………五五
有働 芳仙……………五六
宇野 昭代……………五七
浦野 和子……………五八

え

江口 度……………五九
榎本 吐来……………六〇
円増 貞子……………六一
お
大江 竹子……………六二
大江 雅子……………六三
大川 幸子……………六四
大坂 形水……………六五
大塚 節子……………六六
大野 武太……………六七
大原 葉香……………六八
大矢 十郎……………六九

大山 と金……………七〇
岡井やすお……………七一
岡田 ふみ……………七二
岡林 千鳥……………七三
岡本 清水……………七四
岡本 天平……………七五
奥 礼子……………七六
奥谷 弘朗……………七七
奥田みつ子……………七八
小澤 幸泉……………七九
落合 正江……………八〇
小野 克枝……………八一
小畑 幹子……………八二

か

嘉数兆代賀……………八三
笠嶋恵美子……………八四
笠原 吸江……………八五
樫谷 郁子……………八六
樫谷 寿馬……………八七
鍛原 千里……………八八
片上 明水……………八九
加藤 貞山……………九〇
角野かず子……………九一
門脇 楓……………九二
門脇かずお……………九三
金井 文秋……………九四
金戸 瑞昇……………九五

金川 満春……………九六
 神谷凡九郎……………九七
 神平 狂虎……………九八
 紙本 松女……………九九
 河合 茂雄……………一〇〇
 川上 溪水……………一〇一
 川上 大輪……………一〇三
 川口 弘生……………一〇三
 川崎 秋女……………一〇四
 川竹 松風……………一〇五
 河内 月子……………一〇六
 河内 天笑……………一〇七
 川端 柳子……………一〇八
 河原扶未子……………一〇九

川村 映輝……………一一〇
 川村 好郎……………一一一
 川元いさむ……………一二三
 神夏磯道子……………一二三
 き
 紀市 郁栄……………一二四
 菊田いさむ……………一二五
 岸田ユキエ……………一二六
 岸田 将稔……………一二七
 岸野あやめ……………一二八
 岸本豊平次……………一二九
 岸本 木魚……………一三〇
 北 勝美……………一三三

北川 竹萌……………一三三
 北川とみ子……………一三三
 北田 綾子……………一三四
 北野 久子……………一三五
 北村 寛子……………一三六
 北山 凡太……………一三七
 吉川 寿美……………一三六
 橋高 薫風……………一三九
 木塚 素石……………一三〇
 清野 こう……………一三三
 行天 千代……………一三三
 く
 久家代仕男……………一三三

草刈 墮駄……………一三四
 日下部逸蝶……………一三五
 楠 貞子……………一三六
 楠 美佐雄……………一三七
 工藤 甲吉……………一三八
 久保 和友……………一三九
 久保 正敏……………一四〇
 栗谷 春子……………一四一
 栗原 隆……………一四二
 栗原 富子……………一四三
 黒川 紫香……………一四四
 黒田 真砂……………一四五
 黒田よしを……………一四六
 桑原 伊都……………一四七

桑原 喜風……………一四

こ

小池しげお……………一四

小出 智子……………一五

越田みつ子……………一五

児島与呂志……………一五

小島 蘭幸……………一五

越村 枯梢……………一五

小谷 仙山……………一五

児玉 歌子……………一五

後藤 火鳥……………一五

後藤 正子……………一五

小西 雄々……………一五

小林 生代……………一六〇

小林 一夫……………一六一

小林孤呂……………一六一

小林 妻子……………一六一

小林トメ子……………一六一

小林由多香……………一六一

さ

雑賀 美世……………一六六

斎藤 通風……………一六七

斎藤三十四……………一六八

細呂木魯木……………一六九

酒井 靖子……………一七〇

榊原 秀子……………一七一

坂口 公子……………一七三

坂根 流水……………一七三

坂部紀久子……………一七四

坂本仙吉郎……………一七五

桜井 千秀……………一七五

里 小路……………一七五

佐藤 方昭……………一七六

佐藤 仁昭……………一七六

佐藤 藤子……………一七八

佐藤 令子……………一七八

佐野 白水……………一七八

澤田 千春……………一七八

し

塩田新一郎……………一八四

塩満 敏……………一八五

直原七面山……………一八六

柴田英壬子……………一八七

島崎富志子……………一八八

清水 健司……………一八九

清水 康恵……………一九〇

白岩 文衛……………一九一

白髪 末……………一九二

新谷 笑痴……………一九三

新開千代女……………一九四

す

菅井とも子……………一九五

杉浦婦美子……………一六九

杉本智慧子……………一七〇

鈴木かつ子……………一七六

鈴木 節子……………一七九

鈴木 良征……………二〇〇

せ

妹尾 春江……………二〇一

そ

曽我部 裕……………二〇二

園田 文子……………二〇三

園山 栄……………二〇四

園山多賀子……………二〇五

た

高木 桃里……………二〇六

高須賀金太……………二〇七

高杉 鬼遊……………二〇八

高杉 千歩……………二〇九

高田よしを……………二一〇

田形 美緒……………二一一

高野 宵草……………二一二

高橋千万子……………二一三

高橋 操子……………二一四

高見はまれ……………二一五

瀧北 博史……………二一六

田口 虹汀……………二一七

武 俊春……………二一八

竹内花代子……………二一九

竹内すみ子……………二二〇

竹中 綾珠……………二二一

田崎あき子……………二二三

多田あや子……………二二三

立床 晴風……………二二四

田中 亜弥……………二二五

田中 国彰……………二二六

田中 好啓……………二二七

田中 笑風……………二二八

田中 正坊……………二二九

田中 柳人……………二三〇

谷 三柳……………二三一

谷 真風……………二三二

谷垣 史好……………二三三

谷口 信子……………二三四

谷出巳三代……………二三五

玉井 豊太……………二三六

玉置 重人……………二三七

垂井千寿子……………二三八

丹下 玉子……………二三九

ち

千原 理恵……………二四〇

丁坪サワ子……………二四一

つ

月原 宵明……………二四二

辻 圭水……………二四四
 辻 白溪子……………二四四
 辻 文平……………二四四
 辻川 守……………二四六
 恒松 町紅……………二四七
 坪田 紅葉……………二四八
 津守 柳伸……………二四九
 津山 冬子……………二五〇

て

寺井 東雲……………二五一
 寺沢みど里……………二五二
 寺田 裕美……………二五三
 天正 千梢……………二五四

天満三千代……………二五五

と

土居 耕花……………二五八
 土井 輝恵……………二五九
 東野 大八……………二五九
 遠山 可住……………二五九
 富上 光代……………二六〇
 土岐トク子……………二六一
 時末 一灯……………二六二
 時広 一路……………二六三
 徳田しずか……………二六四
 都倉 求芽……………二六五
 富田 康子……………二六六

な

仲どんたく……………二六七
 中井榮美子……………二六八
 仲井 素水……………二六九
 中川 幸一……………二七〇
 中川 滋雀……………二七一
 中島生々庵……………二七二
 中島 小石……………二七三
 中島 正博……………二七四
 中田 野川……………二七五
 中西兼治郎……………二七六
 中根 勇太……………二七七
 長野 文庫……………二七八
 中原 汲香……………二七九

に

中原比呂志……………二八〇
 中原 諷人……………二八一
 中原みさ子……………二八二
 中村 優……………二八三
 中村 有人……………二八四
 中村ゆきを……………二八五
 仲本こうじ……………二八六
 柳楽 鶴丸……………二八七
 灘尾 民子……………二八八
 難波 久夫……………二八九
 難波 久代……………二九〇
 新岡回天子……………二九一

西尾 栞……………二九三
西田柳宏子……………二九三
西出 楓葉……………二九四
西岡 豊……………二九五
西岡 洛醉……………二九六
西川 景子……………二九七
西口いわゑ……………二九八
西村かすみ……………二九九
西村 早苗……………三〇〇
西本 保夫……………三〇一
西森 花村……………三〇二
西山 草笛……………三〇三
西山 幸……………三〇四
二宗 吟平……………三〇五

二宮 山久……………三〇六
仁部 四郎……………三〇七
の
野坂 なみ……………三〇八
野田 宵風……………三〇九
野田素身郎……………三一〇
野田 實……………三一
信本 博子……………三二三
野村 静雄……………三二三
野村 きみ……………三三四
野村太茂津……………三三五
野呂 右近……………三三六
野呂 鶴汀……………三三七

は
梅谿庵朝翁……………三三八
萩原みね子……………三三九
橋元 美恵……………三三〇
長谷川春蘭……………三三二
長谷川鮮山……………三三三
波多野五楽庵……………三三三
羽津川公乃……………三三四
服部明陽軒……………三三五
花田たけ志……………三三六
羽原 静歩……………三三七
浜本 義美……………三三八
林 荒介……………三三九
林 瑞枝……………三三〇

林 すて……………三三一
林 澄子……………三三三
林 露杖……………三三三
林 はつ絵……………三三四
林野 魁光……………三三五
原 さよ子……………三三六
原 仙波……………三三七
原 独仙……………三三八
春城 年代……………三三九
春城武庫坊……………三四〇
故
春名 米花……………三四一
吐田 公一……………三四二
ひ

樋口 匍底……………三三
日阪 秋子……………三四
人見 翠記……………三五
平井 照子……………三六
平井 露芳……………三七
平田 実男……………三八
平田 たけよ……………三九
平野百合子……………四〇
平松かすみ……………四一
弘津 柳慶……………四二

ふ

福井 桂香……………四三
福浦 勝晴……………四四

福士 トキ……………四五
福田あや子……………四六
福原 悦子……………四七
福間 芳枝……………四八
福本 英子……………四九
藤井 明朗……………五〇
藤井 春日……………五一
藤井 高子……………五二
藤井一二三……………五三
藤岡 花梢……………五四
藤田軒太楼……………五五
藤田頂留子……………五六
藤田 泰子……………五七
藤村 女……………五八

藤本 行代……………五九
藤本洋之祐……………六〇
布施サチコ……………六一
舟木与根一……………六二
船越 正……………六三
古川美津枝……………六四
古田 鈍舟……………六五
古田比呂子……………六六
古谷 節夫……………六七
古野 ひで……………六八

ほ

芳地 狸村……………六九
細川 稚代……………七〇

堀 いくの……………七一
堀江 正朗……………七二
堀江 芳子……………七三
堀江 光子……………七四
堀口 欣一……………七五
堀端 三男……………七六
本田恵二朗……………七七
本多 洋子……………七八
本間満津子……………七九
前川千賀子……………八〇
榎田 英詩……………八一
眞喜内 實……………八二

ま

正本 水客……………三三三
増田 竹馬……………三九四
増田 とし……………三五五
松浦 輝月……………三九六
松浦 礼子……………三九七
松尾柳右子……………三九八
松岡 三吉……………三九九
松川 杜の……………四〇〇
松下 蕉露……………四〇一
松高 秀峰……………四〇二
松永 清太……………四〇三
松原 寿子……………四〇四
松本 一郎……………四〇五
松本今日子……………四〇六

松本 忠三……………四〇七
松本 元江……………四〇八
丸山よし津……………四〇九

み
三沢 幽香……………四一〇
水粉 千翁……………四一一
満仲きく子……………四一二
水野上備後桜……………四一三
宮尾あいき……………四一四
宮口 笛生……………四一五
三宅 ろ亭……………四一六
宮崎シマ子……………四一七
宮西 弥生……………四一八

宮本佳女男……………四一九

も
本吉 宗光……………四二〇
茂見よ志子……………四二一
森 鯉子……………四二二
森 岳六……………四二三
森 三枝子……………四二四
森井 愛……………四二五
森井 菁居……………四二六
森井 紀……………四二七
森川まさお……………四二八
森下 愛論……………四二九
森田カズエ……………四三〇

森田 布堂……………四三一
森脇 和子……………四三二

や
八木 千代……………四三三
八木 芳水……………四三四
安田 志津……………四三五
八塚三五島……………四三六
柳原 静香……………四三七
矢野 佳雲……………四三八
矢萩 貞子……………四三九
山内 静水……………四四〇
山内 房子……………四四一
山片 紀雄……………四四二

山川 克子……………四三
山下 登舟……………四四
山下みつる……………四五
山田 妙子……………四六
山根いつを……………四七
山本規不風……………四八
山本 公……………四九
山本 三郎……………五〇
山本 玉恵……………五一
山本テルミ……………五二

ゆ

結城 君子……………五三
行吉 照路……………五四

よ

横山 一声……………五五
吉岡きみえ……………五六
吉岡 美房……………五七
吉田 笑女……………五八
吉永 照江……………五九
吉本 千代……………六〇
米澤 暁明……………六一

わ

和井 観洋……………六二
和海 草春……………六三
若林 一止……………六四
若宮 武雄……………六五

若柳 潮花……………六六
脇田 米朝……………六七
鷺見 章……………六八
渡部さと美……………六九
渡辺 独歩……………七〇
渡辺 菩句……………七一
和田維久子……………七二

- 担当 橋高薫風／谷垣史好／高杉鬼遊／河内天笑
田中正坊／小出智子／赤木和子

誌寿還暦記念句集『川柳塔』

昭和59年6月25日 印刷

昭和59年7月1日 発行

(非売品)

発 行 者 西 尾 葉
発 行 所 川 柳 塔 社

大阪市阿倍野区三明町2-10-16

ウエムラ第2ビル

電話 (06) 629-6914

振替 大阪 8-33368

